

対話による思考の共有化

― 集団思考において、3つの条件を満たせば、みんなの思考が見えてくる ―



学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方
～思考力・判断力・表現力を育む指導と評価～



研究紀要第42号の発刊に当たって

上川教育研修センター所長 小 谷 要 次

人間の予測を超える社会の変化は、ますます加速度を増し、子どもたちの生き方に影響を与えとの指摘があります。学校教育においては、複雑で予測困難な社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合い、新たな価値を創造していく子どもの育成が課題となっています。中央教育審議会から次期学習指導要領の改訂に向けた答申が昨年12月21日に公表されました。「これからの教育課程には、社会の変化に目を向け、教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ、社会の変化を柔軟に受け止めていく『社会に開かれた教育課程』としての役割が期待されている。」と述べられています。さらに、次期学習指導要領が、「学びの地図」として、子どもたちが身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容などを学校や地域、社会の関係者等と共有するとともに幅広く活用されることが求められました。

教育改革が進行する中で、これからの教員には、「カリキュラム・マネジメント」の実現をはじめ、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善や学習評価の改善・充実を推進する力が必要になってきています。教育活動の成否は、いつの時も子どもたちと直接向き合う教員の資質・能力の向上が鍵となります。

このような状況の中、上川教育研修センターでは、研究主題を「学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方」、副主題を「思考力・判断力・表現力を育む指導と評価」と設定し、3か年計画を立て研究を推進し、まとめの年度を迎えました。過去3年間の研究では、年度ごとに「3段階の言語活動」「思考の明確化」「対話による思考の共有化」というキャッチフレーズを掲げ、研究の焦点化・重点化を図るとともに、私どもの主張が明確になるよう努めてきたところです。

その結果、思考力・判断力・表現力を高めるために教師のねらいと手立てを明確にすることにより、確かな学力を育成する授業の構築ができたこと。また、授業実践後やセンター発表会における研究討議の仕方においてグループ討議を多く取り入れるとともに、討議の内容を構造的に板書するなどして参加型から問題解決型へと検証の在り方を変えてきたことなど、3年間の研究成果を明らかにすることができました。一方で、学習指導要領の改訂を見据えながら、次年度からの17次研究につながる課題も明らかにしてきたところです。

上川教育研修センター研究室の使命は、上川管内の先生方にとって、校内研修や個人の授業づくりにヒントとなるような理論と実践例を発信することです。すなわち、「ここを自校の子どもの実態に合わせたなら使えるぞ。」と思っただけのような汎用性を重視して研究を推進してきました。そして、ここに研究紀要第42号を発刊できますことを大変嬉しく思うところです。

結びに、研究推進に当たり、御指導・御助言を賜りました北海道教育庁上川教育局義務教育指導班並びに旭川市教育委員会教育指導課の皆様には厚くお礼申し上げます。そして、平成28年度の研究協力校として御協力をいただきました当麻町立当麻小学校、旭川市立北鎮小学校、旭川市立西神楽中学校の皆様には心より感謝申し上げます。研究紀要第42号の発刊の言葉とします。

（平成29年3月31日）

目 次

発刊に当たって

第Ⅰ章 研究の概要・・・3

- 1 研究主題及び副主題
- 2 求める児童生徒像
- 3 研究の仮説
- 4 研究内容
- 5 研究の進め方
- 6 研究計画の概要
- 7 研究の全体構造

第Ⅱ章 研究の内容・・・7

- 1 第16次研究のねらい
- 2 研究の具体

第Ⅲ章 研究員の授業実践

- | | | | |
|------------|------|---------|----------|
| ○鷹栖町立鷹栖中学校 | 第2学年 | 英語科 | |
| | 授業者 | 齊 藤 悦 代 | 研究員・・・23 |
| ○旭川市立大有小学校 | 第1学年 | 算数科 | |
| | 授業者 | 馬 場 大 輔 | 研究員・・・43 |

第Ⅳ章 研究協力校の授業実践

- | | | | |
|-------------|------|---------|---------|
| ○当麻町立当麻小学校 | 第2学年 | 国語科 | |
| | 授業者 | 高 田 裕 輔 | 教諭 |
| | 研究部 | 泉 宏 史 | 教諭・・・63 |
| ○旭川市立北鎮小学校 | 第2学年 | 算数科 | |
| | 授業者 | 松 尾 留 実 | 教諭 |
| | 研究部 | 加 藤 大 介 | 教諭・・・77 |
| ○旭川市立西神楽中学校 | 第1学年 | 体育科 | |
| | 授業者 | 五十嵐 敬 | 教諭 |
| | 研究部 | 山 上 伸 也 | 教諭・・・91 |

研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・105

あとがき

コラム

- コラム 1
紀要の活用の仕方 (P 1)
- コラム 2
16 次研究を振り返っての研究室の思い (P 2)
- コラム 3
大切にしたい「思考の明確化」 (P 21)
- コラム 4
スタートは教師の「ひと手間」だった
「対話による思考の共有化」 (P 22)
- コラム 5
国語科における
「対話による思考の共有化」 (P 76)
- コラム 6
理科における「対話による思考の共有化」 (P 90)
- コラム 7
算数・数学科における
「対話による思考の共有化」 (P 104)

H26年度からH28年度まで、センターは第16次研究(3カ年計画)に基づき研究をスタートさせました。その成果と課題について実践を通してまとめたものが、この紀要です。しかしながら全部を読むのはなかなか大変です。そこで、このコラム1では、読まれる方のニーズに合わせた紀要の活用方法をお知らせします。



理論の作り方を
学びたい校内研修
担当者

「第Ⅰ章 研究の概要」P3～

主題設定から研究の全体構造図までの一連の流れが書かれています。

「第Ⅱ章 研究のねらい」P7～

16次研究がどのように考えられているのか、今年度実践を具体例として提示しながら書かれています。

算数科 小学1年「たしざん」(教育出版)P43～

国語科 小学2年「かさこじぞう」
(教育出版)P63～

算数科 小学2年「かけ算九九づくり」
(教育出版)P77～

授業づくりの参考資料をお探しの方

小学校での実践

英語科 中学2年「ミニ英語新聞をつくろう」
(教育出版)P23～

保健体育科 中学1年「器械体操」
P91～

中学校での実践



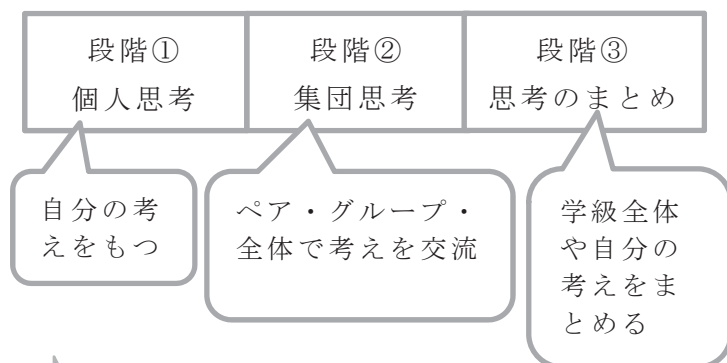
まずは気軽にちょっとだけ
読んでみようという方は

コラム1～7

- 1 紀要の活用の仕方 P 1
- 2 16次研究を振り返っての研究室の思い P 2
- 3 大切にしたい「思考の明確化」 P21
- 4 スタートは教師の「ひと手間」だった
「対話による思考の共有化」 P22
- 5 国語科における
「対話による思考の共有化」 P76
- 6 理科における
「対話による思考の共有化」 P90
- 7 算数・数学科における
「対話による思考の共有化」 P104

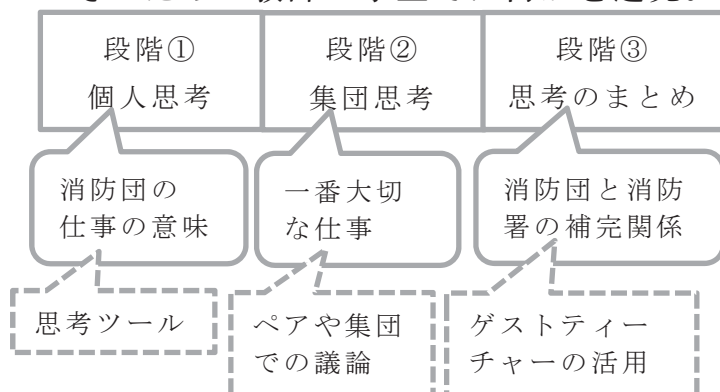
3 段階の言語活動

本時目標が「思考・判断・表現」の時は、
3 段階の言語活動を設定する。



思考の明確化

各段階で児童生徒に何を考えさせるのか、
そのための教師の手立ては何かを追究。



※上の吹き出しが考えさせたいこと
下の吹き出しが教師の手立て

対話による

思考の共有化

より質の高い集団思考を追究し、対話に
よる思考の共有化を成立させる条件を設定。

①話合いの目的や明確なゴールの設定

②互いの考え方の理解や違いの見える
化を促す工夫

③集団思考に最適な場の設定

研修センター所長室の横にある秘
密？の小部屋。

そこは我々「研究員」が毎週火曜午後
に集まり理論検証を行う「研究室」であ
ります。

我々の営みは、管内の各学校で行われ
る校内研修や個人の授業づくりのヒント
となる理論と実践を発信することを
目的にしています。

ですから、研究において何より重視し
てきたのは「汎用性」。

「ちょっとここをアレンジしたら自
分の実践に使いそう。」このように感じ
ていただけたら、我々としては無上の喜
びであります。

3 か年計画で進めた 16 次研究は毎年
度毎に左のようなキャッチフレーズを
提示し、授業を通して理論を検証してま
いりました。

今後、各学校の校内研修においては、
即効性があり日常の指導に役立つ「研
修」にも重きが置かれていくことと思ひ
ます。

しかしながら、仮説検証型の研究は、
教師力を根底で支え、未来の実践につな
がる「基礎研究」と捉えることができ、
今後も大切にすべきことと考えます。

16 次研究は、こうした思いをもちなが
ら「どのように単元を構成するか」「本時
の目標に到達させるための手立ては何
か」にこだわって取り組みました。

どうか「基礎研究」を行う際にご一読
いただき、気軽にアレンジしながら利用
していただければ幸いです。

第 I 章 研 究 の 概 要

- 1 研究主題及び副主題
- 2 求める児童生徒像
- 3 研究の仮説
- 4 研究内容
- 5 研究の進め方
- 6 研究計画の概要
- 7 研究の全体構造

1 研究主題及び副主題

学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方 ～思考力・判断力・表現力を育む指導と評価～

(1) 主題設定の理由

今日、我が国においては、グローバル化や少子高齢化の進展、知識基盤社会の本格的な到来や地球規模の課題への対応など、変化が激しさを増し、一層先行きが不透明な社会へと急速に移行している。

学校教育にあっては、先の改正教育基本法において、21 世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成が求められ、実現すべき具体的な目標として「知」の世紀をリードする創造性に富んだ日本人、国際社会に生きる教養ある日本人などの育成が明記された。

また、現行の学習指導要領では、生きる力となる「確かな学力」「豊かな人間性」「健やかな体」の知・徳・体をバランスよく育むことが重視された。特に、基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと身に付けさせること。自ら考え、判断し、表現する力を育てること。そして、学習に取り組む意欲を養うことが強調された。

一方、児童生徒の学力の状況については、全国学力・学習状況調査や各種国際学力調査の結果から、知識・技能の習得については一定の水準に達しているが、知識の活用力をはじめ、判断したことの理由を示しながら自分の考えを述べることや、自己肯定感や学習意欲などに課題があることが明らかになっている。

このような中であって、児童生徒が変化を乗り越え、力強く生き抜いていくためには、他者と協働しながら、課題に対応する力、生涯学び続ける力が必要となる。すなわち、これからの学校教育においては、他と関わり合い学び合う中で、新たな価値の創造に挑み、未来を切り拓く力を身に付けることが大切である。とりわけ、児童生徒自らが課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習を通して、課題を解決するために必要な「思考力・判断力・表現力」を日々の学習指導の中で伸長させていくことが重要である。

また、学びを支える豊かな人間関係や学習規律など学級経営における指導の充実を本研究の基盤にしたいと考えた。

これらを踏まえ、上川教育研修センターでは、第 15 次研究までに明らかにしてきた「問題解決的な学習過程を基盤とする目標達成に向けた具体的な方策」、「形成的な評価に重点をおいた学習評価の工夫」等についての成果に基づき、学びの基盤を礎として、

- 目標・指導・評価の一体化を目指した授業構築を行うこと。
 - 問題解決的な学習過程において、効果的な言語活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育む学びの場面を意図的に設定すること。
 - 効果的・効率的な評価の在り方について研究を行うこと。
- を通して、学習指導の改善・充実を目指すこととした。

(2) 主題のおさえ

① 主題について

「学び合い」では、児童生徒一人一人の学びに基づき、他者と交流しながら、互いに理解を深め、考えを統合・収斂させるなど、思考を発展させ、確かな学びに高めていくことを指す。

「確かな学力を育てる」とは、基礎的・基本的な知識・技能の習得と、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度を育むことである。

「学習指導の在り方」で目指すことは、問題解決的な学習を取り入れながら、目標・指導・評価の一体化を図ることである。

そして、これらの礎となるのは、学年・学級経営を基盤とした自己存在感や共感的な人間関係を育てるとともに、自己決定の場を設定したり、学習環境を整備したりするなど組織的に学びの環境を整える日々の営みである。

② 副主題「思考力・判断力・表現力を育む指導と評価」について

児童生徒一人一人が、問題解決の場面で、既習の知識や技能を活用しながら互いの考えを交流し、共通点や違いに気付くなど協働的な学び合いを通して、自己や集団の考えを深め、発展させていく。その際、児童生徒の学習状況を的確に把握しながら、目標・指導・評価の一体化を図ることが重要である。

2 求める児童生徒像

基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、それらを活用して思考力・判断力・表現力等を高めながら、主体的に課題を解決することができる児童生徒

3 研究の仮説

学びの基盤を整備し、児童生徒の思考の流れに沿った問題解決的な学習過程の中に意図的・計画的に言語活動を位置付け、目標・指導・評価を整合させることにより思考力・判断力・表現力を育み、確かな学力を育てることができるであろう。

4 研究内容

学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方を検証するために、次の内容について研究する。

研究内容 1 ～指導計画の工夫～

- (1) 目標・課題・まとめ・評価の整合
- (2) 言語活動を各教科の特性に応じて意図的・計画的に位置付ける単元構成

研究内容 2 ～授業展開の工夫～

- (1) 学習内容を明確にする導入と学びを振り返る場の設定
- (2) 育みたい思考力・判断力・表現力を明確化し、言語活動を位置付ける学習過程
- (3) 思考力・判断力・表現力を育む発問・板書・学習形態

研究内容 3 ～学習評価の工夫～

- (1) 効果的・効率的な評価の工夫
- (2) 学ぶ意欲を高める自己評価の在り方

5 研究の進め方

- ◇ 文献や実践資料に基づく理論研究を週 1 回の定例研究室会議及び夏季、冬季の集中研究室会議において進める。
- ◇ 各年次とも、上川教育研修センターの研究員及び、研究協力校の授業実践を基にして理論を検証し、研究紀要にまとめる。
- ◇ 研究紀要にまとめた内容は、「センター研究発表会」において発表し、研究協議で明らかにされた成果と課題を基に、研究の深化・発展を図る。
- ◇ 本研究の主体は、国語科、社会科、算数数学科、理科、生活科、音楽科、図工美術科、技術家庭科、保健体育科、英語科の 10 教科である。

6 研究計画の概要

平成 26 年度から平成 28 年度にわたる 3 か年において、問題解決的な学習過程の中に意図的・計画的に言語活動を位置付ける学習指導の在り方を継続して研究する。

1 年次 平成 26 年度授業実践（所員 2 名 研究協力校 3 校）

旭川市立旭川第三小学校	国語科（第 2 学年「音読げきをしよう！」）	竹 中 一 三 研究員
旭川市立明星中学校	数学科（第 1 学年「文字と式」）	青 木 賢 二 研究員
東川町立東川中学校	国語科（第 1 学年「竹取物語」）	
旭川市立愛宕小学校	算数科（第 3 学年「1 けたをかけるかけ算の筆算」）	柳 澤 麻 弥 教諭 菊 池 杏 子 教諭
旭川市立東光小学校	理科（第 4 学年「もののあたたまり方」）	大 山 み の り 教諭 浅 田 則 行 教諭
		佐 藤 忍 教諭 平 井 佐 知 教諭

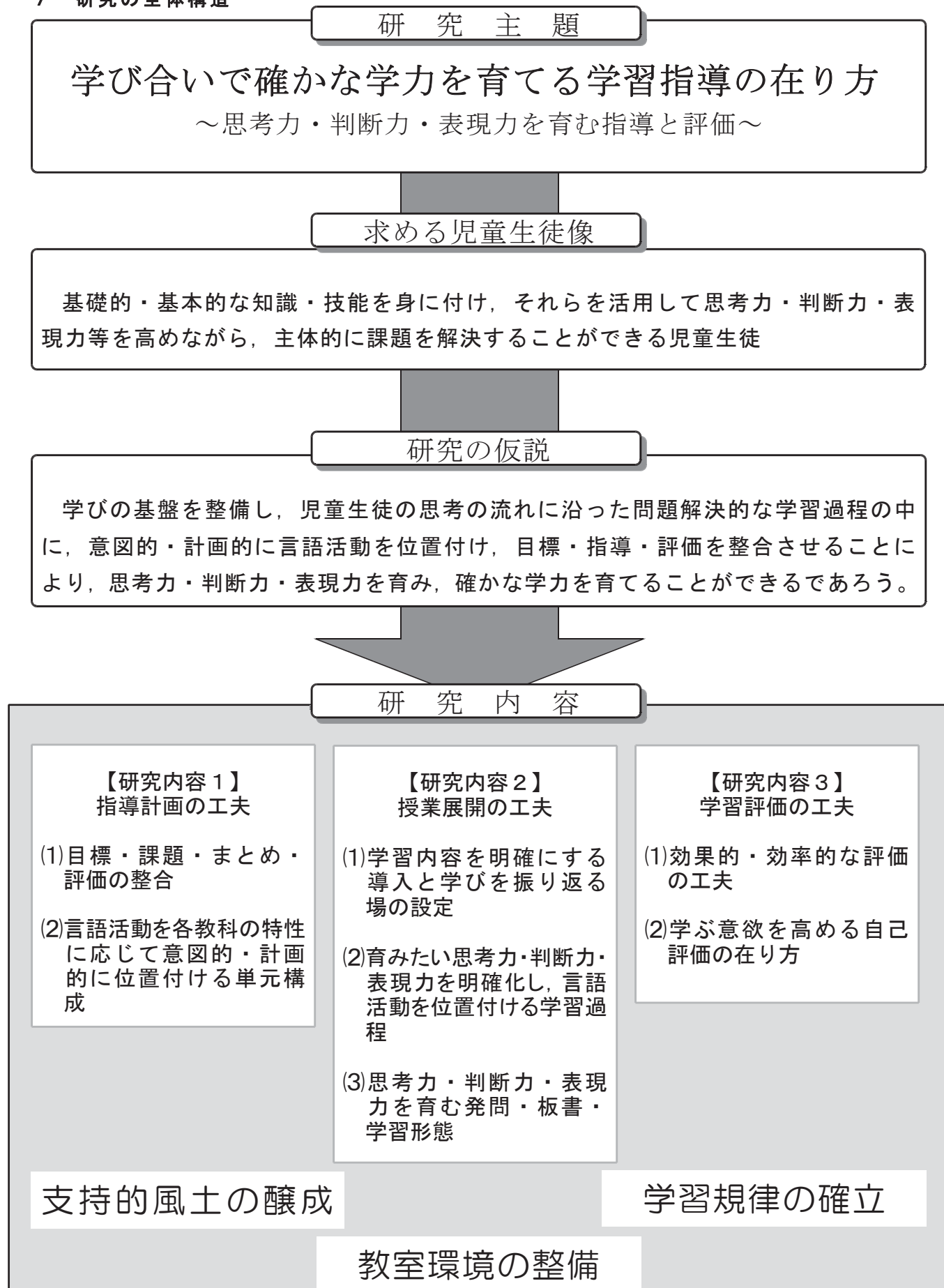
2 年次 平成 27 年度授業実践（所員 2 名 研究協力校 3 校）

東神楽町立東神楽小学校	社会科（第 4 学年「安全なくらしとまちづくり」）	小田島 充 彦 研究員
旭川市立神居東小学校	生活科（第 2 学年「いきいきキラキラ生きている」）	川 村 貴 弘 研究員
東神楽町立東聖小学校	算数科（第 6 学年「比」）	
旭川市立末広小学校	国語科（第 3 学年「つたえよう、楽しい学校生活」）	井 谷 泰 成 教諭 鏡 雄 介 教諭
旭川市立神居東中学校	数学科（第 3 学年「円周角と中心角」）	漆 戸 七 生 教諭 西 坂 有 紀 教諭
		佐 藤 繁 隆 教諭 志 満 香 奈 枝 教諭

3 年次 平成 28 年度授業実践（所員 2 名 研究協力校 3 校）

鷹栖町立鷹栖中学校	英語科（第 2 学年「Project1 ミニ英語新聞を作ろう」）	齊 藤 悦 代 研究員
旭川市立大有小学校	算数科（第 1 学年「たしざん」）	馬 場 大 輔 研究員
当麻町立当麻小学校	国語科（第 2 学年「音読発表会をしよう」）	
旭川市立北鎮小学校	算数科（第 2 学年「かけ算九九づくり」）	泉 宏 史 教諭 高 田 裕 輔 教諭
旭川市立西神楽中学校	保健体育科（第 1 学年「器械体操」）	加 藤 大 介 教諭 松 尾 留 実 教諭
		山 上 伸 也 教諭 五十嵐 敬 教諭

7 研究の全体構造



第Ⅱ章 研 究 の 内 容

1 第 16 次研究のねらい

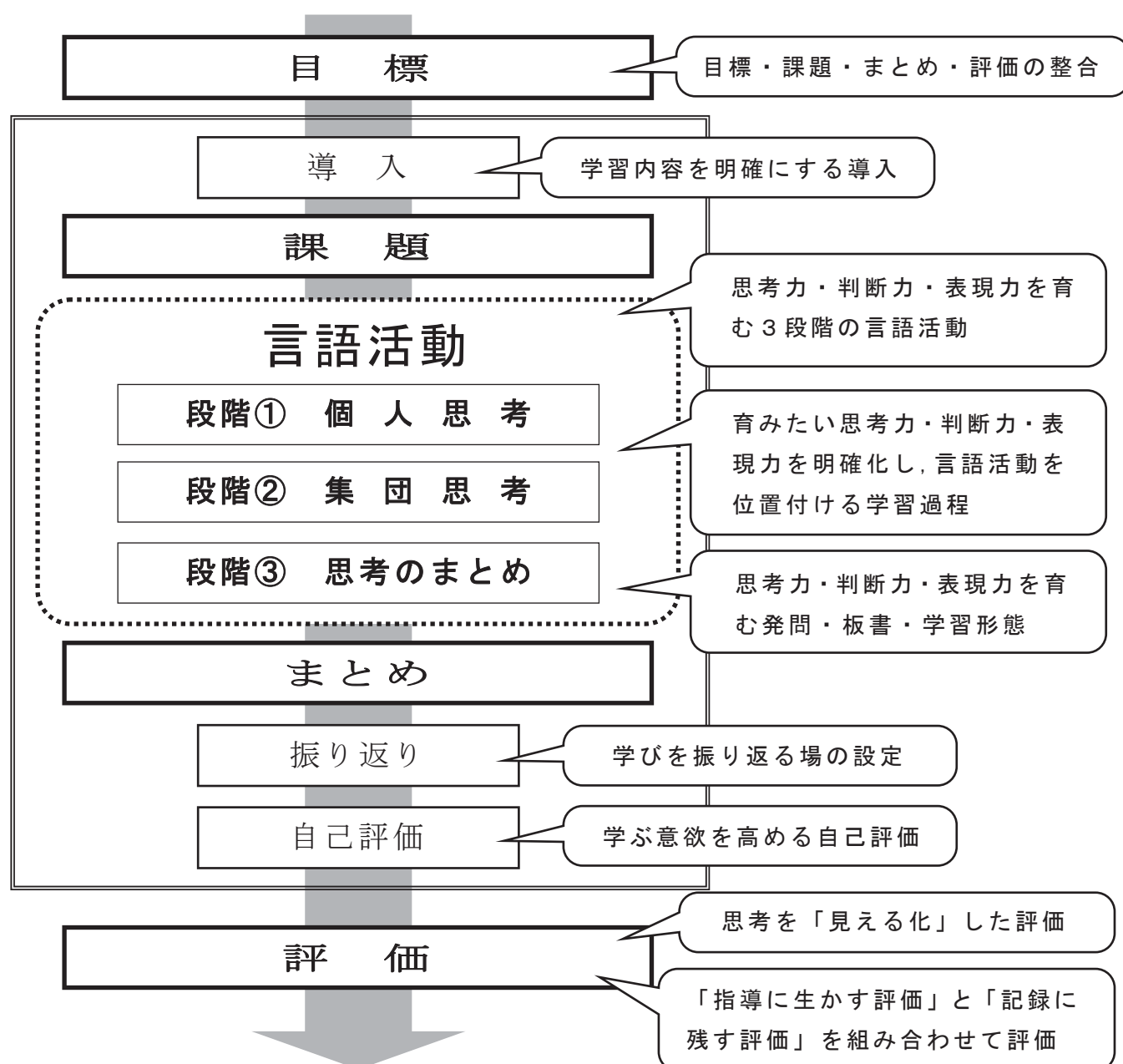
2 研 究 の 具 体

1 第16次研究のねらい

本研究は、児童生徒一人一人が基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、それらを活用して思考力・判断力・表現力を高めながら、主体的に課題を解決することを目指している。児童生徒一人一人が学び合いで確かな学力を育てていくためには、学びの基盤を整備し、児童生徒の思考の流れに沿った問題解決的な学習過程の中に、意図的・計画的に言語活動を位置付けるとともに、目標・指導・評価を整合させることにより、思考力・判断力・表現力を育むことが重要である。

そこで、本研究では、「指導計画の工夫」「授業展開の工夫」「学習評価の工夫」を研究内容とし、思考力・判断力・表現力を育む指導と評価の在り方を研究の骨子とした。

◆思考力・判断力・表現力を高める1単位時間の授業モデル◆



研究内容 1

指導計画の工夫

確かな学力を育てるためには、単元や題材、1 単位時間の指導計画において、目標・課題・まとめ・評価を整合させるとともに、問題解決的な学習過程の中で、児童生徒の思考の流れに沿った授業を展開していくことが重要である。また、思考力・判断力・表現力を育むために、言語活動を意図的・計画的に設定することが必要である。

そこで本研究では、目標・課題・まとめ・評価の整合と各教科の特性に応じた言語活動の位置付けについて考えることとした。

**目標・課題・まとめ
・評価の整合**

単元及び1 単位時間の目標は、学習指導要領における目標と内容を踏まえるだけではなく、児童生徒の実態や前単元までの学習状況、当該単元で育てたい力等を総合的に判断して設定する必要がある。

単元及び1 単位時間の学習課題や学習内容は、児童生徒一人一人が目標を理解するとともに、学習への興味・関心を高め、主体的に課題解決に取り組むことができるように設定することが大切である。また、学習課題や学習内容は、児童生徒の実態を踏まえ、単元や1 単位時間の目標と関連付けたものとする必要がある。

単元及び1 単位時間のまとめは、目標及び学習課題や学習内容と正対した内容とし、問題解決的な学習過程においては、児童生徒の思考の流れが途切れないように設定することが大切である。

評価は、単元及び1 単位時間の目標が達成される場面に位置付け、その評価規準は、目標を達成した児童生徒の姿を想定し、具体的に表記する必要がある。このように、目標に応じた評価を計画的に位置付けることにより、目標と指導と評価が整合し、学習内容の確実な定着を図ることができる。と考える。

◆目標・課題・まとめ・評価が整合している例

※小学1 年算数科「たしざん」指導案
(11時間扱いの4 時間目) から抜粋
→ 第Ⅲ章 研究員の授業実践 P 48

【指導目標】 1 位数+ 1 位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算する仕方を考えることができる。

目標・課題・まとめ・評価規準を見比べて整合しているかを確認しましょう。

【課 題】(被加数分解の仕方で考えている) ゆみさんの仕方をブロックで説明しよう。

【ま と め】 (ゆみさんは) まえのかずをさくらんぼ(計算で解いている。)

【評価規準】 1 位数+ 1 位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算する仕方を考えている。

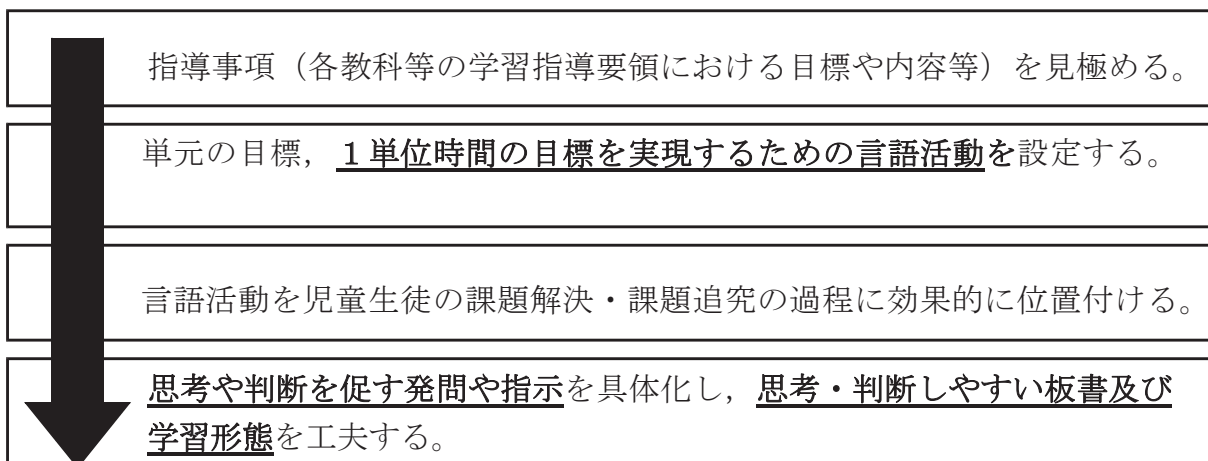
**言語活動を各教科の
特性に応じて意図的
・計画的に位置付け
る単元構成**

言語活動は、学習指導要領に示された各教科等の目標を実現するために、授業の構成や展開を考える中で効果的に位置付けることが重要である。

国語科では、言語能力そのものを育成する教科として、「身に付けさせたい言語能力を育成するのにふさわしい言語活動」という視点で言語活動を設定する。それに対して各教科等では、国語科で培った言語能力を生かし、「それぞれの教科等の目標を達成するための言語活動」を設定することになる。このように、各教科等においては、固有の目標があり、言語活動の位置付けは「目標を達成するための手段」であることを踏まえ、効果的な言語活動を、意図的・計画的に設定する必要がある。なお、指導や評価を行う上では、言語活動を表記しておくことが大切である。

◆言語活動の設定の仕方

言語活動は、以下のような手順で設定します。



どのような言語活動を行えば目標を達成できるのかをポイントに言語活動を設定します。

国語科も含めて、各教科等の指導における言語活動の位置付けは、「言語活動を通して指導事項を指導する」ということであり、このことによって当該教科等の目標の実現、内容の習得を目指すことが重要である。

言語活動が単に活動だけに終始することのないよう、言語の役割を踏まえて、単元の指導計画や1 単位時間の授業に位置付けることが大切である。そのためには、言語活動の結果、児童生徒が書いたり話したりした内容について「既習の言葉が正しく使われているか」「その教科の学習に必要な言葉や概念が使われているか」などを確認することが大切である。言語活動は知識・技能を活用する場面での学習活動の一つであるため、その教科の学習に必要な言葉や概念の指導を十分に行っておく必要がある。

◆言語活動（個人思考・集団思考・思考のまとめ）の設定例

※中学校2年英語科「Project 1 ミニ英語新聞をつくろう！」指導案の単元計画（13時間扱い）から抜粋

→ 第Ⅲ章 研究員の授業実践 P26～

3段階の言語活動を授業に取り入れるとこのようになります。本時の目標を達成するために、各段階でどのような言語活動を行えば効果的なのかを吟味して設定しましょう。



自分の考えを説明したり、過去にあったことについて話したり、条件を示したりして、文と文のつながりに注意してまとまりのある文章を書くことができるようにしよう。

1時間目【自分の考えを説明しよう。】

段階①個人思考

→話題を選び、自分の考えを書く。

段階②集団思考

→自分の考えを発表し合い、他者の考えを知る。

段階③思考のまとめ

→接続詞thatを使った正しい文の構造を理解する。

5・6時間目【条件を示して自分の計画などを述べよう。】

段階①個人思考

→示された条件について、自分の予定を書く。

段階②集団思考

→相手の予定に対する感想を交えて対話文を完成する。

段階③思考のまとめ

→接続詞ifを使った正しい文の構造を理解する。

11時間目【予定や経験をまとめてミニ英語新聞を作ろう。】

段階①個人思考

→教科書のフミオの記事を1文ずつに分けたものを、文と文のつながりに注意して順を追って並べる。

段階②集団思考

→個人で考えた記事の構成を交流し合い、分かりやすい英文の構成について考える。

段階③思考のまとめ

→集団思考を参考に記事を振り返り、文章のまとまり・意見や考えの表現の仕方などを改善する。

研究内容 2

授業展開の工夫

思考力・判断力・表現力を育成するためには、1 単位時間の授業の中で「これから学ぶこと」と「この授業で学んだこと」の確認をするとともに、児童生徒の実態や授業展開に応じて思考を明確にする複数の手立てを講じることが重要である。

そこで、本研究では、学習内容を明確にする導入と学びを振り返る場の設定、育みたい思考力・判断力・表現力を明確化し言語活動を位置付ける学習過程、思考力・判断力・表現力を育む発問・板書・学習形態について考えることとした。

学習内容を明確にする導入と学びを振り返る場の設定

毎時の授業においては、児童生徒が学習の見通しをもち、解決の道筋を振り返りながら学びを深める場を設定することが大切である。そこで、本研究では、授業の導入と終末にそれらの場を意図的に設定することとした。

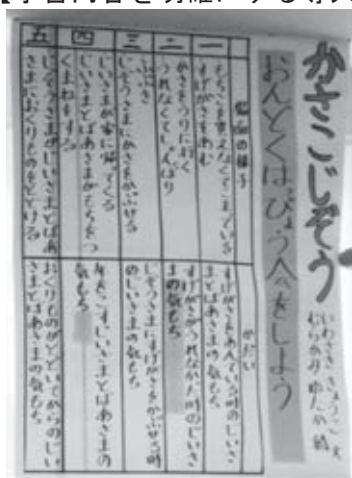
導入では、「今日は単元の中でどの位置に当たる学習なのか」や「今日は何ができるようになる」とよいのか」などを児童生徒に分かりやすく示すことが大切である。また振り返りの場においては、「今日は何について議論されたのか」や「学習したことで大切だったことは何か」などについて教師が児童生徒と確認することで、本時の学習内容を定着させることにつながり、自分の思考の経緯を意識できるようになると考える。

◆学習課題を明確にする導入と学びを振り返る場の具体例

※小学 2 年国語科「音読発表会をしよう」指導案から抜粋

→第三章 研究協力校の授業実践 P70

【学習内容を明確にする導入】



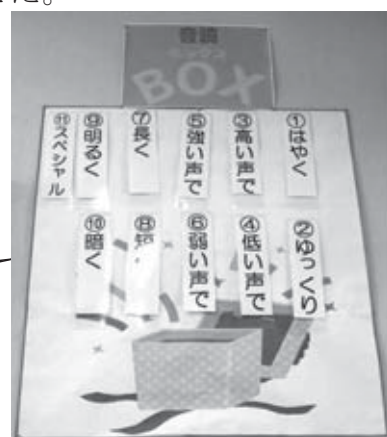
本時の学習内容を分かりやすく提示することで、児童生徒は何をどのように学ぶかを見通すことができました。

○単位時間の導入では、学習計画表を用いて、本時の学習内容について見通しをもたせた。

【学びを振り返る場】→

○音読発表会でどのような読み方をするのか確認させた。

1 単位時間の終末に学習内容を振り返る場面を設定することで、児童生徒は学習を振り返り、何を学んだのかを再確認することができました。



育みたい思考力・判断力・表現力を明確化し、言語活動を位置付ける学習過程

児童生徒主体の問題解決的な学習の中で、思考力・判断力・表現力を育成するためには、教科の特性に応じて、1単位時間の中に3段階の言語活動を意図的・計画的に位置付けることが効果的である。

その際、段階①個人思考では、自分の考えをもたせたり、その考えをどのように表現したりするのかを考えさせる。段階②集団思考では、自分の考えを他者によりよく表現するとともに、他者との伝え合いを通して、多様な考え方に触れさせる。段階③思考のまとめでは、再び自分の考えをまとめさせたり、深めさせたりする。このように、3段階の言語活動の各段階において、「児童生徒に何を考えさせるのか」をはっきりさせ、そのために、「発問・板書・学習形態」など教師の手立てを工夫することが大切である。

◆思考力・判断力・表現力を育む3段階の言語活動

段階① 個人思考



段階② 集団思考



段階③ 思考のまとめ

- ・学習の課題に対して自分の考えをもったり、分からないところを自覚したりする。
- ・自分の考えをどのように表現するか考える。

- ・自分の考えを自分の言葉で表現することで、考えを整理したり深めたりする。
- ・他者との伝え合いを通して、多様なものの見方・考え方に触れる。

- ・他者の見方・考え方に触れることで、再び自分の考えをまとめたり、深めたりする。

どの教科でも、段階①→段階②→段階③の順番になるとは限りません。
→第Ⅲ章 研究員の実践 P43 小学2年生活科を参照
→研究紀要40号 第Ⅳ章 協力校の実践 P85 小学4年理科を参照

思考力・判断力・表現力を育む発問・板書・学習形態

【発問】

児童生徒の思考を促し、主体的に課題解決に取り組む態度を養うためには、教師の適切な発問や指示が重要である。「個人思考」「集団思考」「思考のまとめ」の各段階において、どのような発問や指示が、児童生徒の思考を促し、深めるために効果的なのか考え、実際の授業を展開していくことが大切である。

本研究では、発問を「児童生徒の思考を促すもの」、指示を「児童生徒の行動を促すもの」と押さえている。また、主発問を「1単位時間の目標達成につながる中心的な発問」、補助発問を「主発問を補ったり、詳しくしたりする発問」と押さえている。これらを踏まえ、「個

人思考」「集団思考」「思考のまとめ」の各段階において、児童生徒の思考を促し、深めるための発問を吟味するとともに、適切な指示を工夫することが大切である。また、主発問と補助発問を効果的に組み合わせながら、思考を深める授業展開となるよう、詳細な発問・指示を指導案に明記することも必要である。

このように教師が発問と指示の違いを意識しながら、「個人思考」「集団思考」「思考のまとめ」の各段階に適した発問や指示を工夫することにより、児童生徒の思考力・判断力・表現力が育まれると考える。

◆予想を促し課題意識を高める発問の具体例

※小学1年算数科「たしざん」指導案より抜粋 → 第三章 研究員の授業実践 P49

課題提示の時、今までの解き方と違う方法を紹介し、既習と比較させる発問をすることで、全員が課題意識をもち、個人思考に入ることができました。

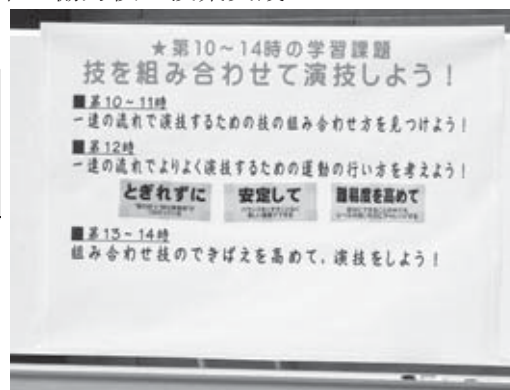
【発問】「ゆみさんはどんな方法で解いたのでしょうか？」

課題 ゆみさんのやり方をブロックで説明しよう。

◆個人思考で考えさせたいことを明確にした発問の具体例

※中学1年体育科「器械体操」指導案より抜粋 → 第四章 協力校の授業実践 P98

よりよい運動の仕方を考えさせる際に、動画を用いながら考えるポイントを明確に示したことで、生徒たちは自分なりの運動課題と照らし合わせて考えることができました。



【発問】「よりよい運動を行うための
注意点を確認しよう。」

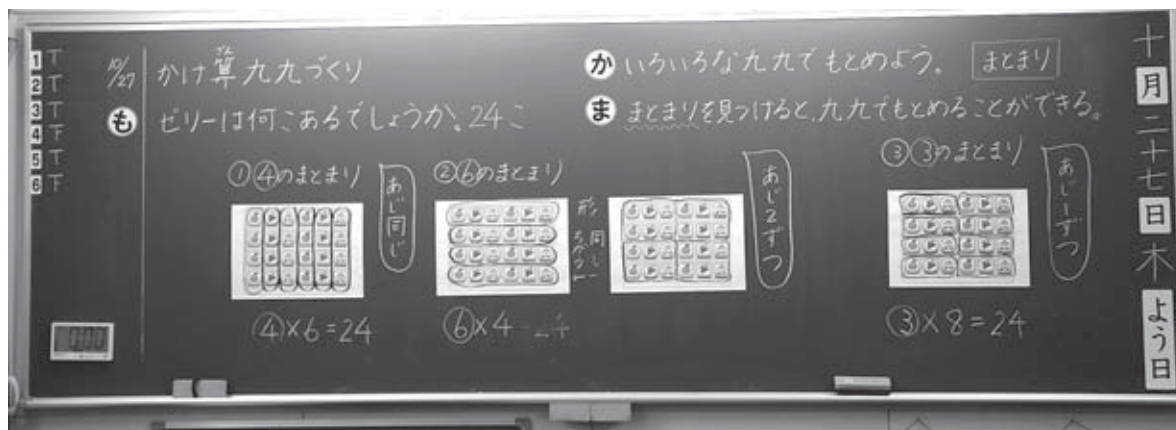
【板書】

児童生徒が、様々な考えを比較しながら、思考を整理し、身に付けなければならない知識や技能、考え方などを確認していくためには、板書が重要である。実際の板書においては、学習課題や見通し、まとめのほか、考えるポイントを示したり、児童生徒から出された意見や考えを整理・分類して提示したりして、児童生徒の思考を促し、深める板書を工夫することが大切である。

本研究では、掲示物やICTの活用についても板書として押さえ、児童生徒の思考を促す工夫を重視している。

◆様々な考えを整理・分類しながら、思考を深める板書の具体例

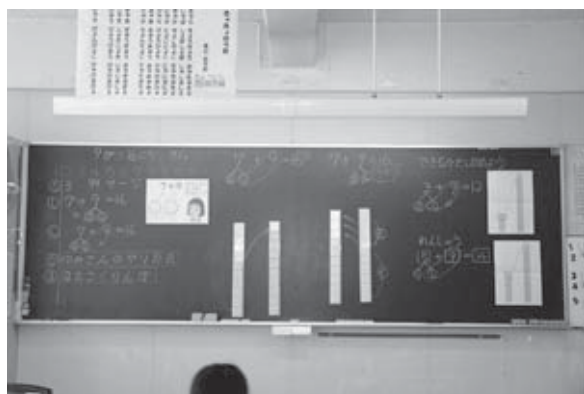
※小学2年算数科「かけ算九九づくり」指導案より抜粋→ 第Ⅳ章 研究協力校の授業実践 P86



児童が考えたことに、見出しをつけたり、図を用いて式との関連を分かりやすくしたりし、1時間の思考の流れを見ることができる構造的な板書となりました。

※小学1年算数科「たしざん」指導案より抜粋

→ 第Ⅲ章 研究員の授業実践 P51



加数分解と被加数分解の違いを考えやすいように、前時と本時のブロック操作の仕方を並べて板書しました。さらにブロックの動きと式を関連付けて板書し、理解を深めることにつなげることができました。

【学習形態】

1 単位時間の授業において児童生徒が行う学習活動は言語を用いて進められることから、目標を達成するためには、思考を伴う言語活動が活発になる学習形態を工夫する必要がある。そのためには、「個人思考」「集団思考」「思考のまとめ」の各段階において、個別学習やペア学習、グループ学習等、活動の目的に最適な学習形態を取り入れることが大切である。座席配置についても、児童生徒の発達の段階や学習活動の目的を踏まえ決定する必要がある。また、児童生徒の課題意識を高めたり学習のまとめを効果的に行ったりする際には、ゲストティーチャーを活用するなど、様々な場の工夫が考えられる。

◆効果的に言語活動を行うためのための学習形態の具体例

※小学2年国語科「かさこじぞう」の指導案より抜粋 → 第Ⅳ章 研究協力校の授業実践 P71

【段階②：集団思考】では、話し合う内容に応じてペアやグループ、全体と形態を変えることで論点を絞った話合いを進めることができました。



グループで小まとめを話合いました。



課題に対するまとめを絞り込むときは、黒板の前に集まり全体で検討しました。

◆効果的にゲストティーチャーを用いる学習形態の工夫の具体例

※小学2年生活科「いきいきキラキラ生きている」の指導案より抜粋

→ 研究紀要41号 第Ⅲ章 研究員の授業実践 P43



旭山動物園の飼育員をゲストティーチャーとして招き、言語活動の各段階においてT1とT2の役割を交替して参加してもらうことにより、次時への意欲化を図ることができました。

思考の明確化・対話 による思考の共有化

【思考の明確化・対話による思考の共有化】

2年次の研究においては、3段階に設定した言語活動の「それぞれの段階で児童生徒に何を考えさせるとよいのか」、「そのための教師の手立ては何か」について明らかにすることを「思考の明確化」と位置付け、発問、板書、学習形態の在り方をさらに深めることとした。

また、3年次の研究においては、これまでの成果を基に、より質の高い集団思考を成立させるために、「対話や議論を通して互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考え方を共有しながら問題解決していくこと」を「対話による思考の共有化」と位置付け、3つの条件を設定し理論の検証を行った。

◆児童生徒に何を考えさせ、そのための手立てを明らかにすること。

→思考の明確化

※中学校2年英語科「Project 1 ミニ英語新聞をつくろう！」指導案から抜粋

→ 第Ⅱ章 研究員の授業実践 P30～

課題 予定や経験について分かりやすい記事を書こう。

段階① 個人思考	段階② 集団思考	段階③ 思考のまとめ
記事の内容として分かりやすい構成を考える。【内容】 自分が書いた文とグループの他の生徒が書いた文を基に、bodyの構成を考えさせる。【手立て】	文と文のつながりに注意して構成を考える。【内容】 Writing Tips 2・3を活用させながら、グループで記事をまとめさせる。【手立て】	自分の文章の改善点を考える。【内容】 ALTの話や集団思考を参考にし、自分の記事の文章構成や表現を振り返らせる。【手立て】
まとめ 分かりやすい記事を書くためには Writing Tips を活用するとよい。		

目標とまとめの整合を図り、思考のまとめの段階で、明確にした目指す児童生徒の姿に向かい、集団思考での交流や個人思考で考えさせる内容を具体化した。

◆対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考え方を共有しながら問題解決していくこと→対話による思考の共有化

※中学1年「器械体操」指導案より抜粋 →第四章 研究協力校の実践 P 98～

集団思考において、よりよい運動の行い方を考えさせる際、以下の3つの条件を設定した。

この手立てをとることにより、互いの考え方を交流しながら問題解決に向かうことができた。

段階②集団思考 【対話による思考の共有化】

一連の流れで、よりよく演技するための運動の行い方を交流する。

条件1 話合いの目的や明確なゴールの設定

一連の流れで、よりよく演技するための運動の行い方を考えるために、交流の視点を明確にする。

条件2 互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

個人思考と集団思考の違いが分かるような学習プリントを活用する。

条件3 集団思考に最適な場の設定

集団思考を効果的に進めるために、1グループの人数を4人に設定し、演技映像の遅延動画を用いて交流させる。

限られた時間の中で、質の高い思考を促すためには、授業者が話合いの調整役として機能することが大切です。

3つの条件の内容自体は、難しいものではないのですが、授業者が条件を意識することによって効率的かつ効果的な学び合いが期待できます。



研究内容 3

学習評価の工夫

目標・指導・評価の一体化を図るためには、形成的評価を中心とした評価の在り方が重要である。いわゆる評価のための評価に終わることなく、児童生徒一人一人の「学習の成立を促すための評価」という視点を一層重視することによって、教師が自らの指導を振り返り、指導の改善に生かすことが大切である。そのため、学習評価については、指導内容や児童生徒の特性に応じて、効果的・効率的に評価できる場面や方法を工夫することはもとより、教師による評価とともに児童生徒による自己評価を工夫することも大切である。

効果的・効率的な
評価の工夫

学習評価においては、児童生徒の学習状況を適切に把握し、指導の改善に生かすことが重要である。観点別学習状況の評価についても、評価の結果を記録して評定に利用したり、保護者に説明したりするだけでなく、児童生徒一人一人の学習内容の確実な定着を目指し、日常の授業における指導に生かすことができるよう適切に実施されるべきである。評価材料の収集に熱心になるあまり、補助簿への記録が目的化し、指導がおろそかになることは本来的ではない。

本研究では、個に応じた指導や授業改善に生かすことを目的とした「指導に生かす評価」、主として総括的評価の材料とすることを目的とした「記録に残す評価」の2つの視点から学習評価を捉えることで評価の焦点化を図り、評価の観点や評価の回数を精選しながら、効果的・効率的な学習評価となることを目指した。

◆「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」とは

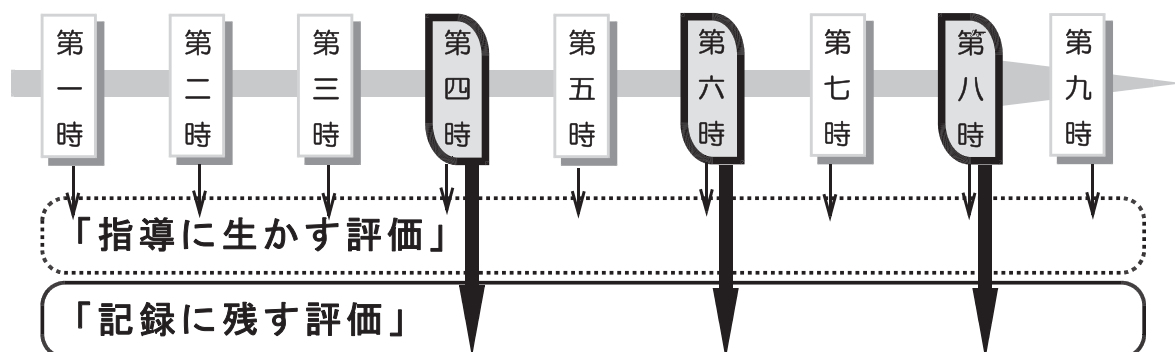
「指導に生かす評価」は、毎時間行う見取りのことで、個に応じた指導や授業改善に生かすことを目的とした評価です。児童生徒の学習状況を踏まえて、指導したり助言したりします。

「記録に残す評価」は、主として総括的評価の材料とすることを目的とした評価です。したがって、すべての児童生徒から評価資料を収集することが必要です。ノートや作品などの成果物を基に、評価規準に即して分析・評価します。

「思考力・判断力・表現力」にかかわる評価では、児童生徒の学習状況を本時の評価規準に当てはめて、「～について、～を基に、どのように考えているか」などの観点から、本時の目標の実現につながるかどうかを見取る必要があるため、単元の終末部分だけではなく、その都度「記録に残す評価」を行うことが有効である。一方、「技能」「知識・理解」の評価については、個に応じた指導や授業改善に生かすための「指導に生かす評価」を行うことを基本としながら、児童生徒の力の高まりが見られる単元の終末部分で「記録に残す評価」を行うことが有効である。

◆「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」の例

※単元が9時間構成で、第4・6・8時の目標が「思考・判断・表現」の場合



この単元は、9時間のうち第4・6・8時の目標が「思考・判断・表現」なので、第4・6・8時に「記録に残す評価」を行います。なお、「記録に残す評価」だけでなく「指導に生かす評価」を併せて行うこともできます。

第1・2・3・5・7・9時の目標は「技能」や「知識・理解」なので「指導に生かす評価」を行います。

「思考力・判断力・表現力」にかかわる評価については、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価するものとして設定している。そのため、児童生徒の記述した内容など、思考・判断の結果としての「表現」を通じて評価することが多くなるが、ここでいう「表現」とは、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動等において思考・判断したことと、表現する活動とを一体的に評価することを示している。したがって、この観点の評価するに当たっては、単に文章、表や図に整理して記録するという表面的な姿を評価するのではなく、例えば、自ら取り組む課題を多面的に考察しているか、観察・実験の分析や解釈を通じ規則性を見いだしているかなど、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容等に即して思考・判断したことについて評価する必要がある。

◆思考・判断したことを記録に残す評価の例

児童生徒が頭の中でどのように思考・判断したのかについては、学習場面の中で見取る児童生徒の姿を明らかにした上で、評価方法を決める必要があります。思考・判断したことを見取ることができる言語活動には、次のようなものがあります。

- ・ 児童生徒の考えが記述されたノートやワークシート
- ・ 数式や図 ・ 表 ・ 楽譜 ・ 作品 ・ V T R など

【記述による自己評価の例 所員の実践 P31～】

	文章を考えて、組み立てることはでき し。接続詞の“and”をうまく使うこと ができた。けれど、気持ちを表す文章を 考えるところまで時間がなくてできな かった。ので、できるようにしたいと思った。
	接続詞や、前置詞の使い方が また、あまり理解していない部分があ って、なかなか正しい文章にするのが 難しいと感じた。自分の気持ちや考 えも、文の流れに合わせて入れるこ とができるようにしたいと思った。

何が分かり、何が未
解決なのかを自分で記
述することによって、
次の学習への方向付け
を促すことができます。

発達の段階によって
記述が難しい場合は、
観点を設定し評価する
ことも可能ですが、そ
の際、授業者が明確な
評価の視点を与えるこ
とが大切です。

◆思考・判断したことを見取り、指導に生かす評価の例

個人思考で考えていることを、集団思考で意図的・計画的に扱うためには、取り上げ方や順番を考えながら、評価する必要があります。



対話を交えながら、丁寧に評価すること
で、児童の考えを引き出します。

個人思考時に指導に生かす評価を行い、児童
の思考の傾向を見取ります。



教師が取り上げたい考え方を机間指導の中で見付
け、記録に基づき発表させることで、集団思考を意図
的・計画的に進めることができます。

学ぶ意欲を高める 自己評価の在り方

単元(題材)の、適切な場面で適度に自己評価を取り入れることによって、児童生徒に自らの学習状況を自覚させ、意欲的に学習に向かう姿勢を形成させることができる。

「できた」、「できなかった」という結果のみの評価や「楽しかった」、「何をやった」等の印象による評価ではなく、「よく分かったことは何か」、「できるようになったことは何か」、「よく分からなかったことは何か」「誰の考えが参考になったのか」などについて、観点や記述により、質的・内容的評価を行うことが重要である。また、単元構成(各学習段階)に沿って、何を自己評価するのかという明確な視点をもたせ、目標に掲げたことを評価対象とすることは、目標を意識した学習活動の充実と、目標・指導・評価の一体化に結び付く。

なお、自己評価は、適切に実施することができれば児童生徒の学ぶ意欲を高めるために有効である。児童生徒が適切な自己評価を行うことができるよう、教師がねらいに即した評価方法を提示し、教師による評価と、児童生徒による評価の双方から信頼性や妥当性を検討するとともに、評価能力を育てていくことが大切である。さらに単元を通じて、どの場面で、どのように評価させるのかが大切であることから、単元計画に明確に位置付ける必要がある。

◆ 発達の段階に応じた学ぶ意欲を高める自己評価の例

※中学2年英語科「ミニ英語新聞を作ろう」指導案より抜粋

何ができるとよいのかを評価項目に示すことで、次
時への課題は何なのかを把握しやすくなります。

→ 第三章 研究員の授業実践 P31

【11時間目】

自分が過去にしたことやその感想、自分の予定などについて数文で書くことができる。

【12時間目】

読み手に正しく伝わるように、構成の工夫や接続詞など表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができる。

【13時間目】

読み手に正しく伝わるように、イラストや写真を活用しながら、自分の意見を載せた簡単な新聞を書くことができる。

※中学1年「器械体操」授業記録より抜粋 → 第四章 協力校の授業実践 P100

● 自己評価

■一連の流れで演技するための技の組み合わせ方を見付けることができたか？

■一連の流れで演技するための、とぎれない、安定した、難易度を高めた「つなぎ」にするための運動の行い方を考えることができたか？

■グループトークを通して、学んだことをまとめよう。

自分では分からない課題を見つけることができて良かった。
技と技の接着剤の間をスムーズに行う？ことで、みがかが

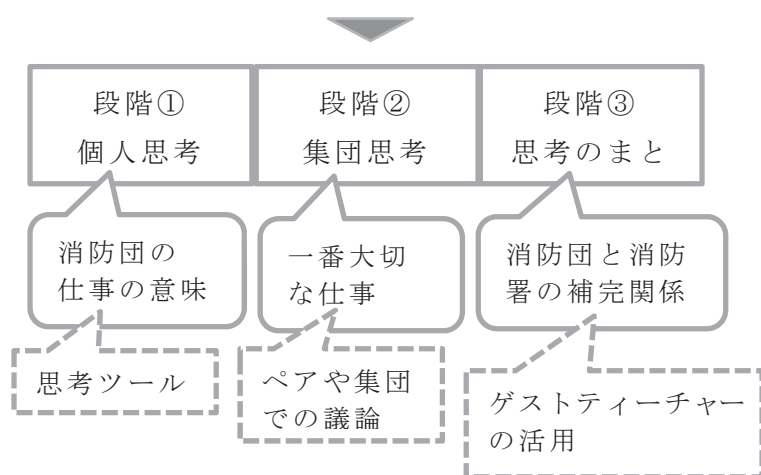


集団思考を通して、自分では気付かなかった視点に気付いたことを記述しています。また、アドバイスされたことが次の学習につながることを自覚することができました。

16次研究2年次は「思考の明確化」をテーマに研究を進めました。個人思考や集団思考の場で、児童生徒に「何を考えさせるのか」「そのための教師の手立ては何か」を授業づくりの際にはっきりさせようという意図です。

簡単なことのように、とても大切。

思考の明確化



左の図は社会科を例にしたものです。実線の吹き出しが児童生徒に考えさせたいこと。破線内がそのための教師の手立てです。

ここで大切にしたいのは「破線」です。左の例では、個人思考の際に「思考ツール」を用いて考えさせることを手立てとしていますが、「消防団の仕事の意味」を考えさせるための手立ては他にもたくさんあります。

個人思考させたことを集団思考でどのように生かすのかによって、用いる

手立ては変わります。授業者は、児童生徒の実態や授業全体の思考の流れを考え、適切と判断したこの手立てを選択したということです。

ある一つの授業を計画する際に、「目標」はどの先生が授業を行っても同じですが、そこへ到達させるための手立てはたくさんあり、「思考させたいこと」と「そのための手立て」の組み合わせは多くのバリエーションがあるでしょう。ですから、授業者はたくさんある手立ての中から「何が最適なのか」を吟味することが大切です。

授業づくりは「山登り」

授業づくりは、たとえとしてよく使われる「山登り」をイメージするとよいでしょう。

頂上を「目標」として考えると、そこへ達するためには様々なルートを選択することが考えられます。初心者向けもあれば、健脚者・上級者向けのコースもあります。

授業では児童生徒を必ず目標に到達させなければなりません。教師は言わばガイド役です。「何を考えさせ」「そのための手立ては何か」を吟味することは登山ルートを選択することと同じなのです。



ですから教師は児童生徒の実態を正確に把握することはもとより、日常の授業の中で児童生徒に適した学習、思考方法をトレーニングし、少しずつ力を高めておく必要があります。

日常の授業で「思考の明確化」を意識することにより、おのずと児童生徒は様々な思考の仕方を身に付け、よりよいルートで目標に到達することができるようになるでしょう。

コラム－4 スタートは教師の「ひと手間」だった「対話による思考の共有化」

2年次の「思考の明確化」の後、何に取り組むかを研究室で議論した際、「授業の上手な先生って、ちょっとしたひと手間を大切にしてるよね。」という会話をヒントに生まれたのが3年次の「対話による思考の共有化」という手立てでした。

質の高い集団思考をさせたい。

集団思考の場で「限られた児童生徒だけが発言している」経験はないでしょうか？一方で児童生徒が活発に交流している授業を参観して「すごい！」と感じた経験もあるかと思います。そんなクラスの授業者は、児童生徒に対して丁寧な手立てをとり「話し合いたい」というニーズを引き出しています。我々研究室は、そんな「ひと手間」を授業の中で意識することにより、児童生徒同士に対話が生まれ、質の高い集団思考をさせることができると考えたのです。

3つの条件

対話による思考の共有化

①話し合いの目的や明確なゴールの設定

これから「何のため」に「何を話し合うのか」、そして話し合った結果「どのようになるとよいのか」を前もって児童生徒に示すことです。

②互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

それぞれがどんな考え方をしているのか言葉だけでは分かりづらいので、それらが目に見えるようにする工夫です。板書の構造化や、思考ツールの活用などの工夫が考えられます。

③集団思考に最適な場の設定

何となく「話し合ってみよう」ということではなく、「なぜその形態が必要なのか」を吟味しようということです。

学習形態はクラスの実態や学習課題などについても学習班がよいのか、同じ考え同士、違う考え同士がよいのかなど、授業のねらいによっていろいろな場合が考えられます。いきなり全員で交流した方がよい場合もあります。また、話し合わせる時間の管理も大切な要素です。

これら3つの条件は難しいことはありません。ちょっとした教師の「ひと手間」です。しかし、日々の授業で積み上げていくことにより児童生徒の思考力を大いに伸ばすことができます。

新学習指導要領においても、授業改善の大切な視点として「対話的な学び」が重視されています。

研修センターは第17次研究においても、より質の高い学びのためにどのような手立てがあるのかについて追究を続けていきます。

第Ⅲ章 研究員の授業実践

○鷹栖町立鷹栖中学校 2年 英語科

授業者 齊 藤 悦 代 研究員

○旭川市立大有小学校 1年 算数科

授業者 馬 場 大 輔 研究員

読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりに注意して まとまりのある文章を考える学習

日 時 平成 28 年 7 月 7 日 (木) 5 校時 実施
 生 徒 鷹栖町立鷹栖中学校 2 年 B 組 36 名
 指導者 JTE 齊 藤 悦 代
 ALT Jeniffer Wilson

1 単元名 「Project 1 ミニ英語新聞をつくろう！」 (教育出版 ONE WORLD 2 年)

2 単元について

〈教材観〉

本単元に関わる学習指導要領の目標及び内容(抜粋)は、次のとおりである。

【学習指導要領】～第2学年(英語科)の目標と内容～

1 目 標

- (4) 初歩的な英語の文や文章を用いて、自分の考えなどを書くことができるようにするとともに、英語で書くことに慣れ、英語で書こうとする意欲を育てる。

2 内 容

(1) 言語活動

英語を理解し、英語で表現できる実践的運用能力を養うため、次の言語活動を3学年間を通して行わせる。

エ 書くこと

- (イ) 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。
 (エ) 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。
 (オ) 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

本単元では、盲導犬に関する話題を通して、I think [know など] + that(節)の文を用いて自分の考えを説明したり、接続詞 when や if を用いて、条件を示して自分の考えを述べたりできることをねらいにしている。また、本課に続く Project 1 では、Lesson 1 から Lesson 3 で学習した過去形・未来形・接続詞などの文法事項を総合的に活用しながら、自分の予定や経験をまとめて、英語新聞を作ること为目标としている。完成した英語新聞は、姉妹都市であるゴールドコースト市の生徒に読んでもらうことを目的として、「学校行事の紹介」についてグループで協力して記事を書く課題を設定する。既習事項を生かしながら、英語を用いて身近な学校生活の様子や行事の体験などを発信する言語活動を行う。その中で、「文法

第三章

や語彙等の知識がどれだけ身に付いたか」ではなく、「英語を用いて何ができるようになったか」を生徒に意識させ、英語学習への意欲を高めていきたい。

〈生徒観〉

英語科の学習に積極的に取り組み、特に英語を話すことに意欲的である。しかし、英語を書く活動に対しては苦手意識をもっている生徒が多い。2 学年の授業を始めるに当たり、1 学年の到達目標に対する自己評価を行わせたところ、「自分のことや他人のことについて、つながりのあるごく短い文章を書くことができる」という項目について低い評価が見られた。基本的な学習内容の定着を図るとともに、仲間と学び合いながら Project に取り組む言語活動を通して、多様な表現に触れて自分の考えを深めたり、読み手に正しく伝わるように表現の工夫をしようとしたりする意欲を高めていきたい。

〈指導観〉

Lesson 3 の各 Part では、Tool Kit（生徒が使う語彙）を活用しながら、聞くこと、話すこと、書くことの活動を通して新文型の定着を図る。さらに、Activity 3 では、つながりのある複数の文を書かせる Task を設定し、生徒に文脈を考えさせる習慣を身に付けさせていく。各 Lesson を通じて身に付けた知識や技能を用いて、Project 活動に取り組ませることにより、段階を追って、無理なく書く活動に取り組めるように工夫を図る。

Project 1 「ミニ英語新聞をつくろう！」の課題提示の場面では、ワークシートへの記述を通して、学習の見通しをもたせたり、どのような力を高めることができるのかについて気付かせたりして、活動への意欲を高める。課題追求の場面では、自分が書いた英文と他者が書いた英文を基に、「順を追って内容を伝える」という Writing Tips を活用させながら、記事の構成を個人で考えさせる。さらに、「自分の感想や考えを加える」「接続詞を用いたり、代名詞を用いたりしてまとまりのある英文を書く」という Writing Tips を提示する。文と文のつながりに注意してまとまりのある文章を書くための工夫についてグループでアイディアを出し合い、読み手に正しく伝わる文について考えさせる。また、ALT から表現のよさを賞賛してもらったり、手本となるような生徒の記事を提示してもらったりすることで、生徒が多様な表現に触れる機会をつくっていききたい。単元を通して、書く活動を行った際には、到達目標に対する達成状況を生徒に自己評価させ、「何ができるようになったか」、「どの技能のどの部分の力を付けていけばよいのか」について振り返らせることによって、次の Project に向けて学習意欲を高めていきたい。

また、学びの基盤に関わり、英語科では以下の点を大切にしてきた。

①「教室環境の整備」について

- ・学習してきた表現を振り返ることができるように、既習の文法事項や使用頻度の高い言語材料をその都度掲示した。

②「学習規律の確立」について

- ・「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」それぞれの活動に集中して取り組み、設定された時間内にできるだけ多様な表現活動に取り組むよう指導してきた。

③「支持的風土の醸成について」

- ・ペア学習を取り入れ、文法事項や語彙の不足を互いに補いながら学習することを意識させてきた。
- ・互いの発表のよさを認め合う雰囲気作りに努め、誤りを恐れず生徒それぞれが自信をもって活動できるように配慮してきた。

3 単元の目標

自分の考えを説明したり、過去にあったことについて話したり、条件を示したりして、文と文のつながりに注意してまとまりのある文章を書くことができるようにする。

4 評価規準

単元の評価規準			
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
I think(that)+文, when 節, if 節, 過去進行形など様々な用法を用いながら、間違えることを恐れず積極的に話したり、書いたりしている。	I think(that)+文, when 節, if 節, 過去進行形など様々な用法を用いながら、内容的にまとまりのある文章を書いたり、尋ねられたことに対して適切に回答したりすることができる。	I think(that)+文, when 節, if 節, 過去進行形など様々な用法が用いられている文を聞いたり読んだりして、全体の概要や内容の要点を理解することができる。	I think(that)+文, when 節, if 節, 過去進行形など様々な用法の正しい語順や語法を用いて文を構成する知識を身に付けている。
学習活動における具体的評価規準			
【言語活動への取組】 ①Activity や Task などの話す活動において、学んだ表現を積極的に使っている。 ②Activity や Project などの活動や教師の話す英語を聞いて、内容を理解しようとしている。 【コミュニケーションの継続】 ③Activity や Task などの話す活動において知っている語句や表現を用いて多くの内容を話している。	【正確な発話】 ①過去進行形や接続詞 when, if, that を使った文を、文法に従って正しく話すことができる。 【正確な音読】 ②正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いて音読することができる。 【正確な筆記】 ③接続詞 when や if を使った複文を、文法に従って正しく書くことができる。 【適切な筆記】 ④自分の考えを、複数の文で書くことができる。 ⑤文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができる。	【適切な聞き取り】 ①人物や事物の説明を聞いて、その内容を適切に聞き取ることができる。 ②自分自身や学校・地域などの身のまわりの話題についてのスピーチを聞いて、理解することができる。 【適切な読み取り】 ③人物や事物の説明文を読んで、その内容を適切に読み取ることができる。 ④短い文章を読んでだれが何をするのか具体的に理解することができる。	【言語についての知識】 ①よく使われる語句を正しいつづりで書くことができる。 ②接続詞 when や if を使った文の構造についての知識を身に付けている。

第Ⅲ章

5 指導と評価計画

時	指導目標	主な学習活動	評価規準及び方法
1 ・ 2	◎Activity などの話す活動において、学んだ表現を積極的に使うことができるようにするとともに、自分の考えを複数の文で書くことができるようにする。	○本単元で身に付ける文の構造や大まかな内容を知る。 自分の考えを説明しよう。 ○本文の内容を理解し、音読する。 ○T or FやQ & Aを通して、本文の内容について確認する。 ○身のまわりのものについて、自分の考えや感想を用いてペアで対話する。 ○「学校」「日本」「教科」から話題を1つ選び、自分の考えを書く。 【段階①：個人思考】 ・ 話題を選び、自分の考えを書く。 【段階②：集団思考】 ・ 自分の考えを発表し合い、他者の考えを知る。 【段階③：思考のまとめ】 ・ 接続詞 that を使った正しい文の構造を理解する。 I think [know など] + (that)節の用法を用いて、自分の考えを説明することができる。 ○自己評価を記入する。	指導 →指導に生かす評価 記録 →記録に残す評価 指導 〈関①〉 記録 〈表④〉 観察・ノート
3 ・ 4	◎接続詞 when を使った複文を、文法に従って正しく話すことができるようにするとともに、人物や事物の説明を聞いて、その内容を適切に聞き取ることができるようにする。	○接続詞〔when〕の複文の用法を理解する。 いつするのか〔したのか〕を説明しよう。 ○本文の内容を理解し、音読する。 ○T or FやQ & Aを通して、本文の内容について確認する。 ○放課後に予定がない日に何をするかについて対話する。 接続詞〔when〕を用いて、いつするのか〔したのか〕を説明することができる。	指導 〈表①〉 指導 〈理①〉

5・6	◎正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いて音読することができるようにするとともに、接続詞 if を使った複文を、文法に従って正しく書くことができるようにする。	○接続詞 [if] の複文の用法を理解する。 条件を示して自分の計画などを述べよう。 ○本文の内容を理解し、音読する。 ○T or FやQ & Aを通して、本文の内容について確認する。 ○ifを用いて「土曜日にひまだったら…」という条件を示して、自分の計画についてペアで対話し英文で書く。 【段階①：個人思考】 - 示された条件について、自分の予定を書く。 【段階②：集団思考】 - 相手の予定に対する感想を交えて対話文を完成する。 【段階③：思考のまとめ】 - 接続詞 if を使った正しい文の構造を理解する。 接続詞 [if] を用いて、条件を示した自分の計画などを述べるができる。 ○自己評価を記入する。	指導 〈表②〉 記録 〈表③〉 観察・ノート
7・8	◎Activity や教師の話す英語を聞いて内容を理解することができるようにするとともに、短い文章を読んでだれが何をするのか具体的に理解することができるようにする。	○過去進行形の用法を理解する。 過去にしていたことについて、たずねたり答えたりしよう。 ○本文の内容を理解し、音読する。 ○T or FやQ & Aを通して、本文の内容について確認する。 ○過去進行形を用いて、昨日見たことについて対話する。 過去進行形を用いて、過去にしていたことについて、尋ねたり答えたりすることができる。	指導 〈関②〉 指導 〈理④〉
9	◎人物や事物の説明文を読んで、その内容を適切に読み取ることができるようにするとともに、Taskの話す活動において、知っている語句や表現を用いて多くの内容を話すことができるようにする。	○Lesson3 Taskを通して、本文の内容について確認する。 文と文のつながりに注意して文章を書こう。 ○単語のしくみ3を通して、接続詞を使った文を復習する。 接続詞を使って文と文のつながりに注意して文章を書くことができる。	指導 〈理③〉 指導 〈関③〉
10	◎よく使われる語句を正しいつづりで書くことができるようにするとともに、接続詞whenやifを使った文の構造についての知識を身に付けることができるようにする。	○単元テストを行う。	記録 〈知①〉 〈知②〉 単元テスト

第Ⅲ章

11	◎自分自身や学校・地域などの身のまわりの話題についてのスピーチを聞いて、理解することができるようにするとともに、Project の書く活動において、文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができるようにする。	○Warm-up（接続詞や過去進行形を用いたスラスラ英会話） ○Projectの課題について確認する。 予定や経験をまとめてミニ英語新聞を作ろう。 ○記事の内容についての対話文を聞き、作成者の情報を正しく聞き取る。 ○教科書の英語新聞を参考にして文章の構成について学ぶ。 【段階①：個人思考】 - 教科書のフミオの記事を1文ずつに分けたものを、文と文のつながりに注意して順を追って並べる。 【段階②：集団思考】 - 個人で考えた記事の構成を交流し合い、分かりやすい英文の構成について考える。 - 意見や考えを表現した closing に当たる英文をグループ全員で考える。 【段階③：思考のまとめ】 - 集団思考を参考に記事を振り返り、内容を改善する。（文章のまとめり・意見や考えの表現の仕方など） ○学校祭の記事について、opening に当たる文を考える。 ○opening の文に続く記事の内容について、箇条書きでメモを作り、それぞれ英文を書く。 未来形や過去形を用いて、予定や経験についてまとめて、英語新聞を作ることができる。	指導 〈理②〉 記録 〈表⑤〉 観察・作品
12 (本時)	◎文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができるようにする。	○Warm-up (学校祭で行ったこと・感想を伝え合うコミュニケーション活動) ○本時の課題について確認する。 ミニ英語新聞をつくろう！ ～予定や経験について分かりやすい記事を書こう。～ ○英語新聞作成の手順を確認する。 【段階①：個人思考】 - 自分が書いた文とグループの他の生徒が書いた英文を基に、body の構成を考える。（Writing Tips 1 の提示） 【段階②：集団思考】 - 個人で考えた構成を交流し合い、文と文のつながりに注意して文章を書くための工夫を考える。（Writing Tips 2・3 を活用した表現の工夫） - 自分たちの意見や考えを表現した closing に当たる英文をグループ全員で考える。 【段階③：思考のまとめ】 - ALT の話や集団思考を参考に自分の記事を振り返り、内容を改善する。（文章のまとめり・意見や考えの表現の仕方など） 分かりやすい記事を書くためには Writing Tips を活用するとよい。 ○自己評価を記入する。	記録 〈表⑤〉 観察・作品

13	◎文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができるようにする。	○Warm-up（接続詞や過去進行形を用いたスラスラ英会話） ○Projectで行う課題について確認する。	記録 〈表⑤〉 観察・作品
	ミニ英語新聞をつくろう！ ～予定や経験をまとめてミニ英語新聞を完成しよう。～ ○個人で書いた記事を追加してミニ英語新聞を完成する。 ○他の生徒が作成した英語新聞を鑑賞する。		
	I think+that 節を用いて自分の考えを説明したり、接続詞を用いて文と文のつながりに注意したりして、まとまりのある文章を書くことが大切だ。		

6 本時の学習（13 時間扱い 12／13）

(1) 目 標

- 文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができる。

(2) 対話による思考の共有化に関わって

条件 1：話合いの目的や明確なゴールの設定

集団思考での論点を明らかにするために、ALT と JTE との対話を通して Writing Tips (英文を書く時のコツ) の活用例を示す。

条件 2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

考え方の違いの見える化を促すために、記事の内容について、「個人の考えが見えるワークシート」と「グループの話合いの結果が見えるワークシート」を活用する。

条件 3：集団思考に最適な場の設定

集団思考を効果的に進めるために、1 グループの人数を 4～5 人に設定し、リーダーに話合いを進行させる。

(3) 展 開

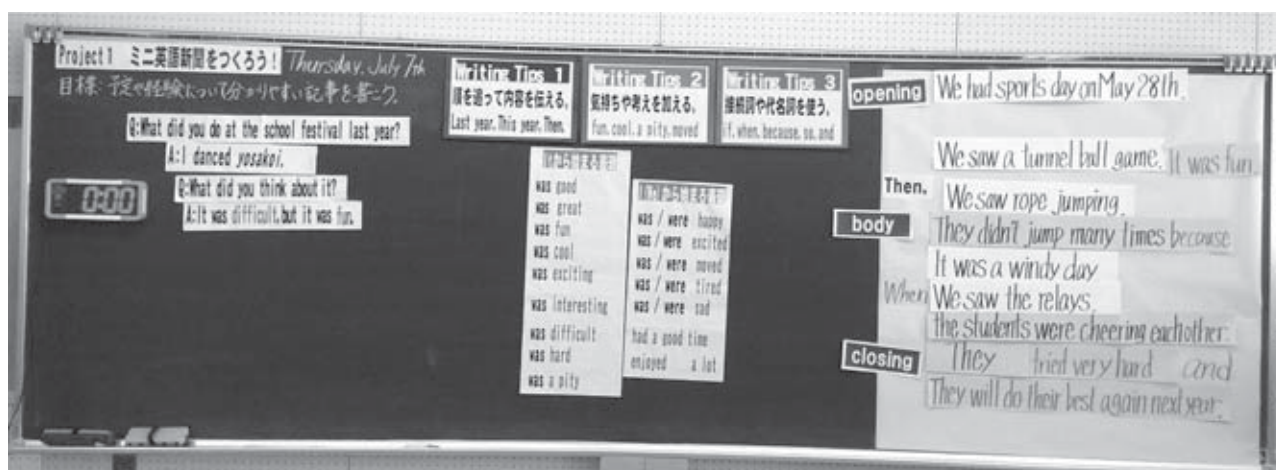
☐ 1 単位時間の学習課題 ☐ まとめ ☐ 児童生徒に考えさせること

教師の活動	生徒の活動
1 学校祭で行ったこと・感想を伝え合うコミュニケーション活動を行わせる。 「What did you do at the school festival last year?」 ※学校祭で行ったことが英語で書かれているカードを生徒に配る。	1 学校祭で行ったこと・感想を伝え合うコミュニケーション活動を行う。 ※パートナーとカードに書かれている表現を使って互いに質問する。カードを交換し、別のパートナーと会話を続ける。 〈表現例〉 danced <i>yosakoi</i> difficult / fun / cool
〈会話例〉 A:What did you do at the school festival last year? B:I danced <i>yosakoi</i>. A:What did you think about it? B:It was difficult,but it was fun.	

【学習内容を明確にする導入】 2 Project 1 の課題を確認させる。 「L1 から L3 で学習した内容を活用してミニ英語新聞をつくろう！」	2 Project 1 の課題を確認する。
予定や経験について分かりやすい記事を書こう。	
【段階①：個人思考】 3 自分が書いた文とグループの他の生徒が書いた文を基に、body の構成を考えさせる。 ※分かりやすい構成にするための Writing Tips 1（順を追って内容を伝える）を示す。 「Put the sentences in time order.」 「Make a new sentence if you have time.」	記事の内容として分かりやすい構成を考える。 3 自分が書いた文とグループの他の生徒が書いた英文を基に、body の構成を考える。 ※早く活動が終わった場合は、文と文のつながりに注意して新しい英文を考える。
【段階②：集団思考】 4 個人で考えた記事の構成について交流させる。Writing Tips 2・3 を活用させながら、グループで記事をまとめさせる。 【条件 1：話合いの目的と明確なゴールの設定→Writing Tips の活用例の提示】 「We wrote an article for sports day. Now, we are going to talk about it and make it better.」 【条件 2：互いの英文の理解→ワークシートの活用】 【条件 3：集団思考に最適な場の設定→リーダーによる話合いの進行】 ※表現が広がらないグループには関連する質問をして、つながりのある英文を想起させる。 〈質問例〉 「Did you teach <i>yosakoi</i> to each other when you were practicing it?」 「What will you do for the school festival this year?」	文と文のつながりに注意して構成を考える。 4 ALT と JTE の対話を聞きながら、記事の交流の仕方を確認し、読み手に正しく伝えるための工夫を考えながら、グループの記事をまとめる。 〈グループ活動の表現例〉 • What did you think about it? • Think about this part. • Please write this sentence. • How about this? • Is this right? • Look up the word”_____.” • That’s a good idea! • Oh, I see. • This is better. • Let’s try and use “when”.

5 ALT から文章構成のよいグループや表現の工夫をしているグループを紹介してもらう。 ※順を追って内容を伝えるための表現の工夫や、気持ちや考えを述べている表現のよさを取り上げる。 【段階③：思考のまとめ】	5 ALT の話を基に、文章構成や表現の工夫について確認する。
6 ALT の話や集団思考を参考にして、自分の記事の文章構成や表現を振り返らせる。	自分の文章の改善案を考える。 6 文章構成や表現について改善すべき点がないか考える。
【評価場面】＜表⑤＞観察，ワークシート A 読み手に正しく伝わるように、文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができる。 B 文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができる。	
【学びを振り返る場の設定】 7 読み手に正しく伝わるように、まとまりのある文章を書くための工夫について再度確認する。 「接続詞 when を用いたり、代名詞を使ったりすることで、まとまりのある文章になり、分かりやすい記事を書くことができますね。」	7 読み手に正しく伝わるように、まとまりのある文章を書くための工夫について振り返る。
分かりやすい記事を書くためには Writing Tips を活用するとよい。	
【学ぶ意欲を高める自己評価の在り方】 8 自己評価をさせる。 ・文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができる。 (😄 😊 😞 😡)	8 自己評価をする。

(4) 板書



7 本時の分析

(1)学習内容を明確にする導入

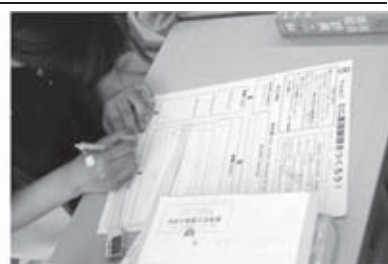
Lesson 1 から Lesson 3 までに学習した様々な表現を用いながら、「学校祭についてミニ英語新聞の記事を書く」という課題を明確にすることができた。集団思考の前に、「作成したミニ学校新聞は姉妹都市のオーストラリア生徒に渡して日本の学校行事を知ってもらおう」という目的を伝えたが、導入で話した方がより相手意識や課題意識が明確になったと考える。

(2)発問の工夫

“What did you do at the school festival last year?” “What did you think about it?” と学校祭を想起する発問をしたり、ペアワークで活用できる会話例を提示したりした。学校祭で行ったことや、その時の気持ちや感想を尋ね合う活動を繰り返し練習することで、個人思考や集団思考の「Writing Tips 2 (気持ちや考えを加える)」につなげることができた。

(3)言語活動の設定 段階①：個人思考

前時に生徒一人一人が書いた英文をグループで出し合い、文と文のつながりを考えながら並べさせた。記事の内容として分かりやすい構成を考えるために、Writing Tips 1 を示し、順を追って内容を伝えることに留意させた。Then の他に “Last year” “This year” などの副詞を提示することで、昨年度の経験や今年度の予定など時制の違う英文で、適切な副詞を用いて読み手に分かりやすいように文章を考えることができていた。



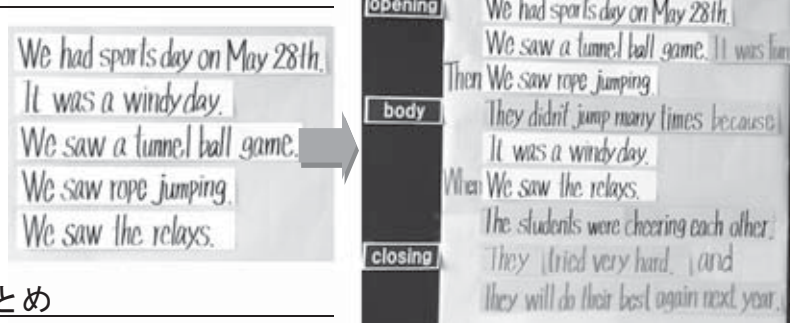
(4)言語活動の設定 段階②：集団思考

4～5 人のグループを設定し、個人思考で考えた文章を元に、Writing Tips を活用しながら文と文のつながりに注意して構成を考えさせた。その際、英語を用いて話し合いを進めようとする意欲的な態度が見られた。一方、自分の考えを英語で表現することの困難さから話し合いが広がらないグループも見られた。



(5)板書の工夫

集団思考で提示した Writing Tips の活用例を ALT と JTE の対話で示した。それぞれの Tips を色分けすることにより、モデルを視覚的に分かりやすく板書で示したことは、学びを支える手立てとして有効であった。



(6)言語活動の設定 段階③：思考のまとめ

集団思考で仲間と考えた英文や他のグループの例を参考に、個人思考で書いた文章の改善案を考えさせた。その際、個人思考では見られなかった自分の気持ちや考えについての記述や、接続詞を用いるなど、思考を働かせながら個々に文章を再構成する様子が見られた。

(7)学びを振り返る場の設定

読み手に正しく伝わるようにまとまりのある文章を書くためには、Writing Tips の活用が有効であることを確認した。また、今後の Project 学習で、将来の夢についてのスピーチやアンケート調査の発表を英語で行うことを伝え、今後の学習への意欲化を図ることができた。

(8)学ぶ意欲を高める自己評価の在り方

単元を通して「思考・判断・表現」に関わる時間については到達目標を示し、目標に対する評価と文章記述を行わせた。本時においては、「読みやすいように、接続詞を意識して使ったり、気持ちを入れたりして文章の構成を考えることができた。」「接続詞の If を使った文を作ることができた。読みやすい文章になるように意識して学習できた。次はもっと自分の気持ちを取り入れて文章を書きたい。」などの記述が見られた。目標に掲げたことを評価対象とすることで、目標を意識して学習活動を行わせるとともに、意欲的に学習に向かおうとする姿勢が見られた。

8 「対話による思考の共有化」に関わる分析

○条件 1：話し合いの目的や明確なゴールの設定

第 11 時



集団思考に入る前に、記事に感想やつながりのある文を書き加え、内容を更に深めるという明確なゴールを示した。その際、感想を述べる時に使う表現や対話例を提示した。既習の英語や役立つ表現など生徒の思考を促す適切な言語材料を提示することで、集団思考において、気持ちや感想について積極的に尋ね合い、記事の内容を深めることができた。

【ALT と JTE の対話文】 一部抜粋

Writing Tips 2 の活用場面

ALT: How was the tunnel ball game?

JTE: It was fun!

ALT: I think so, too.

So, we can say "It was fun." here.

ALT: What did you think about sports day?

JTE: I think the students tried very hard.

ALT: I think so, too.

And, they will do their best again next year.

Writing Tips 3 の活用場面

ALT: They didn't jump many times, did they?

JTE: Because it was a windy day.

ALT: Well, how about "They didn't jump many times because it was a windy day."

JTE: Let's try and use "when."

When we saw the relays...

ALT: the students were cheering each other.

・
・
・

※下線部分は元の英文に書き加えた表現

第 12 時

集団思考で話し合う内容を明らかにするために、ALT と JTE による対話をモデルとして見せた。対話を通してワークシート上の表現が改善していく具体例を示すことを目的としていた。ALT と JTE の実際のやりとりの場面对話・板書の両方で示すことで、集団思考で使う表現や活動内容を視覚と聴覚の両方から理解させることができた。

その結果、生徒は Writing Tips や板書を参考にしながら、話し合いを進めることができた。



第三章

○条件2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

第11時・第12時

考え方の違いの見える化を促すために、「個人の考えが見えるワークシート」と「グループの話合いの結果が見えるワークシート」を活用した。個人思考で考えた文章を比較することで、表現の違いに気付いたり、互いのよさを取り入れたりしながら、表現を深めていくことができた。

集団思考で考えた表現が、個人用ワークシートに書き加えられ、表現が深まった例

個人用ワークシート

1 We will sing in chorus and dance this year.

2 If we don't dance well, we will help each other.

3 We will deepen our friendship and share of unity.

4 We are looking forward to the school festival.

5 We will try hard.

【個人用ワークシート】

グループ用ワークシート

We will sing in chorus and dance this year.

If we don't dance well, we will help each other.

We will try hard.

We are looking forward to the school festival.

We will deepen our friendship and share of unity.

【グループ用ワークシート】

【グループ1の生徒の例】

We are going to have the school festival on September 11th. Last Year, we danced "Yosakoi" and played the Japanese drums hard. We practiced chorus hard. We saw a play. It was good. So, please see a play by third year students. We are going to dance. So, we will improve our skills, help each other for the school festival. If you are interested, come and see our school festival.

※ ゴシック体部分が「思考のまとめ」で書き加えられた英文

○条件3：集団思考に最適な場の設定

第11時・第12時

集団思考を効果的に進めるために、1グループの人数を4～5人に設定し、リーダーを中心とした英語科用のグループ編成を行った。英語の授業において集団思考を行う場合も、英語でやりとりをし、学習を進めるよう促す必要がある。円滑なコミュニケーション活動につながるグループ編成の視点として、コミュニケーション能力の高い生徒を各グループに配置し、リーダーとして話合いを進行させた。その際、グループ活動で使える英語表現を提示し、活用させた。「相づちを打つ」「褒める」「賛成する」「提案する」などの言語の働きとともに表現例を示すことで、リーダーを中心に、場面に応じた適切な表現を選択し、英語でやりとりをしようとする姿が見られた。

グループ活動で使える英語表現

Class No. Name

グループ活動のルール

①みんなで協力してより良い英文を考える。(時間を十分に活用する。)

②積極的に話し合いに参加する。相手の話を聞く。

③仲間が理解できるように気配りをしたり、良い意見を認めたりする。

日本語	英語
① 第1文句は同じですか？ -はい、いいえ。	Is the first sentence the same? -Yes./No. second / third
② どちらが良いですか？ -これ(が)良い。	Which is better? -This is (better).
③ (賛成)私もそう思います。 (反対)私はそう思いません。	I think so, too. / I don't think so.
④ (自分の意見を言う)どうですか？ (相手に伝える)あなたはどうですか？	How about you?
⑤ (何か良い案がある)ありますか？ (他の人と話し合ったら)私も！	Do you have any ideas? Me, too!
⑥ (相づちをうつ)なるほど！	Oh, I see.
⑦ (相手の意見をほめる)良い考えですね。素晴らしいね！ (相手にお願いする)この文を書いてください。(指さし)	That's a good idea! That's great! Write this sentence, please.
⑧ (相手にお願いする)この部分を考えてください。(指さし)	Think about this part, please.
⑨ (相手にお願いする)この文をここに貼ってください。(指さし)	Paste this sentence here, please.
⑩ (相手にお願いする)AをBに変えたらいいよ！ (相手にお願いする)お願いを引受ける！	Change A to B, please.
⑪ (相手に伝える)いいよ！	O.K. / All right! / I'll do that.
⑫ (相手に伝える)whenを使ってみようよ！	Let's try and use "when."
⑬ (相手に伝える)closing sentenceを考えてみようよ！	Let's think about "closing sentence."
⑭ (相手に伝える)どうですか？ -はい、いいえ。	How about (書いてみたい文:英語or日本語) " "? Is this right? -Yes./No.
⑮ (相手に伝える)あと○分だよ！	(We have) only one/two/three minute(s)!
⑯ (相手に伝える)なぜそう思いますか？	Why do you think so?
⑰ (相手に伝える)理由はなら～だからです。	Because 主語 + (動詞A) + 動詞B/be動詞A～.

第11時・第12時

集団思考において、時間内に話し合いを進め、課題を達成させるために、個人の役割を明確にした。グループのメンバーが互いに協力し合い、全員が活動に参加することを目的としていた。リーダーによる進行は効果的であったが、記録係は自分の役割に集中するあまり、十分に話し合いに参加できていない様子も見られた。グループ活動を円滑に進めるために必要な役割や内容を更に検討していく必要がある。

〈Project 活動で設定した役割〉

- リーダー：司会進行を行う。グループの活動が課題からそれないように話し合いを進める。
- 記録係：話し合った内容（記事で使う英語表現）を記録する。
- ワークシート作成：それぞれの英文をワークシートに貼り付け、記事を完成する。
- タイムキーパー：活動の制限時間に気を付けるように声を掛ける。

単元を通した成果と課題

＜成果＞

- 単元の中で、それまでのレッスンで学んだ単語や表現、文法を活用する4技能の統合的・総合的活動の場を効果的に位置付けた。その際、3段階の言語活動を設定し、集団思考では、対話を通して多様な表現に触れさせ、よりよい表現の在り方について思考させることができた。
- 3段階の言語活動において **Writing Tips** や表現例・対話例を提示することで、個人思考・集団思考で生徒に考えさせる内容を明確にすることができた。
- 生徒の考えの見える化を図ったワークシートの活用や、リーダーを中心とした英語科専用のグループ編成を行い、より質の高い集団思考を追究することで対話による思考の共有化を図ることができた。

＜課題＞

- 英語でやりとりしながら思考を深めることができるように、適切な学習課題の設定や集団思考で用いる英語表現の精選、モデル提示の仕方の工夫が必要である。

研究協議板書

The blackboard is divided into three main sections corresponding to the three stages of the activity:

- 段階1: 個人思考 (15分)**
 - 課題: 予定や経験について分かりやすい記事を書こう
 - 条件①: 話し合いの目的や明確なゴールの設定
 - ALTとJTEとの対話: モデルを提示 → 理解促進? → 生徒も一緒に聞くだけでなく、視覚にも訴える教材作り
 - 条件②: 互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫
 - 対話による思考: 手立て: 会話例・使える表現例を示す
 - 日常的な対話: 事実 ← 個人の感想
 - グループ内での役割: 活動に参加して書く・話す
 - アクティブラーニング
- 段階2: 集団思考 (15分)**
 - 課題: 対話による思考の共有化、文と文のつながりに注意して構成を考える
 - 条件③: 集団思考の最適な場の設定
 - 4~5人...多いのでは?
 - 4人 → グループの人数
 - 人数・時間・場所・アクティビティは?
 - 英語科の教科特性: 使われるついで
 - グループ編成: 学び合い
- 段階3: 思考の共有化 (4分)**
 - 課題: 分かりやすい記事を書くためにはWriting tipsを活用するよ!
 - 条件④: 参考者エリ
 - 個人のワークシートとグループのワークシートの関係について
 - 前時〜大のみ(グループ全数)
 - 本時〜グループの仲間を巻き込む(個人)
 - グループで

第三章

9 研究ノート

①授業記録の分析による本実践の改善案

本時部分の改善（ ・ゴシック体が改善部分）

教師の活動	生徒の活動
1 学校祭で行ったこと・感想を伝え合うコミュニケーション活動を行わせる。 「What did you do at the school festival last year?」 ※学校祭で行ったことが英語で書かれているカードを生徒に配る。	1 学校祭で行ったこと・感想を伝え合うコミュニケーション活動を行う。 ※パートナーとカードに書かれている表現を使って互いに質問する。カードを交換し、別のパートナーと会話を続ける。 〈表現例〉 danced <i>yosakoi</i> difficult / fun / cool
〈会話例〉 A:What did you do at the school festival last year? B:I danced <i>yosakoi</i>. A:What did you think about it? B:It was difficult,but it was fun.	
改善ポイント1:「学習内容を明確にする導入」として、作成したミニ学校新聞は、姉妹都市のオーストラリアの生徒が学校訪問をした際に渡すことを伝える。 →相手意識の明確化・必然性のある課題設定として有効である。	
【学習内容を明確にする導入】 2 Project 1 の課題を確認させる。 「L1 から L3 で学習した内容を活用してミニ英語新聞をつくろう！」 <u>「正しく伝わるように、まとまりのある文章を書き、オーストラリアの生徒に鷹栖中の学校行事を知ってもらおう！」</u>	2 Project 1 の課題を確認する。 <u>学校新聞の読み手がオーストラリアの生徒であることを知り、正しく伝わるようにまとまりのある文章を書くことを確認する。</u>
予定や経験について分かりやすい記事を書こう。	
【段階①：個人思考】 3 自分が書いた文とグループの他の生徒が書いた文を基に，body の構成を考えさせる。 ※分かりやすい構成にするための Writing Tips 1（順を追って内容を伝える）を示す。 「Put the sentences in time order.」 「Make a new sentence if you have time.」	記事の内容として分かりやすい構成を考える。 3 自分が書いた文とグループの他の生徒が書いた英文を基に，body の構成を考える。 ※早く活動が終わった場合は，文と文のつながりに注意して新しい英文を考える。

【段階②：集団思考】 4 個人で考えた記事の構成について交流させる。 Writing Tips 2・3を活用させながら、グループで記事をまとめさせる。 【条件1：話合いの目的と明確なゴールの設定→Writing Tips の活用例の提示】 「We wrote an article for sports day. Now, we are going to talk about it and make it better.」 【条件2：互いの英文の理解→ワークシートの活用】 【条件3：集団思考に最適な場の設定→リーダーによる話合いの進行】 ※表現が広がらないグループには関連する質問をして、つながりのある英文を想起させる。 〈質問例〉 「Did you teach <i>yosakoi</i> to each other when you were practicing it?」 「What will you do for the school festival this year?」	文と文のつながりに注意して構成を考える。 4 ALTとJTEの対話を聞いたり、質問に答えたりしながら記事の交流の仕方を確認し、読み手に正しく伝えるための工夫を考えながら、グループの記事をまとめる。 改善ポイント2：ALTとJTEの対話をモデルとして示す際、体育大会について“What did you think about it?”と生徒にも感想を尋ねる。 →内容理解の把握・Writing Tipsを活用した対話練習として有効である。 〈グループ活動の表現例〉 • What did you think about it? • Think about this part. • Please write this sentence. • How about this? • Is this right? • Look up the word “_____”. • That’s a good idea! • Oh, I see. • This is better. • Let’s try and use “when”.
5 ALTから文章構成のよいグループや表現の工夫をしているグループを紹介してもらう。 ※順を追って内容を伝えるための表現の工夫や、気持ちや考えを述べている表現のよさを取り上げる。 改善ポイント3：ALTが紹介する記事についてポイントを絞って話してもらう。 →Writing Tipsの再確認・理解可能なインプットとして有効である。	5 ALTの話に基づき、文章構成や表現の工夫について確認する。 よい表現① Group2→Writing Tips3 Ifを用いた表現 If you are interested, come and see our school festival. よい表現② Group8→Writing Tips3 and, soを用いた表現 We learned Japanese drums and manners from Ms.Fujino. It was important so we respect her. 自分の文章の改善案を考える。
【段階③：思考のまとめ】 6 ALTの話や集団思考を参考にして、自分の記事の文章構成や表現を振り返らせる。 【評価場面】<表⑤>観察，ワークシート A 読み手に正しく伝わるように、文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができています。 B 文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができています。	6 文章構成や表現について改善すべき点がないか考える。

第三章

【学びを振り返る場の設定】 7 読み手に正しく伝わるように、まとまりのある文章を書くための工夫について再度確認する。「接続詞 when を用いたり、代名詞を使ったりすることで、まとまりのある文章になり、分かりやすい記事を書くことができますね。」	7 読み手に正しく伝わるように、まとまりのある文章を書くための工夫について振り返る。
分かりやすい記事を書くためには Writing Tips を活用するとよい。	
【学ぶ意欲を高める自己評価の在り方】 8 自己評価をさせる。 ・文章構成の工夫や、接続詞を用いるなど表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができる。 (😄 😊 😞 😠)	8 自己評価をする。

英語科におけるグループ学習のよさについて(ALT Jenny 先生)

I think a lot more gets achieved when the students work in groups, as opposed to individually. The group situation seems to work better for the students who; 1. find English a bit difficult, 2. are shy, 3. are afraid of saying the incorrect thing.

The results of the group, are usually constructed and understood by the group as opposed to just slipping by unnoticed. For those who are shy, once their comments are constructively checked by the group, they are not so reluctant to say it out aloud. In a class situation they may not say anything, but now they will. With a leader being nominated, though it can sometimes be a bit stressful for them, it seems to pull the group together, and the dynamics seem to be very supportive and constructive. With some students having an advantage in English, this works well for the group, as the leaders usually take care to explain, and the students then understand more easily, and are willing to ask questions in this situation. In the class situation, they may not ask at all. I feel that the students were a lot more adventurous in their answers in a group situation. They would be more conservative in their answers on their own.



生徒がグループで学習するよさは、個人で学習することに比べて、より多くの成果が得られることだと思います。また、グループ活動を行うと、1 英語を少し難しく感じている生徒、2 内気な生徒、3 間違いを恐れる生徒にとって、よりよく活動できると思います。個人学習では、着目せずに見落としてしまうようなことも、グループ活動では、みんなで理解し合いながら学習が進められていきます。内気な生徒にとっては、1 度、自分の考えがグループでしっかりと見直されることで、発表する時にそれほど嫌がらずにできます。学級全体の中では発言しないかもしれませんが、グループの中では発言できるでしょう。リーダーにとっては、少し大変な時もあるかもしれませんが、リーダーを指名することで、グループがまとまり、活動が更に協力的で建設的になると思います。英語が得意な生徒がいると、たいていリーダーが仲間に丁寧に説明するため、グループ活動がうまく進み、生徒たちはより理解しやすいです。学級全体では全く質問しないかもしれませんが、グループでは質問しやすくなります。いつもは答えを言うことに対して慎重でも、グループ活動では、生徒はより積極的に答えを言おうとします。

②英語授業における「Project 学習」

教育出版の「One World」では、3 Lesson ごとに Project 学習が設定されています。Project では、Lesson などで積み上げてきた基礎的・基本的な知識やスキルを異なる文脈で使うことによって、生徒自身が考えたり、発言したり、話し合っ何かを決めたりする体験ができます。このような Project は、生徒が授業で身に付けた知識やスキルの中から適切な表現を思考・判断し、表現する「活用」の場面として効果的です。オリエンテーションで Project をゴールとして知らせ、学習内容がどのように Project につながるのか、どのような力が身に付くのかを生徒に具体的にイメージさせることで、見通しが生まれ、学習意欲が高まることが期待できます。



③Writing 活動を効果的に進めるための思考ツール

自由英作文を行う際、テーマを与えられても、書く内容が思い付かない生徒や、書きたい内容があっても何から書き出せばよいのか分からない生徒が見られます。そのような生徒に対して、書くべき内容を思い付かせたり、整理させたりするために、思考ツールを提示することが有効です。思考ツールを使うことで、書く内容の順番やつながりなど、文章構成をよりイメージしやすくなります。

【思考ツールの例】

ウェビング(イメージ) マップ

中心から連想するアイデアを周りに書いていきます。そのアイデアからさらに連想するアイデアを次の層に書いていくことで自由な発想を引き出すことができます。
One World 2 年 Writing Tips で紹介されています。

ステップチャート

論じる順序を意識するために用います。順序を柔軟に検討するために、短冊を使ってアイデアを移動させるなどの工夫をすることもできます。



第 11 時・12 時で使用したワークシート

ステップチャートに英文の構成(opening・body・closing)を分かりやすく示しました。

④Writing 活動を効果的に進める言語材料の提示

生徒により主体的に表現活動に取り組ませ、学習をスムーズに進行させる手立てとして、適切な言語材料を生徒に示すことが大切です。その際、既習事項や生徒が表現したい内容を取り入れることで、より効果的な言語材料を提示することができ、主体的な表現活動につなげることができます。

Project (学校祭についての記事) につなげる表現

Lesson1-4:Okinawan people come back for this festival and share a sense of unity.

Lesson2-4:First, we must improve our skills.

Second, we mustn't give up.

Come and see our robots again next year!

And lastly, we must help each other.

Project1: I am looking forward to the concert.
do my (our) best

※教科書本文から抜粋

学校祭についての事前アンケート

英語科ミニアンケート

Class No. Name

1 去年は何でしたか。(5) 組

2 去年のステージ発表で何を担当しましたか。ヨサコイ・和太鼓・留置り・(和太鼓)

3 学校祭の練習から当日の発表・他学年の発表で、印象に残っていること、そのときの気持ちや感想を3つ書いてください。

印象に残っていること	気持ち・感想
和太鼓の練習	大変な練習
太鼓のソロ	楽しかった
合唱の練習	練習を深めた

【Project で提示したワークシート：学校祭についての表現例】

Before the school festival

On that day

practiced "Yosakoi"

learned the Japanese drums

practiced chorus

danced "Yosakoi"

played the Japanese drums

sang in chorus

saw a hip hop dance

saw double dutch skipping

saw a play

【対話例】 A:What did you do at the school festival last year?
B: I danced "Yosakoi."

A:What did you think about it?
B: It was difficult.

And More Words □ 辞書で単語を調べる時は、文の中でどのように使われるのか例文を参考にしましょう！

share a sense of unity : 一つであるという気持ちを分かち合う do our best : ベストを尽くす help each other : 互いに助け合う win first place : 1位になる

improve our skills : 技術を向上させる don't give up : あきらめない deepen our friendship : 友情を深める learn important things : 大切なことを学ぶ

We are looking forward to the school festival. : 学校祭を楽しみにしています。 Come and see our school festival. : 私たちの学校祭を見に来てください。

⑤「思考の明確化」を意識して構成した単元・授業の流れ

第11時

○目標（理解の能力・表現の能力）

自分自身や学校・地域・身の回りの話題についてのスピーチを聞いて、理解することができるようにするとともに、Project の書く活動において、文章構成の工夫や、接続詞を用いるなどの表現の工夫をして、まとまりのある文章を書くことができるようにする。

＜課題＞予定や経験をまとめてミニ英語新聞を作ろう。

○授業の概要

教科書に載っている英語新聞の記事をモデルとし、文と文のつながりに注意して英語の文章の構成について考える時間とした。

【個人思考で使用したワークシート】

【段階① 個人思考～記事の内容として分かりやすい構成を考える。】

教科書の記事を1文ずつ分けたものを生徒に渡し、あらかじめ文章の構成が書いてあるワークシートを活用して、文の順序を考えさせた。**opening** (中心となるトピック)、**body** (具体的な内容)、**closing** (感想・気持ち)などの構成に合うように文章を考える姿が見られた。

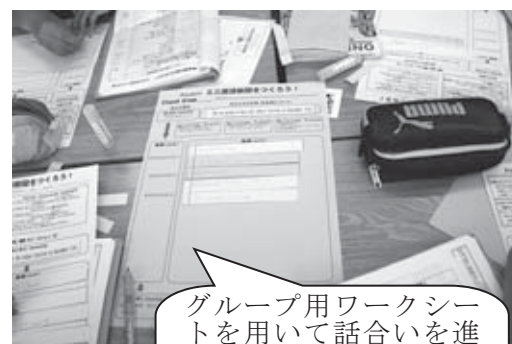


リーダーを中心とした集団思考

【段階② 集団思考～文と文のつながりに注意して構成を考える。】

個人思考で考えた文章を互いに見せ合い、比較させた。その際、用いた教科書の本文は

On May 4, my family and I visited Asahiyama zoo in Hokkaido. I saw a lot of cute animals there. I took a lot of pictures. の3文である。より詳しい新聞記事になるように、つながりのある文を付け加え、構成を考えることができると予想していた。しかし、実際の自分の経験ではなかったため、時間が掛かる生徒が見られた。



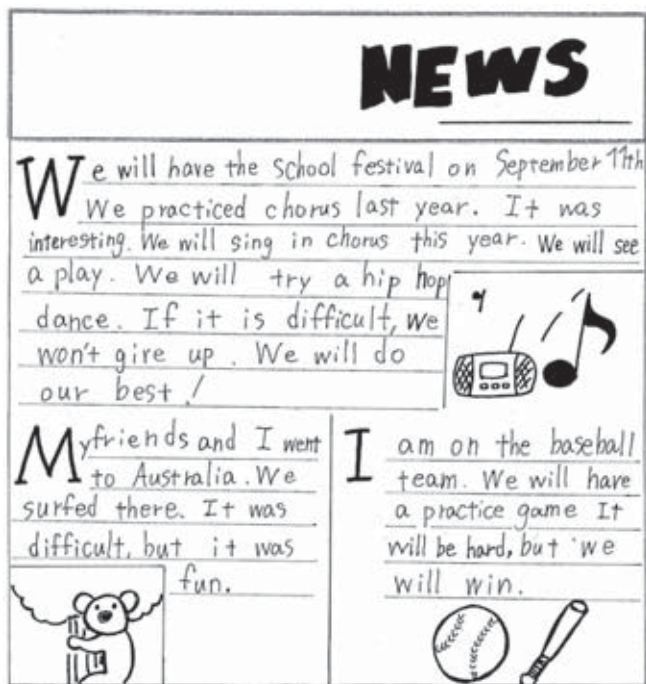
グループ用ワークシートを用いて話し合いを進め、個々の表現のよさを取り入れながらグループとしての記事を完成させた。

【段階③ 思考のまとめ～自分の文章の改善点を考える。】

集団思考の話し合いから生まれた新たな表現を参考に、“I knew many things about animals.” “I had a good time.” “I want to go to an aquarium next time.”等の英文を自分の記事に書き加える姿が見られ、集団思考を通した気づきから個々の表現の改善案を考えることができた。

第 13 時に完成した生徒の作品

第 13 時に完成した生徒の作品



第 13 時では、個人で新聞記事を考えさせた。休み中の思い出や部活動などを話題として、**Writing Tips** を生かしながら自分の予定や経験をまとめることができた。

Project を通じた生徒の自己評価

	「書くこと」目標	自己評価	文章記述
1 時間 目	過去にしたことやその感想 などについて書くことが できる。		文章の構成を考えることは難しくな ったけれど、また、「少し文法で間違 え方」をいったり、「I」や「I」の区 分が、表を見ればわかるかなと 初めは思っていたが、たぶんまだ 考えていたので、表を見ないと 思っていた。
2 時間 目	文章構成の工夫や、接続詞を 用いるなど表現の工夫をし て、まとまりのある文章を書 くことができる。		文章を考えて、組み立ててはいた けど、接続詞の「and」をうまく 使えなかった。復習をする文章 を考えるまで時間がなくてでき ない、というように思っていた。
3 時間 目	読み手に正しく伝わるよう にイラストや写真を活用し ながら、自分の意見を載せ た簡単な新聞を書くことが できる。		接続詞や、前置詞の使用が まだあまり理解していない部分があ って、なかなか正しい文章にするの が難しいと感じた。自分の気持ち考 えも、文の流れるに合わせて入れるこ とができるようにしたいと思った。

到達目標を意識しながら学習を進めるとともに、「できるようになったこと」「よく分からなかったこと」など、自分の学びを振り返ることができた。また、グループ活動を通して、他者の表現のよさに気づき、思考を深めている様子が見られた。

自分では思いつかなかったことをまゆゆさんが考えていたので、参考にしたいと思った。

三二英語新聞を読んだ感想(姉妹都市ゴールドコースト市の生徒より)

Your school newspaper task was very good. The way you structure your sentences in your articles is very good and I'm sure with more practice you will get even better! A way that you could possibly improve is to learn some more complex sentences, to add to your bank of knowledge about the English language. Your school festival that you write about sounds very interesting. I would have loved to have come. Also, your club activity sounds like a fantastic thing to be a part of. Thank you for letting me read your articles.

あなたの学校新聞はとてもよくできていますね。記事の文章構成がとてもよくできています。もっと学習することでさらによくなると思います。英語を上達させるためには、複文について学んだり、英語の知識を増やしたりするとよいと思います。あなたが書いた学校祭の記事はとても興味深く、ぜひ見てみたいと思います。また、部活動も素晴らしいと思います。記事を読む



⑤おわりに

次期学習指導要領改訂に向けて、文部科学省から示された「審議のまとめ」では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善が求められています。英語科の特質に応じた「主体的・対話的で深い学び」についての考え方を整理し、子どもたちが「どのように学ぶのか」に着目して、学びの質を高めていくことができるように授業改善に努めていきたいと思います。

数を分けた図や半具体物の操作を通して 加数分解や被加数分解の加法計算の仕方を理解する学習

日 時 平成28年9月16日(金) 5校時 実施

児 童 旭川市立大有小学校1年1組 18名

指導者 馬 場 大 輔

1 単元名 「たしざん」 (教育出版 ショウガクさんすう1)

2 単元について

〈教材観〉

本単元に関わる学習指導要領の目標および内容(抜粋)は、次のとおりである。

【学習指導要領】～第1学年(算数科)の目標と内容～

1 目 標

- (1) 具体物を用いた活動などを通して、数についての感覚を豊かにする。数の意味や表し方について理解できるようにするとともに、加法及び減法の意味について理解し、それらの計算の仕方を考え、用いることができるようにする。

2 内 容

A 数と計算

- (2) 加法及び減法の意味について理解し、それらを用いることができるようにする。

イ 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること。

これまでに、単元5「ぜんぶでいくつ」では、加法の意味(増加、合併)と、0を含む1位数に1位数を足す計算で和が10以下(繰り上がりなし)のものについて扱ってきた。また、10に対する補数に着目する考えを単元4「いくつといくつ」で10までの数の合成・分解で学習し、単元9「10より大きい数」では数を「10といくつ」とみる見方を学習してきた。更に、3口の数の加減についても、単元11「3つのかずのたしざん、ひきざん」で学習してきた。

これらを基に、本単元では、繰り上がりのある1位数同士の加法を学習する。1位数同士の加法で答えが1位数の範囲を超える場合は、加数分解や被加数分解といった方法で10のまとまりを作り、10といくつとする計算の仕方に気付かせることになる。また、1位数同士の加法はこれから学習する加法の基礎となる計算であることから、反射的に結果が得られるまでに習熟する必要がある。

〈児童観〉

本学級の児童は、算数の学習においては、発達段階を考慮し、前時の学習との違いから児童自ら課題を設定したり、今日の学習を振り返って児童の言葉で本時のまとめを行ったりなどの活動はほとんど行っていない。2学期からは、課題やまとめについてノートに書くように指導を行っている。

本単元に関わる足し算や引き算の計算については、実態調査として、8月下旬に1位数±1位数で答えが10以下になる計算問題に取り組ませた。20問全て正解した児童は53%で、加

第三章

法減法の計算の技能が十分身に付いているとは言えない。また、その計算の際、65%の児童が指を使って計算している。指を使っている児童の平均正答率（82%）は、指を使わずに計算している児童の平均正答率（98%）より下回っているという結果が得られた。（実態調査は加法10問、減法10問、合計20問を2分間で取り組ませた。）

〈指導観〉

本単元で初めて学習する繰り上がりのある加法計算は、図をかいたり、ブロックを操作したりすることで答えを求めることができる。しかし、本単元では、式の下に「数を分けた図」（以下「さくらんぼ図」）をかくことにより、加数分解や被加数分解によって10のまとまりを作って答えを求める仕方を理解させる必要がある。その際、半具体物であるブロックを操作させ、加数や被加数を分解する意味もしっかり捉えさせる。

また、計算カードを用いた練習の中では、ゲーム的な要素を取り入れ、単元の学習後も十分に練習を重ね、その技能が確実に身に付くようにする。

また、学びの基盤に関わり、本学級では以下の点を大切にしてきた。

①「教室環境の整備」について

- ・ユニバーサルデザインの観点から、黒板の上や下の掲示物を極力なくし、学習に集中しやすい環境を心掛けている。
- ・「10の分解」を教室前面に掲示し、算数の授業の最初に係の児童の指示で、毎時間10の分解の暗唱を行わせている。

②「学習規律の確立」について

- ・学習時間を確保するために、学習が終わったら、次の時間の学習準備をしてから、休み時間に入らせている。また、チャイムが鳴り終わるまでに着席させ、すぐに授業を始めるよう声掛けをしている。
- ・授業に集中させるために、机上には学習に必要なものを決められた場所に置かせている。
- ・授業に臨む姿勢作りとして、「立腰」を意識させている。また、名前を呼ばれたら元気よく返事をしたり、話す人を見て聞いたりできるように、継続して指導を行っている。

③「支持的風土の醸成」について

- ・「ありがとう・がんばったねカード」に友達の頑張りやお礼を書かせ、クラス全員に紹介している。
- ・プリントを後ろの児童に渡すときには「どうぞ」、受け取ったら「ありがとう」と言い、相手を思いやる心を大切にしている。

3 単元の目標

1 位数＋1 位数で繰り上がりのある計算を加数分解や被加数分解で計算する仕方を理解し、確実に計算することができる。

4 評価規準

単元の評価規準			
算数への 関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての 技能	数量や図形についての 知識・理解
繰り上がりのある 加法計算の仕方を考 えようとしている。	1 位数＋1 位数で繰り 上がりのある加法計算の 仕方を、ブロックや言葉、	1 位数＋1 位数で繰り上 がりのある加法計算が確 実にできる。	繰り上がりのある加 法の意味や計算の仕方 を理解している。

	数，式，図を用いて考えている。		
学習活動における具体的評価規準			
①既習の計算を振り返ろうとしている。 ②繰り上がりのある加法の計算の仕方を考えようとしている。	①1位数＋1位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算する仕方を考えている。 ②被加数と加数の変化の決まりに着目して，答えが同じ加法の式の見付け方を考えている。	①1位数＋1位数で繰り上がりのある加法を加数分解で計算することができる。 ②1位数＋1位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算することができる。 ③1位数＋1位数で繰り上がりのある増加や合併の加法になる文章問題の場面を捉え，式に表し計算することができる。 ④1位数＋1位数で繰り上がりのある加法計算に習熟することができる。	①既習の計算とそうでない計算があることを理解している。 ②加数分解で計算する仕方を理解している。

5 指導と評価計画

1 単位時間の学習課題 1 単位時間の問題文 まとめ 言語活動

時	指導目標	主な学習活動	評価規準及び方法
1	◎既習の計算を振り返ることができるようにするとともに，既習の計算とそうでない計算があることを理解できるようにする。	○問題（教科書95ページ葉1）を把握する。 絵を見て，足し算の問題をつくろう。 ○絵に合った足し算の問題を考える。 ○課題を把握する。 習っていない足し算を考えよう。 ○みんなから出された問題を解き，既習（繰り上がりのない足し算）と繰り上がりのある足し算の存在を知る。 答えが10を超える足し算は習っていない。	指導 →指導で生かす評価 記録 →記録に残す評価 指導 〈関①〉 〈知①〉
	◎1位数＋1位数で繰り上がりのある加法の計算の仕方を考えようとするとともに，加数分解で	○問題（教科書97ページ葉2）を把握する。 9 + 3 ○課題を把握する。 計算の仕方を考えよう。 ○ブロックで考える。 ※3を1と2に分解し，1と9を足して10のまとま	指導 〈関②〉 〈知②〉

第Ⅲ章

2	計算する仕方を理解できるようにする。	りを作ってから、10といくつで数える。 ○式での計算の仕方を考える。 ○加数を分解する仕方(さくらんぼ図のかき方や意味)を理解する。 10のまとまりを作る。→さくらんぼ計算	
3	◎1位数+1位数で繰り上がりのある加法を加数分解で計算することができるようにする。	○課題を把握する。 さくらんぼ計算を練習しよう。 ○適用問題(教科書98ページ1・2)に取り組む。 10のまとまりを作る。→さくらんぼ計算	指導 <技①>
4 (本時)	◎1位数+1位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算する仕方を考えることができるようにする。	○問題(教科書99ページ葉3)を把握する。 7 + 9 ○式での計算の仕方を考える。(個人) ○被加数分解の仕方(ゆみさんの仕方)を提示し、課題を把握する。 ゆみさんのやり方をブロックで説明しよう。 【段階①：個人思考】 - 被加数分解のブロックの動かし方を考える。 【段階②：集団思考】 - 被加数分解のブロックの動かし方を説明する。 - 加数分解のブロックの動かし方を確かめる。 - ペア学習で加数分解と被加数分解の違いを考える。 - 適用問題で前の数のさくらんぼ計算(被加数分解)の仕方を確認する。 3 + 9 前の数をさくらんぼにする。 【段階③：思考のまとめ】 - 適用問題で被加数分解の計算を自分で行う。 5 + 9 ○自己評価を記入する。	記録 <考①> 観察 プリント

5	◎ 1 位数 + 1 位数 で繰り上がりのある 加法を被加数分解で計算 することができるように する。	○課題を把握する。 前さくらんぼ計算を練習しよう。 ○教科書100ページ3の問題をみんなで解きながら、 「前さくらんぼ計算」の仕方を確認する。 ○適用問題(教科書100ページ4・5・6・7)に取り 組む。 前さくらんぼでできた。	指導 〈技②〉
6	◎ 1 位数 + 1 位数 で繰り上がりのある 増加や合併の加法になる 文章問題の場面を捉え、 式に表し計算することが できるようにする。	○問題(増加)を把握する。 教科書P1018 もみじの葉っぱが8枚ありました。そこへ4枚もら いました。全部で何枚になったでしょうか。 ○課題を把握する。 文章問題を考えよう。 ○立式して答えを求める。 ○問題(合併)を把握する。 教科書P1019 みわさんはしおりを7枚作りました。まさとさんは 6枚作りました。合わせて何枚作ったでしょうか。 ○立式して答えを求める。 文章問題もさくらんぼ計算でできる。	指導 〈技③〉 指導 〈技③〉
7 ・ 8	◎ 1 位数 + 1 位数 で繰り上がりのある 加法計算に習熟できるよ うにする。	○課題を把握する。 足し算の練習をしよう。 ○教師が見せた足し算カードの答えを言う。 ○ペアで問題を出し合う。 ○足し算カードを並べて「足し算カルタ」をする。 さくらんぼをしなくても 答えを覚えた。	指導 〈技④〉
9 ・ 10	◎被加数と加数の 変化の決まりに 着目して、答え が同じ加法の式 の見付け方を考 えることができ るようにする。	○1 位数 + 1 位数で一番大きい答えを確認する。 ○問題を把握する。 同じ答えのカードを集めましょう。 ○課題を把握する。 答えが同じ式の決まりを考えよう。 【段階①：個人思考】	

		・ 答えが同じカードを探して，並べる順番を考えながら机上に並べる。(答えが11～13) 【段階②：集団思考】 ・ 答えが同じカードとその並べ方を発表する。 ・ 並べ方の決まりを考える。 前は1ずつ増える。後ろは1ずつ減る。 【段階③：思考のまとめ】 ・ 答えが14～18になるカードを探して，並べる順番を考えながらプリントに記入する。 ○自己評価を記入する。	記録 ＜考②＞ 観察 プリント
11	◎単元で学習したことを振り返り，学習内容を定着できるようにする。	○たしかめもんだい⑩に取り組む。	

6 本時の学習（11時間扱い 4／11）

(1) 目 標

- ・ 1位数＋1位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算する仕方を考えることができる。

(2) 対話による思考の共有化に関わって

条件1：話合いの目的や明確なゴールの設定

1年生という発達段階と指導内容の特性を考慮して，集団思考の前半では，①「どのブロックをどこに動かすか考える。」，集団思考の後半では，②「加数分解と被加数分解の違いを考える。」というスモールステップでゴールを設定する。

条件2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

加数分解と被加数分解の計算の式に「さくらんぼ図」をかいたものを並べて板書し，違いを捉えやすくする。また，加数分解と被加数分解のブロック操作の跡が残るような板書を工夫する。

条件3：集団思考に最適な場の設定

被加数分解の計算をブロックで考えるときには，個人思考でじっくり取り組ませた後に集団思考を設定し，全員で確実に被加数分解の意味を捉えさせる。また，前時の加数分解との違いを考えるときにはペア学習を設定し，短時間で違いを考えさせた後に，集団思考で違いを確認させる。

(3) 展 開

1 単位時間の学習課題	1 単位時間の問題文	まとめ	児童生徒に考えさせること
-------------------------	------------------------	-----------------	--------------------------

教師の活動	児童の活動
1 問題を提示する。	1 問題をノートにかく。
7 + 9	
2 式で計算させる。 「計算してみましょう。」	2 前時の学習を想起してノートに計算する。
3 計算結果を発表させる。 (1)まず、加数分解の方法を取り上げる。 (2)次に、被加数分解の方法（教科書のゆみさんの方法）を取り上げる。（さくらんぼ図には数字をかかない。） (3)さくらんぼ図に入る数字と答えをみんなで確認する。	3 答えと計算の仕方を発表する。 (1)  A : 加数分解 (2)  B : 被加数分解
【学習内容を明確にする導入】	
4 課題を把握させる。	4 さくらんぼ図が前時と違う場所にかかれていることを確認し、課題意識をもつ。
ゆみさんの計算の仕方をブロックで説明しよう。	
	※ノートに課題をかく。
【段階①：個人思考】	被加数分解の意味を考える。
5 被加数分解の意味をブロックで考えさせる。 「ブロックをどうやって動かすのかな？」	5 前時のブロックの動かし方との違いに気を付けて、被加数分解の場合のブロックの動かし方を考える。
【段階②：集団思考】	加数分解と被加数分解の違いを考える。
6 被加数分解のブロックの動かし方を説明させる。 「どのブロックを、どこに動かしましたか？」 【条件 1：話合いの明確なゴール→動かす	6 どのブロックをどこに動かすのかを説明する。 ・ 9 と 1 で 10 のまとまりをつくっているから、左のブロックを 1 つ右に動かす。 ・ 10 と 6 で答えは 16。

ブロックとその数に注目させる。】

【条件3：最適な場の設定→確実に被加数分解の意味を捉えさせるための全体での話し合い】



7 加数分解のブロックの動かし方を確認させる。

「前の時間はブロックをどのように動かしたかな。」

【条件2：違いの見える化→加数分解と被加数分解の式とブロックを並べて板書】

8 加数分解と被加数分解の違いをペアで考えさせる。

「昨日の計算の仕方とゆみさんの仕方は何が違うかな。」

【条件1：話し合いの明確なゴール→加数分解と被加数分解の違いを考えさせる】

【条件3：最適な場の設定→加数分解と被加数分解の違いを確認させるためのペア学習】

9 適用問題で、被加数分解の仕方を確認させる。

「前さくらんぼで計算できるか確かめてみましょう。」

7 加数分解のブロックの動かし方を確認する。

・7と3で10のまとまりをつくっているから、右のブロックを3つ左に動かす。

8 昨日の計算の仕方とゆみさんの仕方の違いをペアで考える。

・昨日は右のブロックを動かしたけど、今日は左のブロックを動かしたよ。

9 ワークシートの適用問題に教師と一緒に取り組み、計算の仕方を確認し、ブロックの図で被加数分解を表す。

① $3 + 9$

まえのかずをさくらんぼ

【段階③：思考のまとめ】

ブロックの動かし方をひとりで考える。

10 適用問題に取り組ませる。
「前さくらんぼで計算しましょう。早くできたら、どのブロックをどこに動かすのか矢印をかきましょう。」

10 ワークシートの適用問題に取り組む、早くできた児童は、ブロックの図で被加数分解を表す。

② $5 + 9$

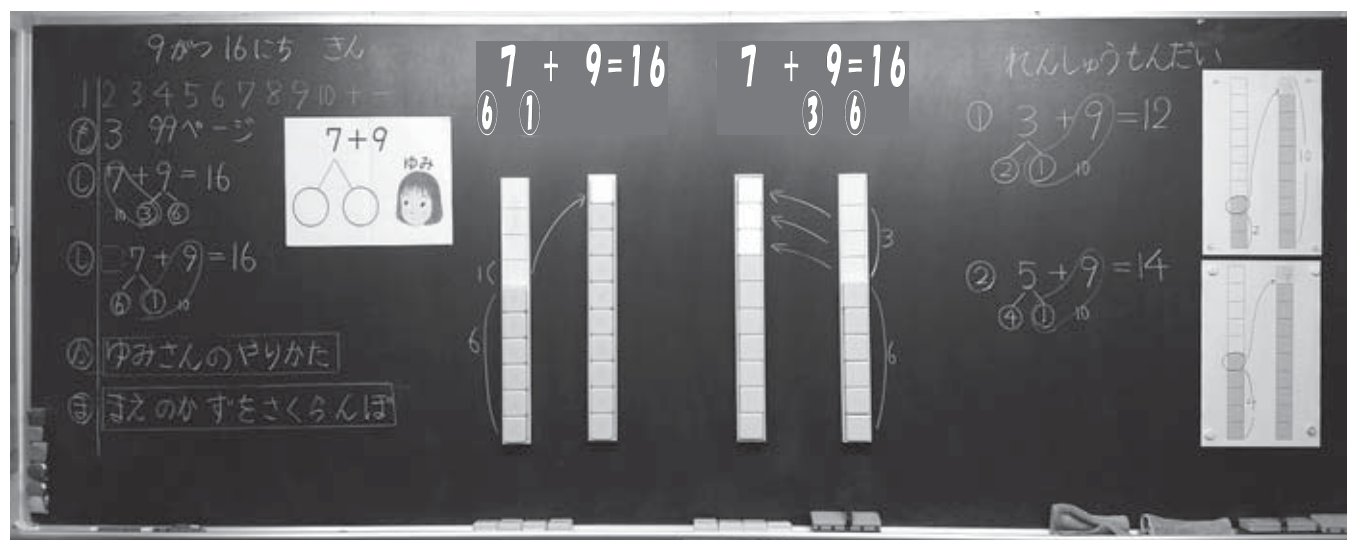
【評価場面】〈思①〉観察，ワークシート

A 1位数＋1位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算する仕方を考え、ブロックの図に表すことができている。

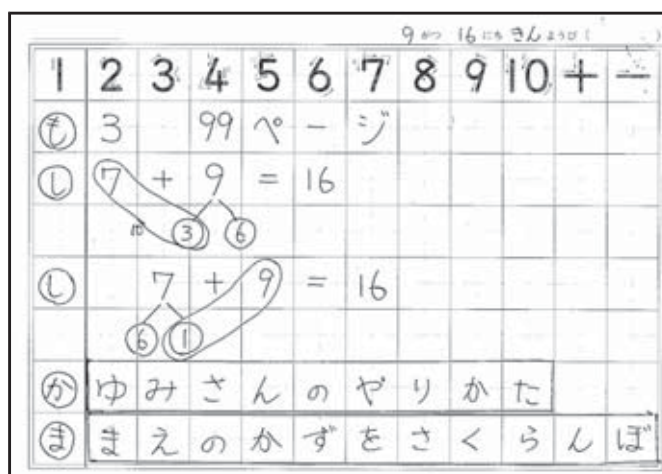
B 1位数＋1位数で繰り上がりのある加法を被加数分解で計算する仕方を考えている。

【学びを振り返る場の設定】	
10 被加数分解の計算の意味と仕方について再度確認させる。	10 前の数（被加数）を分解すること，後ろの数（加数）と合わせて10のまとまりを作ることを確認する。
【学ぶ意欲を高める自己評価の在り方】 11 自己評価させる。 (1)今日の勉強は分かりましたか。 (2)前の時間と何が違うか分かりましたか。	11 本時の学習内容の理解度と，前時との違いについての理解度を4件法で自己評価をする。

(4) 板 書



ノート



(5) 本時の自己評価

①理解の程度に関する視点

「今日の勉強は分かりましたか？」→ (4・3・2・1)

②理解の内容に関する視点

「前の時間と何が違うか分かりましたか？」→ (4・3・2・1)

第三章

7 本時の分析

(1)学習内容を明確にする導入

前時に学習した加数分解の方法で本時の問題に取り組ませた後に、教科書のゆみさんの計算の仕方（被加数分解）の途中までを提示したことにより、「さくらんぼを前に書いても計算できるのだろうか？」という課題意識を高めることができた。ただ、本時は「ブロックで被加数分解の意味を説明する」ことが中心的な学習内容だったので、課題に「ブロック」という文言があった方がよかった。

(2)発問の工夫

「ブロックで説明しましょう。」などという曖昧な表現ではなく、「どのブロックをどこに動かしますか。」などという具体的な表現の発問を行ったことにより、児童が次に何を考えるのかを明確にすることができた。

(3)言語活動の設定 段階①：個人思考

被加数分解の意味を考えさせるために、被加数分解のさくらんぼ計算に合ったブロックの動かし方を考えさせた。正しく操作できていた児童は指導者が想定していたより少なかったが、間違った児童にとっては、一度自分でブロック操作を行ったことで、集団思考で友達と自分の操作の違いなどに気付くことができた。

(4)言語活動の設定 段階②：集団思考

加数分解と被加数分解の計算の仕方をブロック操作で表すことにより、それぞれの違いを捉えさせようとした。それぞれの計算方法はブロック操作でできた児童の中にも、「何が違うのか。」については説明できない児童もいた。

(5)板書の工夫

加数分解と被加数分解のさくらんぼ計算とブロックを左右に並べて板書したことは、それぞれの意味の違いを考えるのに有効だった。更に違いを捉えやすくするために、式とブロックを関係付ける「矢印」などの思考の跡や「前さくらんぼ」などのキーワードを板書に残すことが重要である。



(6)言語活動の設定 段階③：思考のまとめ

全体やペアで話し合った被加数分解の意味について自分なりに考えさせるために、本時の問題の類似問題に取り組ませた。全体の話合いで発言できなかった児童も、被加数分解の「前さくらんぼ」で計算したり、ブロックの図に表したりすることにより、被加数分解の意味について自分の考えを深めることができた。

(7)学びを振り返る場の設定

前時までの「後ろをさくらんぼ」と本時の「前をさくらんぼ」というキーワードを示すことにより、本時の学習内容の定着を図ることができた。

(8)学ぶ意欲を高める自己評価の在り方

学習内容の理解度と前時の学習との違いについての理解度の2点について、4件法で自己評価させた。学習の理解度の平均ポイント3.8に対し、前時の学習との違いについての理解度の平均ポイントは3.4であり、実際の授業の様子と同じ結果になったが、事後調査と自己評価を比較すると、児童が自らの学習状況を正しく評価できていないことが分かった。（詳細はP61参照）今後も自己評価の経験を重ねていく必要がある。

8 「対話による思考の共有化」に関わる分析

○条件1：話し合いの目的や明確なゴールの設定

第4時

集団思考において、最終的に加数分解と被加数分解の違いを比較して、被加数分解の意味について考えることを本時のねらいとした。そのために、まずは被加数分解の意味をブロック操作で捉えさせ、次に加数分解と被加数分解を比較するという2つのゴールを設定した。

1つめのゴールである「被加数分解の意味をブロック操作で捉えさせる。」ために、集団思考に入る前に、「どのブロックをどこに動かすのですか？」という具体的な視点を児童に示した。そのことにより、集団思考で、代表児童がブロックを操作するときの注目すべき視点が明確になり、自分の考えとの共通点や差異点に気付かせることができた。

2つめのゴールである「加数分解と被加数分解の違いを捉えさせる。」ために、昨日の計算の仕方（加数分解）とゆみさんの仕方（被加数分解）が同じかどうか確認した上で、「何が違いますか？」と発問し、違いをペアで考えさせた。多くのペアは「動かすブロックの数」「動かす方向（右に動かす、左に動かす）」の違いを互いに説明し合っていたが、中には説明できない児童もいた。加数分解と被加数分解のブロック操作の仕方を確認していても、1年生にとっては、「違いは？」と尋ねられると分からなくなる児童もいるということが分かった。また、上記のような発達の段階によるつまずき以外にも「板書の問題」も考えられる。（板書の改善案については、条件2の欄を参照）

「話し合いの目的や明確なゴールの設定」は、集団思考において思考の共有化を図るための必要条件の一つと言えるが、集団思考以外の学習過程においても重要である。

「明確なゴールを理解するための、分かりやすい指示・発問」などは、どの授業においても重要と言える。そのために、児童の思考の流れを教師が事前にしっかり想定しておく必要がある。本時の集団思考に入るまでの学習活動と児童の思考の流れをまとめたものが右図である。



【集団思考までの学習活動と「児童の思考」】

7 + 9 を自由に計算（前時の学習）

「簡単！」「昨日の仕方でやろう！」



ゆみさんの計算の提示（課題意識の醸成）

「あれ、昨日の仕方と違う！？」

「これじゃ、できないよ！」「できる？」



ゆみさんの計算方法（課題解決の手掛かり）

「右のさくらんぼで10をつくろう！」

「前さくらんぼでもできるんだ！」



ブロックで説明（課題解決）

「自分でやってみよう！」【個人思考】

「みんなは、ブロックをどう動かしたかな？」

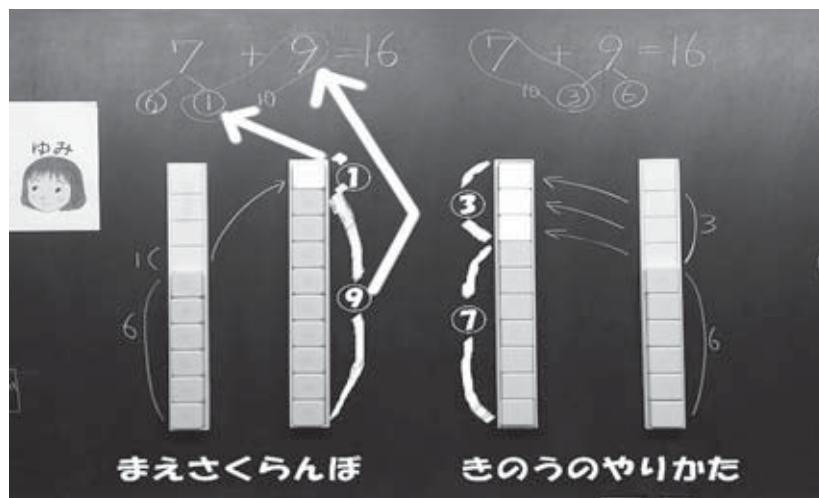
【集団思考】

第三章

○条件2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

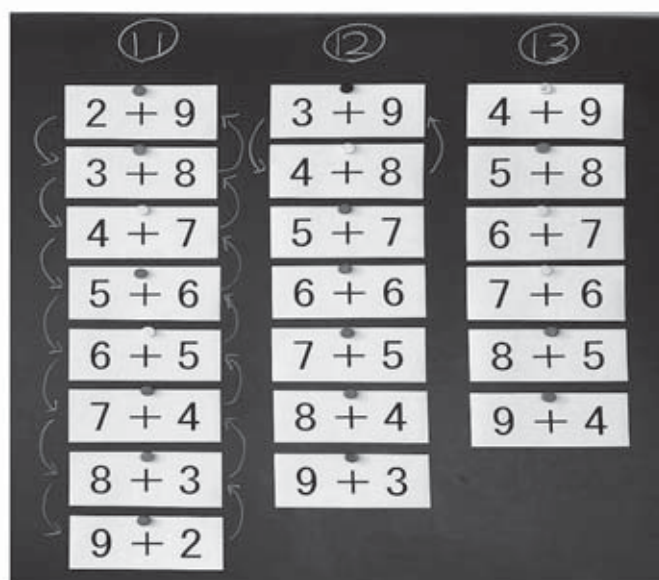
第4時

加数分解と被加数分解のさくらんぼ計算とブロックを左右に並べて板書したことは、それぞれの意味の違いを考えるのに有効だった。更に違いを捉えやすくするために、式とブロックを関係付ける「矢印」などの思考の跡や「前さくらんぼ」などのキーワードを板書に残すことが重要である。(右の板書写真が改善板書)



第9時

互いの考え方の理解の見える化を図るために、児童が机上に並べた足し算カードと同じように、黒板上でもカードを並べて板書した。そのことにより、答えが同じ足し算の決まりに気付く手立てとすることができた。また、決まりを見付ける話合いのときに、カードを指さしながら行うことができたので、集団での思考の共有化を図ることができた。



○条件3：集団思考に最適な場の設定

第4時

集団思考の中で、前時までの学習とは違う被加数分解の仕方や意味を考えたあとに、前時の加数分解との違いを考えさせるために、ペアで説明し合う場を設定した。それぞれの違いを理解している児童は、隣の児童に説明することにより自分の考えをより確かなものとした。また、よく分からなかったり自信がなかったりする児童にとっては、隣の児童の説明により、2つの違いを理解することができた。



第9時

個人思考で、答えが同じになるカードを机上に並べ、集団思考のはじめには、ペアでカードを並べる順番などについて話し合わせた。個人思考で並べ終わることができない児童は、ペア

の児童のカードを見ながら全て並べることができた。また、並べ方が反対の児童は、自分の並べ方と違う並び方に気付くことができた。

単元を通じた成果と課題

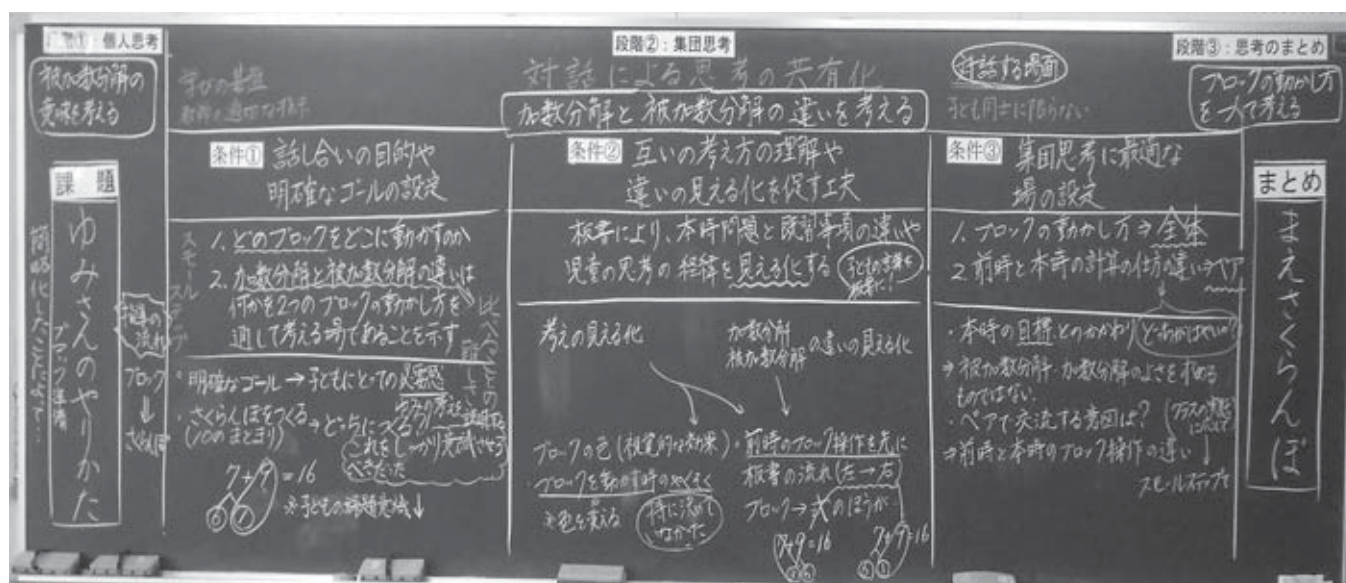
<成果>

- 集団思考の前に個人思考を位置付けることにより、集団思考での思考の共有化を主体的に進めることができた。例えば、第4時の個人思考でブロック操作を間違えた児童は、全体交流の場面で自分と違う動かし方をしている児童の発表を「あれ？自分の仕方と違うぞ。」と課題意識をもちながら発表を聞くことができた。
- 発達段階に応じてスモールステップで児童が取り組む学習活動や考える学習内容を明確に設定することにより、児童は今何を行ったらよいのか、何を考えたらよいのかが分かり、すぐに学習に取り組むことができた。
- 3つの条件を整えることにより、学習のゴールが分かり、友達の考えが分かり、最適な話し合いの場が設定され、仲間と共に数学的な考えを深めることができた。

〈課題〉

- 児童の実態から反応を予想しながら指導案を作成するが、教師の声掛けや友達の発言、つぶやきにより、児童の思考は大きく変化する場合がある。想定どおりの反応ではなかった場合にどのように対応するかも十分検討する必要がある。
- 第9時と第10時を2時間続きで計画した。時間割の関係で第9時と第10時の間が2日以上開いてしまい、前時の内容を忘れてしまったため、第10時の「思考のまとめ」で行った問題で苦勞している児童が多かった。特に算数の場合は、1時間でまとめ、振り返り、自己評価まで行えるよう単元を計画するか、2時間続きの場合、前時の想起をしっかりと行う必要があった。

研究協議板書



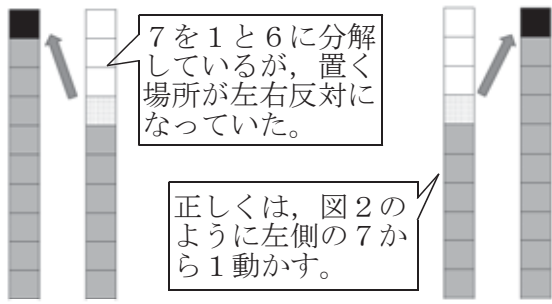
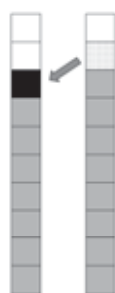
第三章

9 研究ノート

①授業記録の分析による本実践の改善案（机間指導編）

本実践の集団思考において、ブロックの動かし方を発表させる際、誤答を取り上げる予定はありませんでした。指導者は個人思考の際、机間指導を行い、正しくブロックを動かしているH児を確認し発表させましたが、黒板では正しい説明をすることができませんでした。

そこで、記録ビデオを基にH児が誤答に至った思考の経緯を分析してみました。

H児の思考の経緯	ブロック操作
個人思考の場面 図1のとおり7のまとまりから9のまとまりに1を動かし、10のまとまりをつくる被加数分解を行っていた。ただし、なぜか本来7と9のまとまりは図2のように置くはずが、反対になっていた。	 7を1と6に分解しているが、置く場所が左右反対になっていた。 正しくは、図2のように左側の7から1動かす。 図1 図2
集団思考での発表の場面 個人思考では、図1のとおり10のまとまりをつくることができていたのに、図3のように、9のまとまりから1を動かして8と8にしてしまった。	 9のまとまりから1をとって7のまとまりに足してしまった。「1つ動かす」ことは正しく行えたが、「被加数(7)を分解する」ことについては間違えてしまった。 図3

【考察】

個人思考においてH児は確かに「被加数の9」を分解して10のまとまりをつくることができました。しかし、ブロックの場所が左右反対だったため、「被加数の9を分解」するのではなく、「右のブロックを1つ動かす」と誤認識してしまったと考えられます。

【改善ポイント】

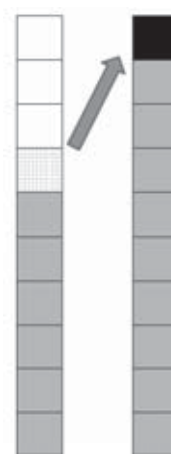
机間指導の際に被加数を分解し、10のまとまりをつくっていることを確認しましたが、その際のブロックが左右反対になっていることには気が付きませんでした。個人思考の指導において、ブロックの置き方をしっかり確認するとともに、机間指導では、ブロックの動かし方だけではなく、左右の置く場所にも気を付けて、見取りを行うべきでした。

②授業記録の分析による本実践の改善案（児童の反応編）

本実践の集団思考の授業記録（主な活動と発言）と経過時間は次のとおりです。

経過時間	氏名	授業記録（・主な活動、「」発言の概要）
20:20	H児	・間違った説明 ★1

21 : 15	W児	・被加数分解を説明 ★ 2
21 : 50	A児	・被加数分解を説明
22 : 36	教師	・ブロックの動かし方の補足説明 ・W児とA児は同じ動かし方とすることを確認 ・どちらのブロックをどちらに動かすか確認
23 : 06	W児	「どっちでもいいんじゃない？」 ★ 3
	複数	「左を右に動かす！」（正解）
	W児	「どっちでもいいよ！」 ★ 4
	複数	「どっちでもいいのかなあ？」※W児に引っ張られる
23 : 45	教師	「残念でした。」
	M児	「何が？」
	教師	「どっちもはだめです！」（ヒント）
	M児	「え？」
24 : 00	教師	「今日は、ゆみさんの仕方だよ。」（ヒント）
24 : 48	T児	・（前時の加数分解）「右のブロックを左に動かす！」
	全体	・T児の仕方がよいかどうか判断できず。
25 : 40	教師	・7を6と1に分けることを強調（ヒント）
27 : 04	M児	・正しい被加数分解の動かし方を説明 ・全体的な雰囲気として、なぜT児の動かし方（加数分解）ではなく、M児の動かし方（被加数分解）がよいのか納得していない児童が半分以上
28 : 32	教師	・前時の加数分解を確認させる。（ブロック操作）
30 : 00	W児	「違う！」（大声で発言） ★ 5
	他児童	「いいんだよ！」（W児発言を否定）
30 : 30	Y児	・被加数分解の正しい動かし方について発言
	他児童	「いいです」W児は「だめです」
30 : 55	W児	※副担任がW児に「今は昨日の仕方だよ！」と個別指導した直後、「やっぱり、そっちだ！」（正解）と意見を変える。
31 : 17	教師	・加数分解と被加数分解のブロックの動かし方を改めて説明しながら、矢印を書き入れる。
32 : 00	ペア	・加数分解と被加数分解のブロックの動かし方を説明し合う。



【考察】

本時の集団思考では、指導者が予想していたより、被加数分解の意味の理解に時間が掛かりました。その原因は、授業者の印象や研究協議でも、「★1のH児の間違い発表」が大きく影響していると考えていました。ところが、集団思考の児童の発言やつぶやきを分析していくと、そうとも言えないことが分かりました。★1のH児の誤答の後に2名の児童が正しいブロックの動かし方を発表し（★2）、その他の児童も、H児の誤答を支持する児童は見られませんでした。ところが、正解を発表したW児が、被加数分解のブロックの動かし方は、加数分解のブロックの動かし方でもよいという趣旨の発言（★3、★4、★5）を何度も行ったことにより、クラスのほかの児童が、混乱していったということが分かりました。

第三章

【改善ポイント】

改善の方法として、次の2つの案を考えました。1つ目は、W児に対して早い段階で個別指導を行うという方法です。2つ目は、課題を変更するという方法です。「ブロックの動かし方を考えよう！」ではなく、「加数分解のブロックの動かし方の図」と「被加数分解のブロックの動かし方の図」を児童に提示した上で、「ゆみさんの仕方は、どちらのブロックの動かし方が考えよう！」というものに変更します。初めから「どちらの動かし方がいいのか？」を問えば、「どちらもよい」という考えは出ずに、ブロックの動かし方と計算の仕方を結び付けて、被加数分解の意味について考える授業になったのではないかと考えました。

③事後調査の分析

教師は、授業において「児童の反応」などから「おおむね理解できていそうだ。」「まだ、理解できていない児童が多数いそうだ。」など、リアルタイムで児童の実態を把握しながら授業を進めなければなりません。上川教育研修センター第16次研究では、これを「指導に生かす評価」としています。

研究授業においては、本時の児童の様子だけでなく事後調査を行い、定着度などについて、丁寧に把握する場合があります。その際大切なことは、何についての調査をするのかを明確にしておくことです。

本実践の事後調査として、被加数分解と加数分解のどちらの考え方で計算するかを見取る実態調査1（右図）と被加数分解の定着度を見取る実態調査2の2つの事後調査を行いました。

さくらんぼけいさん れんしゅう
※9月20日（加数分解、被加数分解、自由計算）
()ぼん なまえ ()

① $3 + 9 =$	② $9 + 2 =$
③ $4 + 8 =$	④ $8 + 3 =$
⑤ $5 + 7 =$	⑥ $7 + 4 =$

【事後調査1】

ア 調査日：9月20日（本時より4日後 ※1）

※1 本時 9月16日（金）

1日後 9月17日（土） 休業日

2日後 9月18日（日） 休業日

3日後 9月19日（月） 祝日（敬老の日）

4日後 9月20日（火） 事後調査1、2実施

イ 調査目的

- ・繰り上がりのある足し算の正答率
- ・加数分解と被加数分解のどちらで計算するか
- ・加数が大きい数の場合（①，③，⑤）と加数が小さい数の場合（②，④，⑥）の式と加数分解と被加数分解の計算方法の相関関係

ウ 調査方法

- ・朝学習の時間に、加数分解、被加数分解について何も言わずに計算に取り組ませた。

【事後調査1の結果】

- ・学級平均正答率：87%
- ・計算方法：加数分解15名、被加数分解3名

- ・式と計算方法との相関：相関なし（全員が同一の計算方法で計算）

【事後調査 1 の考察】

- ・83%の児童が本時で学習した被加数分解ではなく、加数分解で計算していた。これは、これまで授業中や宿題でずっと加数分解で計算してきたので、加数分解での計算が児童に定着していたためと思われる。
- ・ブロックの操作においては、加数が大きな数の場合に被加数分解、加数が小さな数の場合に加数分解で考えた方が操作しやすいと思われるが、計算においては、加数の大小と計算方法の関連は見られなかった。本学級の児童は毎時間10の合成・分解を暗唱しており、10の補数を求めることに抵抗を感じていないことも、関連が見られない一要因ではないかと考えられる。また、授業の中で加数が大きい場合と小さい場合、それぞれどちらの計算方法がやりやすいかを考えさせると、式により計算方法を変える児童も現れると考えられる。

【事後調査 2】

まえさくらんぼけいさんれんしゅう
※9月20日（被加数分解限定計算）
() ばん なまえ ()

① $9 + 2 =$	② $3 + 9 =$
③ $5 + 7 =$	④ $8 + 3 =$
⑤ $4 + 8 =$	⑥ $7 + 4 =$

【事後調査 2】

ア 調査日：9月20日（本時より4日後 ※1 前ページ参照）

イ 調査目的

- ・被加数分解による繰り上がりのある足し算の正答率
- ・加数が大きい数の場合（②，③，⑤）・加数が小さい数の場合（①，④，⑥）のそれぞれの式と正答率の相関関係

ウ 調査方法

- ・朝学習の時間に、実態調査1を実施した後、被加数分解で計算するよう指示をして取り組ませた。

【事後調査 2 の結果】

- ・学級平均正答率：87%
- ・加数が大きい数の場合（②，③，⑤）・加数が小さい数の場合（①，④，⑥）のそれぞれの式と正答率の間に相関関係は見られなかった。

【事後調査 2 の考察】

- ・被加数分解による計算の正答率は87%と自由に計算（加数分解，被加数分解の限定なし）させたときの正答率と全く同じであったことから、本時で初めて学習した被加数分解での計算方法は、十分定着していると言える。

第三章

④指導に生かす事後調査～誤答分析～

事後調査を行った際、その調査結果は、「個に応じた指導」や「授業改善」に生かされるべきです。そのための有効な方法の一つとして「誤答分析」があります。児童の間違いの原因を明らかにし、今後の指導に生かします。

本実践の事後調査2において、6問中全問正解した児童が13名、5問正解した児童が3名（A、B、C児）、4問正解した児童が1名（D児）でした。A～D児の誤答は次のとおりでした。

A児
② $3 + 9 = 11$

B児
③ $5 + 7 = 13$

C児
① $9 + 2 = 12$

D児①
① $9 + 2 = 13$

D児②
⑥ $7 + 4 = 4$

それぞれの誤答箇所を計算過程に合わせて見ていくと次のようになります。

	さくらんぼの右を正しく 書けている	さくらんぼの左を正しく 書けている	10とさくらんぼの左を合 計している
A児	○	○	×
B児	×	○※1	○※2
C児	○	×	○※2
D児①	○	×	○※2
D児②	○	×	○※2

※1：さくらんぼの右の数値に応じて被加数を分解できている。（右の数値は間違い）

※2：さくらんぼの左の数値に10を合わせた数を答えとしている。（左の数値は間違い）

この結果から、誤答のパターンは次の3パターンと言えます。

誤答類型	児童	誤答の原因
誤答類型1	A児	正しく被加数を分解できているのに、10のまとまりと2を足すべきところを、右のさくらんぼの1を足してしまっている。
誤答類型2	B児	加数の7に3を足して10のまとまりをつくるべきところを、7に2を足している。（右のさくらんぼの数値の間違い）
誤答類型3	C、D児	右のさくらんぼは正しく書けているが、左のさくらんぼを正しく書けていない。

上記の4名の誤答類型をみると、本学級の児童が被加数分解するときの留意点として次の3つが上げられます。

- ①被加数を分解するときに、右のさくらんぼに加数と合わせて10になる数を記入する。
～右のさくらんぼに注意！～（B児）
- ②被加数を分解するときに、右のさくらんぼに応じて左のさくらんぼの数を記入する。
～左のさくらんぼに注意！～（C，D児）
- ③10のまとまりと左のさくらんぼの数を足す。
～10と何を足すのか注意！～（A児）

本学級の被加数分解における留意点は上記の3点ですが、それぞれの間違いに偏りが見られたわけではないので、今後の指導法としては、個別に指導していくことが効果的だと考えられます。

④教材研究の一手法「教科書比較」

算数の場合、東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、啓林館、日本文教出版の6社が教科書を発行しています。それぞれの教科書を比較すると、問題に使用されている数値や指導内容の順序、指導方法に特色が見られます。これらの観点を意識して教科書を比較すると、それぞれの教科書会社のねらいや意図が分かり、旭川市、上川管内で採択している教育出版の教科書のねらいも見えてきます。

本実践においては、教科書どおりに、単元計画、問題を設定しましたが、児童の実態や指導者のねらいに応じて、問題をよりよいものに変更することも考えられます。



⑤自己評価の分析～児童は適切に自己評価できていたのか？～

上川教育研修センター第16次研究では、自己評価の在り方として、次のように述べています。

（一部抜粋 下線は筆者）

しかし、発達の段階によっては極端な評価になりがちであるため、児童生徒が適切な自己評価を行うことができるよう、教師の評価を児童生徒へフィードバックすることが大切である。

つまり、発達の段階によっては、正しく自己評価できない可能性があることを指摘しています。

そこで、本学級の児童が本時に行った自己評価がどの程度適切に行われているのかを検証す

第三章

ることにしました。

検証方法として、2つの自己評価（4件法）の平均値と事後調査の得点の相関を調べることにしました。自己評価を低く（高く）付けた児童の事後調査の得点が低ければ（高ければ）、自己評価と事後調査の得点の間に相関が認められ、高い相関があれば児童の自己評価は適切に行われていると仮定しました。また、相関関係については、相関係数を求めるエクセルの関数「CORREL」で算出しました。

自己評価と事後調査の得点結果は右の表のとおりです。このときの相関係数を算出すると0.006となりました。下の表からも分かるように、自己評価と事後調査の得点の間には「ほとんど相関がない」ということが分かりました。つまり、児童は適切に自己評価できて

児童	自己評価	得点
1	4	6
2	3.5	6
3	4	6
4	2.5	6
5	3	2
6	3.5	6
7	4	6
8	3	5
9	4	6
10	4	5
11	4	6
12	4	6
13	3.5	5
14	3	6
15	4	4
16	4	6
17	4	0
18	3.5	6

$1.0 \geq R \geq 0.7$	： 高い相関がある
$0.7 \geq R \geq 0.5$	： かなり高い相関がある
$0.5 \geq R \geq 0.4$	： 中程度の相関がある
$0.4 \geq R \geq 0.3$	： ある程度の相関がある
$0.3 \geq R \geq 0.2$	： 弱い相関がある
$0.2 \geq R \geq 0.0$	： ほとんど相関がない
出典：「社会調査の基礎」放送大学テキスト	

いるとは言えないことが明らかになりました。

今回の相関係数だけで、「適切に自己評価できていない。」とは言い切れませんが、児童が自分自身を正しく見つめ、理解度や理解した過程を自己評価できるように、今後も自己評価に取り組ませたり、教師の評価を児童にフィードバックしていく必要があります。

⑥自己評価や振り返りのねらい

学習の終末で行う振り返りや自己評価の目的としては次のようなものがあります。

1 学習内容の定着

- ①結論、まとめなどの振り返り（まとめを復唱、解決するポイントを確認）
- ②学習内容をラベリング（今日の学習は「前さくらんぼ戦法」、「家康の我慢勝ち！」）
- ③その他（感情タグ→映像化、語呂合わせ、…）

2 メタ認知能力の育成

- ①自分の理解度を自分で分かる
- ②学習過程の振り返り（何が問題で、どんな方法で解決していったか）

3 学ぶ意欲の向上

- ①新たな疑問、調べてみたいことを書かせる。（探究的学習）
- ②今日の勉強で楽しかったことを書かせる。（行動の強化）

4 その他（支持的風土の醸成・対話的学びの推進）

- ①分かりやすい発表の児童の名前を挙げる（誰のおかげで理解できたかを認識）

学習の振り返りや自己評価を行う場合、指導者は「何のために振り返り（自己評価）を行うのか」を明確にして、ねらいに適した方法で行うことが大切です。

第Ⅳ章 研究協力校の授業実践

- 当麻町立当麻小学校 2年 国語科
- | | | |
|-----|------|----|
| 授業者 | 高田裕輔 | 教諭 |
| 研究部 | 泉宏史 | 教諭 |
- 旭川市立北鎮小学校 2年 算数科
- | | | |
|-----|------|----|
| 授業者 | 松尾留実 | 教諭 |
| 研究部 | 加藤大介 | 教諭 |
- 旭川市立西神楽中学校 1年 体育科
- | | | |
|-----|------|----|
| 授業者 | 五十嵐敬 | 教諭 |
| 研究部 | 山上伸也 | 教諭 |

研究協力校の授業実践 小学2年 国語科

登場人物の行動を中心に場面の様子を想像し、 よりよい音読の仕方を考える学習

日 時 平成28年9月30日（金）5校時 実施
児 童 当麻町立当麻小学校第2学年2組 23名
指導者 高 田 裕 輔

〈学校の概要〉

学校の様子	当麻町は、上川のほぼ中央部に位置し、稲作を基幹としながら、でんすけすいか、菊、バラなどの栽培が盛んな農業のまちである。本校には約300人の児童が通学し、のびのびと学習活動に励んでいる。 本校は、「夢と愛をもち、未来にはばたく子ども“やさしく かしこく たくましく”」の教育目標のもと、研修主題を「自らを高め、自分も友だちも大切にする子どもの育成」に設定し、よく聞き、よく考え、よく話す、主体的に学ぶ授業づくりを目指している。
研究の内容	「かかわり合って高まる子を目ざして」 ～よく聞き、よく考え、よく話す、主体的に学ぶ授業づくりを通して～ 子ども全員が意欲的に授業に参加し、かかわり合いながら、学習を高められる姿を目指している。また、子どもが先の見通しをもつことで、自ら学びを進められる姿を目指す。

- 1 単元名 「音読発表会をしよう」（教育出版 2年）
教材名 「かさこじぞう」

2 単元について

〈教材観〉

本単元に関わる学習指導要領の目標及び内容（抜粋）は、次のとおりである。

【学習指導要領】 ～第1学年及び第2学年（国語科）の目標と内容～

1 目 標

- (3) 書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。

2 内 容

C 読むこと

- (1) 読むことの能力を育てるために、次の事項について指導する。
ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。
ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。

第Ⅳ章

第1学年までに「うみへのながいたび」の学習において、登場人物の様子を考えながら音読することで、思いを捉えてきた。

第2学年になってからは、3つの物語文を通じて、登場人物の気持ちを考えてきた。「えいっ」では、吹き出しなどを使って登場人物の様子を思い浮かべる活動を行ってきた。「きつねのおきやくさま」では、音読を行うことで、繰り返し出てくる言葉を気付けるように指導してきた。また、「わにのおじいさんのたからもの」では、登場人物のしたことを思い浮かべながら読み、それを生かして最後には物語の続きを書く活動を行っている。

この教材では、読むことの学習を生かして、学習の最後にグループごとに音読発表会をする。子どもたちは、発表会の場面を目指して、教材文に書かれた情景や人物の様子を想像するための活動を展開する。すなわち、動作化したり、声の大小や強弱などを考えて音読（群読）を工夫したりすることである。また、それは、それぞれが教材文をどのように読んでいるのかをグループ内で交流することにもなる。

〈児童観〉

本学級の児童は、学習に対する意欲が高く、課題に一生懸命取り組むことができる児童が多い。また、自分の考えを発表することにも積極的である。しかし、友達の発表を聞くことを苦手とする児童が多い。その結果、それぞれが、自分の考えを発表するだけに終わることが多いのである。そこで、学習活動全体を通して、「はっきり友達を見て発表する・聞く・反応する」ということを繰り返し指導してきたが、まだ十分とは言えない。友達の考えを聞きながら発表することの楽しさを感じさせたい。

物語を読むことの学習では、根拠のない思い付きを発表するだけにならないように気を付けている。そのため、登場人物の行動を表す言葉や会話文に着目し、そこから分かる様子や気持ちを動きで表したり、自分の言葉で伝え合ったりしながら読むことができるように指導してきた。

〈指導観〉

本単元では登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことが大切である。そのため、教科書の本文の言葉から、キーワードを見付けたり、実際に登場人物になりきり、体を動かしたりしながら想像を広げさせたいと考える。各単位時間の中に音読する時間を取り入れながら、最終的には場面ごとに役割分担をして音読発表会として完成させたい。そして皆で作り上げた充実感や達成感も味わわせたい。

発表会の場面においては、恥じらいが出たり自信がもてなかったりする場合も考えられる。そのため全員が参加するための工夫として、学習形態の工夫や話型の掲示をしていく。ペアやグループで活動することによって安心感が生まれ、話型があることで自信をもって話すことができると思う。

また、学びの基盤に関わり、本学級では次の点を大切にしてきた。

① 「教室環境の整備」について

- ・既習事項をいつでも確認し活用できるよう、板書や児童の考えなどを模造紙で掲示した

り，実態に応じた話型を掲示したりした。

② 「学習規律の確立」について

- ・特に話し方や聞き方について徹底した指導をしてきた。さらに，友達の見解に反応する等，より発表しやすい規律の確立を目指している。

③ 「支持的風土の醸成」について

- ・一人一人が主体的に学習活動を進め，それを支え合うことが支持的風土の醸成につながると考える。そのために，ペアやグループでの活動を日常的に取り入れ，その中で全員が発言し，活躍できる場を設定してきた。

3 単元の目標

音読発表会を通して，場面の様子について登場人物の行動を中心に，想像を広げながら読むことができる。

4 評価規準

単元の評価規準		
国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
音読発表会をすることに関心を持ち，楽しく動いたり音読したりしようとしている。	場面の様子や登場人物の気持ちを想像している。	様子を表す言葉に気を付けて，文章を読んでいる。
学習活動における具体の評価規準		
①音読発表をすることに関心を持ち，進んで読もうとしている。 ②音読発表会での動きや音読の仕方を考えたり，恥ずかしがらずに表現したりしている。	① 読み取った登場人物の様子や気持ちを基に，音読の仕方を『読み方ボックス』から選んでいる。 ② 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読している。	①言葉には，意味による語句のまとまりがあることに気付いている。 ②民話独特の表現やリズムを意識して読んでいる。

第Ⅳ章

5 指導と評価計画

1 単位時間の学習課題 まとめ 言語活動

	時	指導目標	主な学習活動	評価規準及び方法
見付ける	1・2	◎音読発表をすることに関心を持ち、進んで読むことができるようにする。	○単元の目標を設定する。 音読発表会を開くために、様子を詳しく読んだり、読み方を工夫したりしよう。 ○音読の手本（教師による音読）を示す。 ○上手な音読の方法を確認する。 ○音読発表会のイメージをもたせる。 ○全文を読み、言葉の意味調べをする。 ○場面を分け、課題を作る。	指導→指導に生かす評価 記録→記録に残す評価 指導 〈関①〉
求める	3	◎読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選ぶことができるようにする。	○動作化や、登場人物の様子やせりふから、大晦日のじいさまとばあさまの気持ちを考え、動きや言い方を工夫する。 （音読発表会にむけて）大晦日のじいさまとばあさまの気持ちを読み取ろう。 【段階①：個人思考】 - 読み取れるキーワードに線を引く。 【段階②：集団思考】 - 文章のまとまりごとに小まとめを作る。 【段階③：思考のまとめ】 - 課題のまとめからその思いが一番表れている部分をみんなで確認し、自分なりに音読の方法を考えて音読する。 かさこが売れるようにすげがさをあんでいる、びんぼうなじいさまとばあさま。 ○読み方を工夫して音読する。 - 工夫を例示し、取り組みやすくする。	記録 〈読①〉 教科書

求める	4	◎読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選ぶことができるようにする。	○動作化や、登場人物の様子やせりふから、かさを売りに行ったじいさまの気持ちを考え、動きや言い方を工夫する。 かさを売りに行ったじいさまの気持ちを読み取ろう。 【段階①：個人思考】 ・読み取れるキーワードに線を引く。 【段階②：集団思考】 ・文章のまとまりごとに小まとめを作る。 【段階③：思考のまとめ】 ・課題のまとめからその思いが一番表れている部分をみんなで確認し、自分なりに音読の方法を考えて音読する。 ばあさまもじぶんもきたいしていたけれど、かさが売れなくてくやしがつたじいさま。 ○読み方を工夫して音読する。 ・工夫を例示し、取り組みやすくする。	記録 <読①> 教科書
	5	◎読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選ぶことができるようにする。	○動作化や、登場人物の様子やせりふから、地藏様にかさや手ぬぐいをかぶせたじいさまの気持ちを考え、動きや言い方を工夫する。 地藏様にかさや手ぬぐいをかぶせたじいさまの気持ちを読み取ろう。 【段階①：個人思考】 ・読み取れるキーワードに線を引く。 【段階②：集団思考】 ・文章のまとまりごとに小まとめを作る。 【段階③：思考のまとめ】 ・課題のまとめからその思いが一番表れている部分をみんなで確認し、自分なりに音読の方法を考えて音読する。 じぞうさまが立っていて、かわいそうと思ったから、売りもののかさと自分の手ぬぐいをかぶせてほっと安心したじいさま。 ○読み方を工夫して音読する。 ・工夫を例示し、取り組みやすくする。	記録 <読①> 教科書

第Ⅳ章

求める	6	◎読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選ぶことができるようにする。	○動作化や、登場人物の様子やせりふから、年を越すじいさまとばあさまの気持ちを考え、動きや言い方を工夫する。 年を越すじいさまとばあさまの気持ちを考えよう。 【段階①：個人思考】 - 読み取れるキーワードに線を引く。 【段階②：集団思考】 - 文章のまとまりごとに小まとめを作る。 【段階③：思考のまとめ】 - 課題のまとめからその思いが一番表れている部分をみんなで確認し、自分なりに音読の方法を考えて音読する。 かさは売れなかったが、二人なかよくもちつきをし、幸せなじいさまとばあさま。 ○読み方を工夫して音読する。 - 工夫を例示し、取り組みやすくする。	記録 <読①> 教科書
	7 (本時)	◎読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選ぶことができるようにする。	○動作化や、登場人物の様子やせりふから、不思議な体験をしたじいさまとばあさまの気持ちを考え、動きや言い方を工夫する。 おくり物がとどいてからのじいさまとばあさまの気持ちを读み取ろう。 【段階①：個人思考】 - 読み取れるキーワードに線を引く。 【段階②：集団思考】 - 文章のまとまりごとに小まとめを作る。 【段階③：思考のまとめ】 - 課題のまとめからその思いが一番表れている部分をみんなで確認し、自分なりに音読の方法を考えて音読する。 たくさんの贈物をもらいおどろいたが安心したじいさまとばあさま。 ○読み方を工夫して音読する。 - 工夫を例示し、取り組みやすくする。	記録 <読①> 教科書

高める	8・9	◎言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くとともに、語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読することができるようにする。	○役を決めて、登場人物の様子を想像しながら、音読の仕方を話し合う。	指導 〈読②〉 教科書 〈言①〉
	10・11	◎音読発表会での動きや音読の仕方を考えたり、恥ずかしがらずに表現したりするとともに民話独特の表現やリズムを意識して読むことができるようになる。	○音読発表会をする。 ○他のグループの発表のよい所をノートに書いて、読み合う。	指導 〈関②〉 〈言②〉

6 本時の学習 (11 時間扱い 7 / 11)

(1) 目標

- ・読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選ぶことができる。

(2) 対話による思考の共有化に関わって

条件1：話合いの目的や明確なゴールの設定

課題に対するまとめを考えやすくするために、「小まとめ」を考えたり、動作化して考えたりする場を設定する。

条件2：互いの考え方や理解の違いの見える化を促す工夫

明らかな間違いや気付き、修正点を議論させるために班代表の意見をホワイトボードに書き、全体で話し合わせる。

条件3：集団思考に最適な場の設定

自分の意見を友達と確認させるためにペア学習を取り入れる。また、さらに全体で話し合わせたい時には、話し合うための材料（グループの意見など）があることを確認して行うなど、その場面に応じた場を設定する。

第Ⅳ章

(3) 展 開

1 単位時間の学習課題 1 場面 1 場面 児童生徒に考えさせること

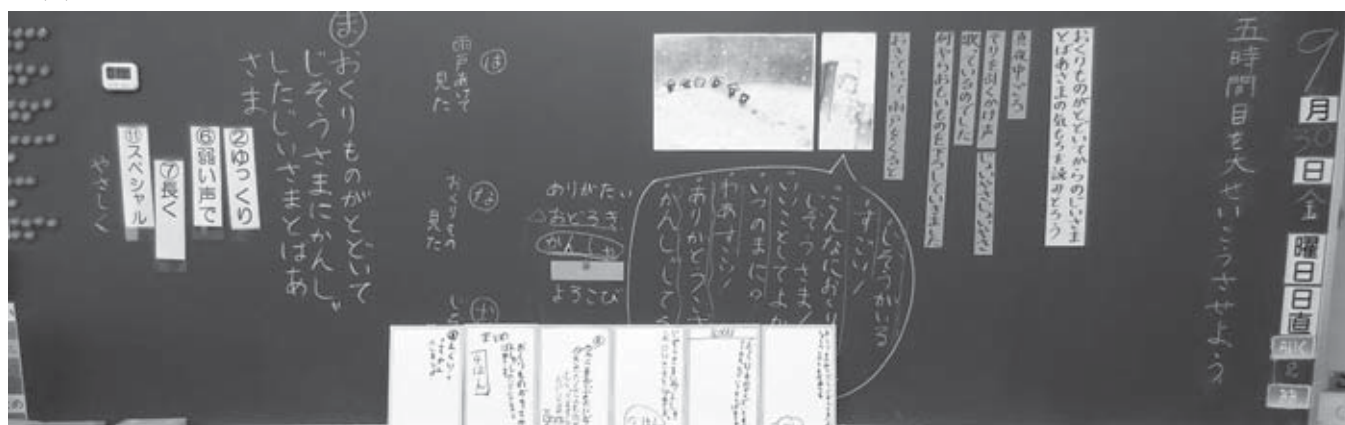
教師の活動	児童の活動
【学習活動を明確にする導入】 1 学習計画表や模造紙板書を活用し、前時までの学習を振り返らせる。	1 前時までの学習を振り返る。 ・4の場面を学習した。 ・課題は〇〇だった。 ・まとめは〇〇になった。 ・〇〇な読み方をした。
2 本時の学習課題を確認させる。 (音読発表会を成功させるために,) 贈物が届いてからのじいさまとばあさまの気持ちを読み取ろう。	2 本時の学習課題を確認する。
3 本時の場面の音読をさせる。 4 場面の状況などを確認させる。 時系列も捉えやすくする。 ・真夜中…何時くらい？ 何があったの？ ・そりを引く掛け声って…？	3 本時の場面の音読をする。 ・代表1名が音読する。 4 場面の状況を確認する ・12時くらい。2時くらい。 ・掛け声が聞こえてきた。 ・じょいやさ じょいやさ。・地蔵様の声。 ・他にも歌が聞こえてくる。 ・まさか家に来ないよな。お化けかな？ ・誰だ？こんな真夜中に。 ・ずっとさん ずっとさん。・重い物の音。 ・歩いている地蔵様。 ・その後たくさんの贈物が見えた。 ・もちの俵。・だいこん・ごんぼ など
【発問の工夫】 ・掛け声を聞いたじいさまとばあさまはどう思ったのだろう。 ・その後どんな音がしたかな？ ・雨戸をくると遠くに何が見えたの？ ・目の前にあったものは何？	
【段階①：個人思考】 5 (贈物の実物を出して) 贈物を見たじいさまとばあさまは、どんなことを思ったか考えさせる。	贈物を見た時の登場人物の気持ちを考える。 5 贈物をもらった時のじいさまとばあさまの気持ちを考えてノートに記述する。 「地蔵様が持ってきてくれたの？」 「欲しいと思っていた物がある！」 「これがあれば、よい正月になる。」 「笠をかぶせたお礼なんだ。」 ※動きを一部イメージさせて考えさせる。
6 贈物を見た時の気持ちを発表させる。	6 贈物を見た時の気持ちを発表する。

【段階②：集団思考】 7 6で発表された気持ちを短くまとめる（小まとめ）。 【条件1：話合いの目的や明確なゴールの設定→課題のまとめを作るために小まとめを話し合う】 【条件2：互いの考え方や理解の違いの見える化を促す工夫→ホワイトボードの活用】 【条件3：集団思考に最適な場の設定→場に応じたペア・グループ・全体での話合い】 8 登場人物の動きやせりふを動作化で発表させる。 9 課題に対するまとめを行わせる。	課題に対するまとめを考える。 7 班ごとに小まとめを考える。 ・感謝 ・驚き ・信じられない ・ありがとう ・喜び ・幸せ ※根拠について確認する。 8 動作化で発表する。 ・じいさまとばあさまが手をつないで、 「これでいい正月を迎えられるね」 「夢じゃないだろうか」 ・じいさまとばあさまが手を振って 「地藏様、ありがとう！」 「また、かさこを持っていくね。」 ・「驚き→喜び→感謝」と気持ちに流れがあることを感じさせる。 ※根拠について確認する。 9 課題に対するまとめを行う。 ・小まとめや動作化で出てきた言葉を基に作らせる。
じぞうさまにかんしゃしているじいさまとばあさま。	
【段階③：思考のまとめ】 10 大まとめに関連のある1文の読み方を考えさせる。 ・読み方の工夫を例示し、選ばせる。 【読み方ボックスの例】	読み方の工夫を考える。 10 大まとめに関連のある1文を選ばせて、読み方を考える。 ・教科書に書き込みをする。 ・「感謝をしているのだから、『じいさまとばあさまは、よいお正月を迎えることができました』をゆっくり、間を取るように読むといいと思うよ。」

第Ⅳ章

・人数をかえて読む。 ・大きく（小さく）なるようにする。 ・ゆっくり（はやく）読む。 ・間を開ける…気持ちが入る。 ・投げるよう（置くように）に読む。 など	・「食べ物をもらったことに感謝をしているのだから、食べ物の名前を一つ一つ強調して読むといいと思うよ。」
【評価場面】〈読②〉発言・教科書 A 読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選んだり、自分で表現の仕方を工夫したりすることができる。 B 読み取った登場人物の様子や気持ちを基に、音読の仕方を『読み方ボックス』から選ぶことができる。	
11 自分で考えた読み方で音読させる。	11 自分で考えた読み方で音読する。
【学びを振り返る場の設定】 12 本時を振り返る。 「話合いや読み方ボックスから、よい音読の仕方を見付けることができましたね。」	12 本時の場面の振り返りをする。
【学ぶ意欲を高める自己評価の在り方】 13 自己評価させる。 「今日の課題やまとめを振り返り、3段階の顔マークでノートに記入してみましよう。」	13 自己評価する。 ・自己評価を3段階でノートに記入する。 ・ノートを提出する。

(4) 板 書



(5) 自己評価

○3段階の顔マークでノートに記入させる。

7 本時の分析

(1)学習内容を明確にする導入

前時までの板書や児童たちの考えを、模造紙にまとめて教室に掲示した。そうすることで、前時までの振り返りを明確に行うことができた。

(2)発問の工夫

本時の学習場面の様子を全員が把握できるように場面の状況を確認する発問を行った。そのことにより、単元の問題でもある「想像を広げながら読む」ことにつながった。

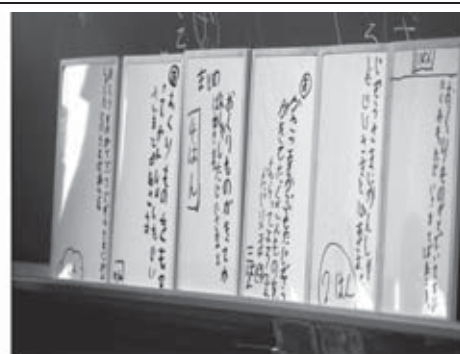
(3)言語活動の設定 段階①：個人思考

贈物をもらった時の気持ちを考える前にせりふのない動作化を行わせた。そうすることで、児童は場面の状況を具体的に想像することができ、全員が自分の意見をもつことができた。

(4)言語活動の設定 段階②：集団思考

課題に対するまとめを班ごとに行わせるために、小まとめなどを板書し、参照できるようにした。児童は板書された小まとめを参照しながら、根拠を明らかにしながら、課題に対するまとめを行うことができた。

また、登場人物の気持ちを捉えさせるために、じどうさまの贈物の実物を提示した。児童は場面の状況を具体的に想像することができ、登場人物の気持ちをしっかりと捉えることができた。



(5)板書の工夫

児童の発言を中心に、前時までの模造紙と似た構成で板書した。そうすることで、児童は授業の見通しをもって学習に参加することができた。また、登場人物の気持ちを考える際に、模造紙に書かれたことを根拠として発言する児童もいた。

(6)言語活動の設定 段階③：思考のまとめ

音読発表会に向けて、読み取った登場人物の様子や気持ちを基に音読の仕方を場面ごとに考えさせた。

1文に絞って考えさせることで、より集中して考えることができた。「速く読む」「大きく読む」など、教室に掲示したものを参考にして、読み方のバリエーションが増えるだけでなく、場面に応じた読み方を容易に考えることができた。



(7)学びを振り返る場の設定

2人の児童に、どのような考えで読むのがふさわしいかを発表させ、実際に本時の場面の音読をさせた。それにより、本時の学習の成果を確認させることができた。

(8)学ぶ意欲を高める自己評価の在り方

単元を通して毎時間、一単位時間の自己評価を行った。低学年の児童が、自分自身の振り返りを簡単に行えるように、顔マークで評価を行った。絵での評価は、児童にとって分かりやすかった。しかし、今後はその評価の理由を何らかの形で表せるようになることが望ましい。

第Ⅳ章

8 「対話による思考の共有化」に関わる分析

○条件 1：話合いの目的や明確なゴールの設定

今回の実践は、単元の第3時から本時（第7時）まで、「（音読発表会に向けて）○○の時の○○（登場人物）の気持ちを読み取ろう。」というような同じ形式の課題を提示し、毎時間同じような学習過程で指導を行ってきた。そのため児童は毎時間の話合いの目的やゴールをしっかりと認識し、見通しをもって学習に取り組むことができた。

また、課題を解決するというゴールに個々の児童が到達するために次の2つの手立てを行った。

1つめは、課題に対するまとめを行いやすくするための「小まとめ」を考えさせる活動である。場面の状況を読み取ったり、登場人物の心情の変化を読み取ったりした後に、そのまま課題に対するまとめを行わせると、低位の児童にとっては、うまくまとめることができないと考えた。そこで、「小まとめ」を行わせ、それを板書に残した。そうすることで、低位の児童にとっても「小まとめ」を手掛かりに、課題に対するまとめを行うことができた。

2つめは、登場人物の心情の変化を捉えさせるために「動作化」を行った。役割演技のように、教科書にはない、じいさまとばあさまのせりふも考えさせたことで、「驚き→喜び→感謝」という心情の変化を捉えることができた。



○条件 2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫



各班の「大まとめ」の違いを見える化するために、それぞれの班の「大まとめ」をホワイトボードに書き、並べて掲示した。そのことで、自分たちの班との違いに気づき、本時のまとめをどのように表現するのがよいかという話合いを行うことができた。しかし、どの大まとめも長文となっていたので、比較が難しい面もあった。班による違いを比較しやすくするには、文型をそろえるなどの工夫も必要だろう。

○条件3：集団思考に最適な場の設定

集団思考を効果的に進めるために、ペアやグループなど、目的に応じて学習形態を工夫した。ペア学習は、自分の意見を友達と確認させ、発言意欲を高めることを目的として行った。グループ学習は、課題に対するまとめを考えさせる場面など、児童一人で考えるのが難しいと思われる場面で、複数の考えでまとめることを目的として行った。これらの手立てにより、思考の共有化を図ることができた。

さらに、質の高い話し合いを行うためには、学習形態の工夫だけではなく、発言するときの接続詞の使い方や話形（双括型で初めに結論を述べてから意見を言う。）などについての指導も必要だと考えられる。

単元を通した成果と課題

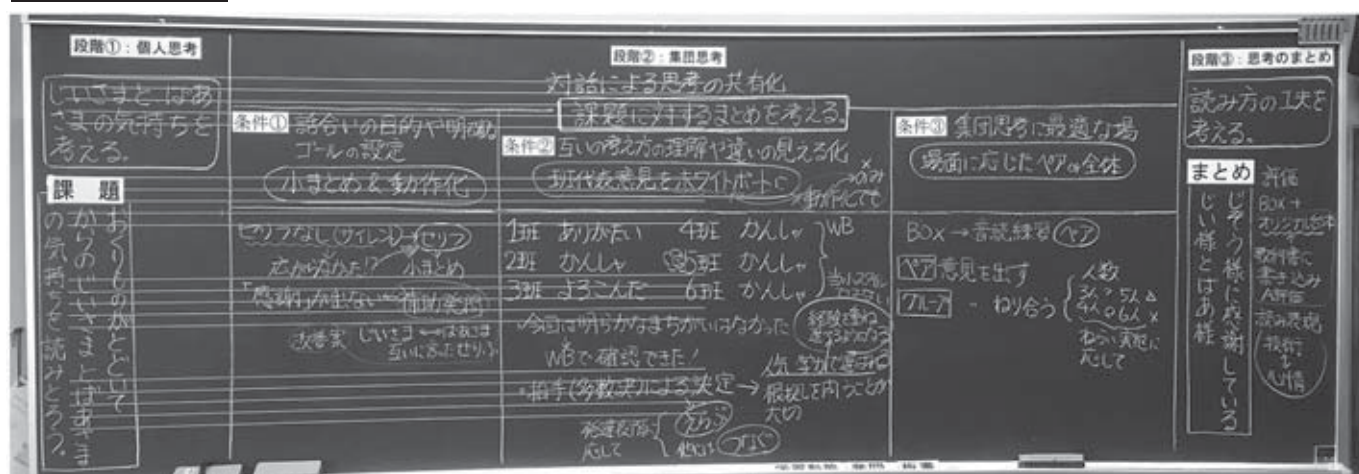
< 成果 >

- 3段階の言語活動の「思考のまとめ」に音読の工夫を考えたり、実際に音読を行ったりする活動を設定した。そのことにより、単元を貫く言語活動「音読発表会」のために、毎時間の読み取りを行っているという学習の目的を常に児童に意識させることができた。
- 国語の文学的教材の学習では、本校独自のスタイルで、「かかわり合って高まる子」を目指してきた。本校の研究として取り組んできた「小まとめ」「動作化」「ペア・グループ学習」などは、上川教育研修センター第16次研究の「対話による思考の共有化」の3つの条件と合致する点が多かった。この3つの条件を整えることにより、思考力・判断力・表現力が育成されることが確認できた。

< 課題 >

- 意見を高め合うためのペアやグループなど学習形態は、ねらいや実態に応じて適切な人数になるような工夫が必要である。
- 小まとめで行う言葉決めでは、拍手の数による決定を行った。今後は、発段階に応じて、多数決だけではなく根拠を重要視しながら言葉決めを行っていくことが必要である。

研究協議板書



コラム－5

「対話による思考の共有化」
－小学校国語科の集団思考における3つの条件－

本コラムでは、「対話による思考の共有化－3つの条件－」について、小学校第2学年国語科「読むこと」領域の実践を通して紹介します。本実践では、単元を貫く言語活動に「『がまくんとかえるくんシリーズ』の好きなお話を演じよう!」を位置付けました。

集団思考の前段として

本時では、はじめに、以下の学習課題を提示しました。

学習課題：(音読劇を成功させるために)

会話文の読み方を考える手掛かりを見付けよう。

段階①：個人思考【学び合いの根拠となる材料作り】

個人思考では、学習課題について自分の考えをノートに書かせました。その際、「会話文の読み方を考える手掛かりを見付けさせるために、2つの会話文「ああ。」の読み方を比較させる発問を行い、思考を促しました。

「対話による思考の共有化」－小学校国語科の集団思考における3つの条件－

集団思考では、「対話による思考の共有化」に向けて、以下に示した「3つの条件」を意識して授業を進めました。

段階②：集団思考【対話による思考の共有化】

条件①：話合いの目的や明確なゴールの設定

集団思考に入るときには、教室に掲示された学習計画表に目を向け、単元を貫く言語活動のどの部分を学習するのかを意識させました。また、今から始まる話合い活動のねらいは、「音読劇を成功させるために、会話文の読み方を考える手掛かりを見付ける」ということであることを確認しました。

条件②：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

板書の工夫として、「文から分かること」と「挿絵から分かること」の2点に整理し、2つの場面の会話文や挿絵を手掛かりにして考えられるようにしました。板書計画を事前に準備し、予想される意見や考えを整理・分類したことで、思考や判断、表現をサポートすることができました。

条件③：集団思考に最適な場の設定

第2学年という発達の段階から、学級全体による集団思考だけでなく、ペア活動を適宜位置付け、自分の考えを表現する場面を多く設定しました。

集団思考の後段として

段階③：思考のまとめ【個人に戻り考えをまとめる】

思考のまとめでは、集団思考で話し合われたことの共有化を図るために、学習用語を使って整理・分類しながらまとめる言語活動を行いました。

本時のまとめ：会話文の意味や周りの文、挿絵に注目するとよい。

このように、国語科においても、集団思考における3つの条件を意識して実践することで、「対話による思考の共有化」を図ることができます。

研究協力校の授業実践 小学2年 算数科

乗法の意味について理解し、 それを用いることができる学習

日 時 平成28年10月27日（木）5校時 実施
 児 童 旭川市立北鎮小学校第2学年2組 24名
 指導者 松 尾 留 実

<学校の概要>

学校の様子	北鎮小学校の校区は、旭川市の北西部に位置し、緑に囲まれた歴史と伝統のある学校である。校地が大変広く、子どもたちはのびのびと学習活動に励んでいる。また、公務員の官舎が多く建ち並ぶ地域であるため、転出入も多くなっている。 本校は、①気持ちのよいあいさつで望ましい人間関係を作る指導の充実、②関わり合い、ともに支え合う学級風土をはぐぐむ学級経営の充実、③子どもの心の居心地が保障される教師の支援の徹底、④自分の言動を振り返る場の充実、⑤「思いやり・親切」の価値を最重点指導項目とする道徳の時間の充実を図り、「思いやりのある子ども」の育成に取り組んでいる。
研究の内容	「確かな学力」を身に付け、関わり合いの中で共にのびる子どもの育成 ～算数科における問題解決的学習を通して～ 単位時間における評価規準の明確化と練習問題の吟味、問題の内容・提示の工夫、集団解決の終末の想定と考えの取り上げ方などを計画することにより、一つの問題に対して多くの子どもが関わり合い、高め合い、支え合う楽しさを身に付けるといった「関わり合いの中で共にのびる子ども」の育成を目指している。

1 単元名 「かけ算九九づくり」（教育出版2年）

2 単元について

<教材観>

本単元に関わる学習指導要領の目標及び内容（抜粋）は、次のとおりである。

【学習指導要領】～第2学年（算数科）の目標と内容～

1 目 標

- (1) 具体物を用いた活動などを通して、数についての感覚を豊かにする。数の意味や表し方についての理解を深めるとともに、加法及び減法についての理解を深め、用いることができるようにする。また、乗法の意味について理解し、その計算の仕方を考え、用いることができるようにする。
- (4) 具体物を用いた活動などを通して、数量やその関係を言葉、数、式、図、表、グラフなどに表したり読み取ったりすることができるようにする。

2 内 容

A 数と計算

- (1) 数の意味や表し方について理解し、数を用いる能力を伸ばす。
- (3) 乗法の意味について理解し、それを用いることができるようにする。

第1学年までに、2ずつ、5ずつ、あるいは10ずつのまとまりで数えることの学習において、乗法の素地となる見方を指導してきた。

第2学年では、これらの基礎の上に、同じ大きさの数量を一まとまりと捉えさせ、その数量がいくつ分あるかという乗法の意味を指導してきた。さらに、式や答えの求め方について理解を図るとともに、 $5 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4$ の段の九九について構成と唱え方を学習し、それらを

第Ⅳ章

使った問題解決や問題作りを行ってきた。また、その範囲の九九について表にまとめることも扱い、交換法則などの決まりにも着目させてきている。

本単元では、これらの既習事項を踏まえ、同数累加としての乗法の意味を基にしたり、「乗数が1増えると、積は被乗数分だけ増える」ことを基にしたりして、 $6 \cdot 7 \cdot 8 \cdot 9 \cdot 1$ の段の九九を児童自身で構成していく。また、九九を完成させたあとは、前単元で学習した「1つ分の数」×「いくつ分」＝「全部の数」という乗法の意味に基づき、連続量の場面と関連させて、「何倍」という表現の仕方や「倍」の意味を指導する。倍概念は、本単元の指導に始まり、以降の学年で段階的に理解を深めていく。

〈児童観〉

本学級は、意欲的に学習に取り組み、課題に対して自分の考えをノートに書くことのできる児童が多い。しかし、考え方を説明する活動になると、自信がもてず消極的になってしまいがちである。そのため、日常的な指導において、図に考えを書き込ませたり、ペアやグループで相談する時間を設けたりしながら、自分の考えを説明する活動を取り入れてきた。

これまでの算数の学習では、乗法の意味や式、答えの求め方について理解を深めてきた。その都度、同じ数ずつのまとまりをつくって立式することで、視覚的・体験的に図を式と結び付けて表す活動場面を設定してきた。

前単元（ $5 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 4$ の段）の学習終了後に診断的評価を行った。その結果、九九の計算問題と、式（まとまり）を図に表す問題については、おおむね定着していることが分かった。文章問題においては、「いくつ分」→「1つ分の数」の順で数字が示される問題での誤答が多く、立式について十分に理解できていない児童が3割程度いることが分かった。

〈指導観〉

九九は、これから学習する乗法や除法の計算などの基礎となる内容であるので、全ての児童にその意味を理解させ、かつ技能として定着させることが重要である。

新たに九九を構成するときは、既習の九九から類推して考えることを大切にしたい。本単元では、これまでと同じように、乗法の意味や乗数と積の関係を基にして構成できることや、被乗数と乗数を入れ替えることで既習の九九に帰着できる場合があることを、アレイ図なども使いながら説明させていく。学んだことが、日常でも活用できる機会が多いことに気付かせていく。また、九九の構成の学習が終了しても、繰り返し練習の機会を設けたり、ゲームとして取り上げたりするなど、継続的な取組によって習熟を図っていく。

倍概念の基礎の学習では、1つ分の大きさの何倍かに当たる大きさを求める場合にも乗法が用いられることに気付かせていく。図の表現とも結び付けながら、実感を伴った理解がされるように工夫する。また、不揃いに並ぶものの個数を求めるときに九九を活用する問題では、九九が適用できるように分割したり移動したりするという考え方を大切にしたい。

本時の学習問題では、図を分割し、同じ数ずつのまとまりを作ることで、多様な方法で答えを求めることができる。児童にとって新しい考え方を中心に取り上げ、図を多様な見方で分割し、立式できる力を養っていく。また、多様な考えを認めることで、友達と考えを交流し、学び合う楽しさを感じさせたい。

また、学びの基盤に関わり、本学級では以下の点を大切にしてきた。

- ① 「教室環境の整備」について
 - ・既習事項を振り返りやすいように、これまでの学習のまとめや大切な言葉、九九表などを教室に掲示した。
- ② 「学習規律の確立」について
 - ・どの学習でも休み時間との切り替えをしっかりと行うために、挨拶、返事、言葉遣いなどを意識させる指導を継続的に行ってきた。
- ③ 「支持的風土の醸成」について
 - ・思いやりの心の育成を第一に、日常生活や道徳の時間とも関連させながら、互いのよさを認め合うプラス思考の言葉や態度について指導を行ってきた。

3 単元の見目標

乗法に関して成り立つきまりを用いて、6, 7, 8, 9, 1の段の九九を構成することができるとともに、6, 7, 8, 9, 1の段の九九の唱え方を知り、1位数をかける計算が確実にできる。また、数の乗法的な構成について理解し、問題場面を乗法を活用して解決できる。

4 評価規準

単元の評価規準			
算数への 関心・意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形についての 技能	数量や図形についての 知識・理解
乗法について成り立つ性質や決まりを見付け、進んで九九を構成しようとしている。	乗法と積との関係、変換法則などを基に九九の構成の仕方を考えている。	6, 7, 8, 9, 1の段の九九を確実に唱えることができる。	6, 7, 8, 9, 1の段の九九について、式に表したり、式を読み取ったりすることを通して、乗法が用いられる場面の数量の関係や、倍はかけ算の式で表されることを理解している。
学習活動における具体的評価規準			
① 6, 7, 8, 9, 1の段の九九の構成に取り組もうとしている。	① 乗数と積の関係などを用いて、6, 7, 8, 9, 1の段の九九の構成の仕方を考えている。 ② 1つの数の求め方について、図を多様な見方で分割し、九九を使って考えている。 ③ ものの数を求める場面において、九九が適用できるように分割したり移動したりする工夫を考えている。	① 6, 7, 8, 9, 1の段の九九を唱えることができる。	① 基にする数量の□個分のことを□倍ということと、倍はかけ算の式で表されることを理解している。

第Ⅳ章

5 指導と評価計画

1 単位時間の学習課題 1 単位時間の問題文 まとめ 言語活動

時	指導目標	主な学習活動	評価規準及び方法
1	◎ 6 の段の九九の構成をすることができるようにする。	6 の段を作ろう。 ○ 6 の段を構成するという見通しをもつ。 6 の段の秘密を見付けよう。 【段階①：個人思考】 - 九九作りの図を使って，6 の段を構成する。 【段階②：集団思考】 - 言葉，数，式，図などを使って，6 の段の構成の仕方を説明し合う。 【段階③：思考のまとめ】 - 九九表に 6 の段の答えを書き込み，気付きを整理する。 かける数が 1 増えると，答えは 6 ずつ増える。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 → 指導に生かす評価 記録 → 記録に残す評価 指導 〈関①〉 記録 〈考①〉 ノート
2 ・ 3	◎ 6 の段の九九に習熟できるようにする。	6 の段を覚えよう。 ○ 6 の段の唱え方を知り，暗唱する。 九九カードで練習しよう。 ○ 九九カードを用いたゲームをする。 6 の段を覚えて，唱えることができた。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈技①〉
4	◎ 7 の段の九九の構成をすることができるようにする。	7 の段を作ろう。 ○ 7 の段を構成するという見通しをもつ。 7 の段の秘密を見付けよう。 【段階①：個人思考】 - 九九作りの図を使って，7 の段を構成する。 【段階②：集団思考】 - 言葉，数，式，図などを使って，7 の段の構成の仕方を説明し合う。 【段階③：思考のまとめ】 - 九九表に 7 の段の答えを書き込み，気付きを整理する。 かける数が 1 増えると，答えは 7 ずつ増える。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈関①〉 記録 〈考①〉 ノート
5 ・ 6	◎ 7 の段の九九に習熟できるようにする。	7 の段を覚えよう。 ○ 7 の段の唱え方を知り，暗唱する。 九九カードで練習しよう。 ○ 九九カードを用いたゲームをする。 7 の段を覚えて，唱えることができた。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈技①〉

7	◎ 8 の段の九九を構成することができるようにする。	1 列に 8 人ずつ、4 列に並んでいます。全部で何人いるでしょうか。 ○ 題意を把握し、立式する。 8×4 をいろいろな方法で求めよう。 【段階①：個人思考】 - 九九作りの図などを使って、8×4 の求め方を考える。 【段階②：集団思考】 - 言葉、数、式、図などを使って、答えの求め方を説明し合う。 8×4 は、8 の段や他の段でも求めることができる。 【段階③：思考のまとめ】 - 九九表に 8 の段の答えを書き込み、気付きを整理する。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈関①〉 記録 〈考①〉 ノート
8 ・ 9	◎ 8 の段の九九に習熟できるようにする。	8 の段を覚えよう。 ○ 8 の段の唱え方を知り、暗唱する。 九九カードで練習しよう。 ○ 九九カードを用いたゲームをする。 8 の段を覚えて、唱えることができた。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈技①〉
10	◎ 9 の段の構成をすることができるようにする。	9 人ずつの野球チームが 4 チームあります。全部で何人いるでしょうか。 ○ 題意を把握し、立式する。 9×4 をいろいろな方法で求めよう。 【段階①：個人思考】 - 九九作りの図などを使って、9×4 の答えの求め方を考える。 【段階②：集団思考】 - 言葉、数、式、図などを使って、答えの求め方を説明し合う。 9×4 は、9 の段や他の段でも求めることができる。 【段階③：思考のまとめ】 - 九九表に 9 の段の答えを書き込み、気付きを整理する。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈関①〉 記録 〈考①〉 ノート
11 ・ 12	◎ 9 の段の九九に習熟できるようにする。	9 の段を覚えよう。 ○ 9 の段の唱え方を知り、暗唱する。 九九カードで練習しよう。 ○ 九九カードを用いたゲームをする。 9 の段を覚えて、唱えることができた。 ○ 適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈技①〉

第Ⅳ章

13	◎1の段の九九の構成をすることができるようにする。	ケーキを1人に1こずつ配ります。5人分では、ケーキは何こいるでしょうか。 ○題意を把握し、立式して答えを求める。 1の段を覚えよう。 ○九九表に1の段の答えを書き込む。 ○1の段の唱え方を知り、暗唱する。 1の段を覚えて、唱えることができた。 ○適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈関①〉 〈技①〉
14	◎倍概念の基礎を理解できるようにする。	電車の長さは、4cmです。この電車の2台分の長さで3台分の長さを求めよう。 ○倍について知る。 倍の長さを求めよう。 ○かけ算を使って長さを求める。 倍の長さは、かけ算で求めることができる。 ○適用問題と自己評価に取り組む。	指導 〈知①〉
15 (本時)	◎1つの数の求め方について、図を多様な見方で分割し、九九を使って考えることができるようにする。	ゼリーは何こあるでしょうか。 いろいろな九九で求めよう。 【段階①：個人思考】 ・ゼリーの求め方を考える。 【段階②：集団思考】 ・言葉、数、式、図などを用いて、答えの求め方を説明し合う。 【段階③：思考のまとめ】 ・多様な求め方を整理する。 まとまりを見付けると、九九で求めることができる。 ○適用問題と自己評価に取り組む。	記録 〈考②〉 プリント
16	◎ものの数の求め方を、九九が使えるように工夫して考えることができるようにする。	チョコレートは何こあるでしょうか。 九九が使えるように工夫しよう。 【段階①：個人思考】 ・チョコレートの求め方を考える。 【段階②：集団思考】 ・言葉、数、式、図などを用いて、答えの求め方を説明し合う。 【段階③：思考のまとめ】 ・多様な求め方を整理する。 「分ける」「引く」「動かす」などでまとまりを作る。 ○適用問題と自己評価に取り組む。	記録 〈考③〉 プリント
17	◎単元で学習したことを振り返り、学習内容を定着することができるようにする。	○学習の振り返りを行う。 ○練習問題に取り組む。	

6 本時の学習（17 時間扱い 15/17）

(1) 目 標

- ・1つの数の求め方について，図を多様な見方で分割し，九九を使って考えることができるようにする。

(2) 対話による思考の共有化に関わって

条件1：話合いの目的や明確なゴールの設定

集団思考の方向付けを図るために，まとまりと式のつながりに注目しながら，友達の考え方（多様な求め方）にふれていくことを伝える。

条件2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

思考の整理を促すために，一つ一つの考え方について，まとまりや児童の気付きなどを板書し，視覚的に比較しやすいようにする。

条件3：集団思考に最適な場の設定

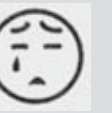
集団思考の活性化を目指すために，全体交流の前にペアによる話合い活動を取り入れ，自分の考えを言葉などで表現させ，思考の共有化を図る。

(3) 展 開

☐ 1 単位時間の学習課題 ☐ 1 単位時間の問題文 ☐ まとめ ☐ 児童生徒に考えさせること

教師の活動	児童の活動
1 問題場면을提示する。 ・ゼリーの箱を見せる。	1 問題場면을把握する。
ゼリーは何こあるでしょうか。 	
・ゼリーの箱を少しずつ開けながら，ゼリーの味や形を確認する。 「何味のゼリーなのかな。」 「ゼリーの形は同じかな。」 「ゼリーは何個あるだろう。」	・ゼリーの味や形を確認する。 ・「みかん」「ぶどう」「もも」の3つの味がある。 ・「○」「□」の2つの形がある。 ・ゼリーの数は24個だ。
【学習内容を明確にする導入】	
2 求め方に見通しをもたせる。 「何を使って求めよう。」 「使えそうな九九は1つかな。」	2 求め方に見通しをもつ。 ・かけ算（九九）を使う。 ・たくさんありそうだ。
3 ワークシートを配付し，学習課題を板書する。	3 学習課題を考え，ワークシートに書く。
(いろいろなまとまりを見つけて) いろいろな九九で求めよう。	
【発問の工夫】 「九九を使うために，何を探そう。」 「どんなまとまりが作れそうかな。味や形もヒントに探してみよう。」	・まとまりを探す。

【段階①：個人思考】 4 求め方を図と式に表させる。 「まとまりは図に書き込もう。」 ※図に書き込むことができない児童には、まとまりのヒントを示す。	まとまりを探して図に書き込み，式に表す。 4 求め方を考え，ワークシートの図にまとまりを書き込み，式に表す。
【段階②：集団思考】 【条件3：集団思考に最適な場の設定→ペアで思考の共有化を図る。】 5 考えた求め方をペアで交流させる。 「どんな考えで求めたかな。まとまりを指さしながら，式を説明しよう。」 【条件1：話合いの目的や明確なゴールの設定→まとまりと式のつながりに注目させる。】 6 児童の考えを取り上げる。 ※必要に応じて教師からも提示する。 「いろいろな考えを発表してもらいます。まとまりと式のつながりに注目しよう。」 ① $4 \times 6 = 24$ (図→式) ② $6 \times 4 = 24$ (図→式) 「同じ式で，違うまとまりを作った人もいます。」 「3の段で考えた人もいます。」 ③ $3 \times 8 = 24$ (式→図) 「他には何の段があるだろう。」 ④ $8 \times 3 = 24$ (式→図) 「おもしろいまとまりを作った人がいます。これはどういう意味かな。」 ※切って移動させたゼリーを見せる。 「最後はスペシャルな式です。なんと九九にはないかけ算で考えた人がいます。」 ⑤ $12 \times 2 = 24$ (式→図) 「どんなまとまりを作ったのかな。図に書き込んでみよう。」	式とのつながりに注意しながら，いろいろなまとまりを見付ける。 5 自分が考えた求め方をペアに説明する。 ・4個のまとまりが6つあるので，4×6です。など 6 発表者とは別の児童が，図や式，考え方を説明する。 ・4のまとまり。きっとみかんの次はぶどうだ。 ・6のまとまり。 ・同じ6個でも，いろいろなまとまりができるんだね。 ・6のまとまりに似ているね。3のまとまりで分けたのかな。 ・8の段。8×3だ。 ※ゼリーの図に，ペアで相談してまとまりを書き込む。 ・みかんを合体させた。 ・4のまとまりを足したんだ。 ※ゼリーの図に，ペアで相談してまとまりを書き込む。 ・12のまとまりを作ろう。 ・○と□で分けたんだ。

「実はこのまとまりで、九九を使う方法があります。」 ※切って分割させたゼリーを見せる。 $4 \times 3 = 12$ $12 + 12 = 24$ 【条件2：見える化を促す工夫→まとまりや児童の気付きなどを整理して板書する。】	※教科書のみきさんの式を見る。 ・まとまりの中に、さらに小さなまとまりを作ったんだね。
【段階③：思考のまとめ】	
「同じ答えを、いろいろな九九を使って求めたね。そのために、何を見付けたのかな。」 「いろいろなまとまりを見付けると、いろいろな九九が使えるね。」	いろいろなまとまりを見付けることで、多様な求め方ができることに気付く。 ・まとまりを見付けた。 まとまりを見付けると、九九で求めることができる。
7 適用問題に取り組ませる。 「クッキーは何こあるでしょうか。」 「いろいろなまとまりを見つけて求めよう。」	7 適用問題に取り組む。 ・ 3×6 ・ 6×3
【評価対象】＜考②＞プリント A 適用問題において、図を2つ以上の異なる考え方で分割し、九九を使った式で表すことができる。 B 適用問題において、図を分割し、九九を使った式で表すことができる。	
【学びを振り返る場の設定】 8 かけ算は、「1つ分の数（まとまり）」×「いくつ分」＝「全部の数」であることを確認させる。	8 九九で求めるには、まとまりを見付けることが大切であることを確認する。
【学ぶ意欲を高める自己評価の在り方】 9 マークと記述で自己評価させる。 「いろいろなまとまりを見付けることができましたか。」	9 今日のがんばりを自己評価する。    

第Ⅳ章

(4) 板書

10/27 かけ算九九づくり

も ゼリーは何こあるでしょうか。24こ

か いろいろな九九でもとめよう。 まとまり

ま まとまりを見つけると、九九でもとめることができる。

① 4のまとまり



あじ同じ

$4 \times 6 = 24$

② 6のまとまり



あじ同じ

$6 \times 4 = 24$

③ 3のまとまり



あじ同じ

$3 \times 8 = 24$

〈移動黒板〉

④ 8のまとまり



あじ同じ

$8 \times 3 = 24$

⑤ 12のまとまり (④のまとまり)



あじ同じ

$12 \times 2 = 24$
 $(12 + 12 = 24)$

⑥ 4のまとまり



あじ同じ

$4 \times 3 = 12$
 $12 + 12 = 24$

(5) 自己評価

○ 4段階の顔マークで自己評価する。



よくできた



できた



できなかった



ないた

○ 今日の頑張りを一文でまとめ、振り返る。

- ・ 分かったこと。
- ・ おもしろかったこと。
- ・ 工夫して考えたこと。
- ・ 友達の考えでよかったこと。
- ・ もっとやってみたいこと。

など

7 本時の分析

(1)学習内容を明確にする導入

問題の解決のために、かけ算（九九）を使うことや、使えそうな九九は複数ありそうであることを確認し、求め方に見通しをもたせた。その結果、どのように求めていくかという方向性を学級全体で確認でき、児童の言葉から課題を設定することができた。

(2)発問の工夫

課題の「九九を使って」について、「九九を使うためには、何を探したらよいのだろう。」と発問することで、既習事項の「数のまとまりを探す。」ということを確認した。その結果、児童が「まとまりを探して求める」ということを理解することができ、その後の展開でも、まとまりを意識しながら問題解決に臨んでいる様子が見られた。このときに「ゼリーの味や形をヒントに、まとまりを探してみよう。」と伝えたが、その点についての意識は薄かった。集団解決の中での問い掛けなどで、少しずつ理解していった。

(3)言語活動の設定 段階①：個人思考

個人思考では、まとまりを探して式に表す際に、必ず図に書き込むよう声掛けをした。その結果、まとまりと式のつながりを意識することができ、後のペア交流の際にも「○個のまとまりが△つあるので、 $\bigcirc \times \triangle$ です。」と思考を言語化できる児童が多かった。児童の実態から、個人思考における問題数を多くすることもできた。

(4)言語活動の設定 段階②：集団思考

集団思考では、まとまりと式のつながりに注目しながら、友達の考え（多様な求め方）にふれていくことを伝えた。考えの取り上げ方について、個人思考での解法をメモしておいたり、事前に取り上げる順序や方法を決めておいたりして、児童の思考の流れに沿うように工夫した。また、既習事項のかけ算（九九）のきまりなどについても触れ、これまでの学習のまとめにもなるようにした。その結果、全体交流の場面で発言できる児童が増え、多様な求め方についての理解を深めることができた。 12×2 については、一部たし算も使う必要があるため、課題とずれてしまい戸惑う姿が見られた。事前に「たし算も使ってよい」という声掛けをしておく等の配慮が必要であった。

(5)板書の工夫

集団思考で取り上げた多様な求め方について、数のまとまりや児童の気付き（発言やつぶやき）などが一目で分かるように板書にまとめた。視覚的に比較しやすいことで、考えの同じところや違うところへの気付きにもつながった（例えば、「同じ 6×4 でも違うまとまりができる」「 8×4 は4のまとまりをくっつけた」など）。ゼリーの味や形とまとまりのつながりについても、児童はたくさんの気付きを発見していた。

(6)言語活動の設定 段階③：思考のまとめ

いろいろなまとまりを見付けたことで、多様な求め方ができたことを確認した。適用問題でも、まとまりを探し、図に書き込んで答えることができていた。また、まとまりと式をきちんと結び付けて解くことができていた。適用問題については、本時の内容と難易度を考えて、まとまりの図と式の関連を考えさせるとよかった。

(7)学びを振り返る場の設定

かけ算は「1つ分の数（まとまり）」 $\times$ 「いくつ分」＝「全部の数」であるため、九九を使って求めるにはまとまりを見付けることが大切であることを再度確認した。九九の学習のまとめにもつながり、今後の学習への意欲化を図ることができた。

(8)学ぶ意欲を高める自己評価の在り方

「いろいろなまとまりを見付けることができましたか。」という問いに対し、4段階の顔マークで自己評価を行わせた。また、本時の頑張りや気付きなどを1文程度で記述させた。顔マークについては、全ての児童が「よくできた」または「できた」という自己評価となり、学習到達度と共に児童の達成感を感じることができた。記述については、「違う式でも、同じ答えになることがあるとよく分かった」「まとまりが違っていると、式が違う」「まとまりを使う（図を使う）と分かりやすくて、式にも書きやすい」など、自分なりの気付きや本時のまとめを書き込んでいた。また、「この勉強が好きになった、またやりたい」など、意欲の高まりを感じる言葉もあった。

第Ⅳ章

8 「対話による思考の共有化」に関わる分析

○条件1：話し合いの目的や明確なゴールの設定

集団思考の方向付けを図るために、まとまりと式のつながりに注目しながら、友達の考え方（多様な求め方）に触れていくことを伝えた。

具体的には、個人思考では、「まとまりは図に書き込むこと」を伝えた。また、集団思考の前に「ペアで考えを交流するときは、まとまりを指さしながら式を説明すること」「友達の考えを聞くときは、まとまりと式のつながりに注目すること」を伝えるなど、「式とのつながりに注目しながら、いろいろなまとまりを見付けていく」というゴールに向けて段階的に留意点を示した。

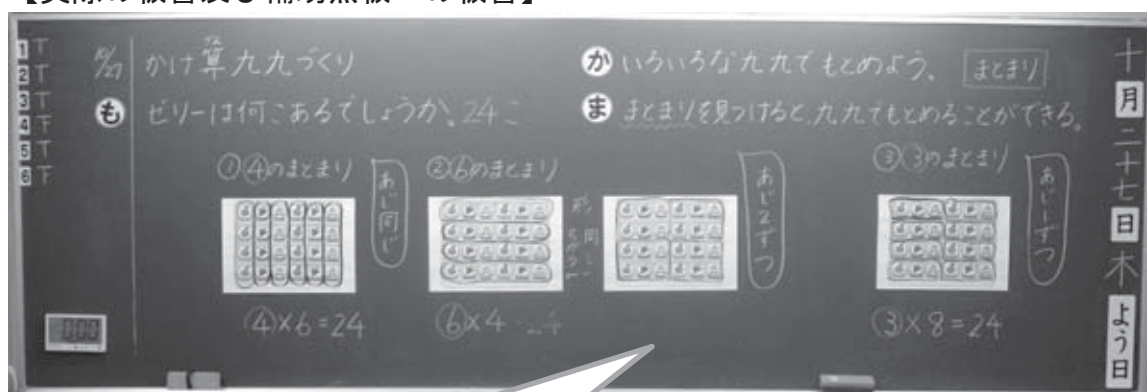
その結果、本時の学習全体を通して、児童は「まとまり」という言葉をキーワードとして意識して問題解決に臨むことができた。

また、全体交流の前に友達の考えに対して、①自分の考えと同じ、②違う、③違うけれども分かるというように、同じところと違うところを探しながら聞くように伝えた。その結果、自分の考えと比較しながら聞くという視点が加わり、積極的に話し合いに参加する姿が見られた。

○条件2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

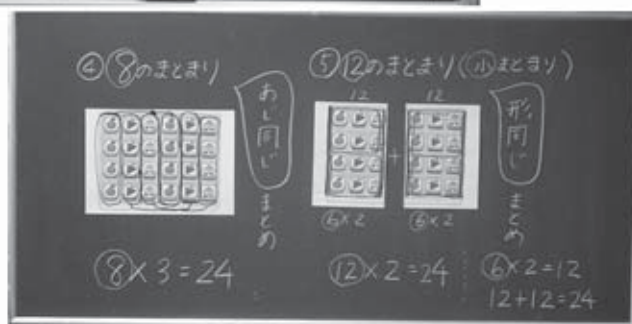
思考の整理を促すために、一つ一つの考え方について、まとまりや児童の気付きなどを板書し、視覚的に比較・検討しやすいようにした。特に集団思考で取り上げた多様な求め方について、数のまとまりや児童の気付き（発言やつぶやき）などが一目で分かるように板書にまとめた。視覚的に比較・検討しやすいことで、考えの同じところや違うところへの気付きにもつながった（例えば、同じ 6×4 でも違うまとまりができること。 8×4 は4のまとまりをつなげたこと。など）。

【実際の板書及び補助黑板への板書】



【板書に残したキーワード】

- ①いくつのまとまりなのか
- ②何の段のかけ算九九なのか
- ③まとまりの図から分かる気付き
- ④ゼリーの味や形からの気付き など



○条件3：集団思考に最適な場の設定

集団思考の活性化を目指すために、全体交流の前にペアによる話し合い活動を設けた。全員が自分の考えを一度、図や言葉などで表現することで、自分の考えを整理したり、まとまりと式のつながりについて再確認したりできた。さらに、互いの考えの同じところや違うところに気付くことで、全体交流の場に向けての意欲が高まることにもつながった。

また、友達の新しい考え方について共通理解ができなかった場面で、ペアによる活動を取り入れた。自分たちでも一度まとまりを図に表す作業を行うことで、考えに対する理解を深めることができた。

単元を通した成果と課題

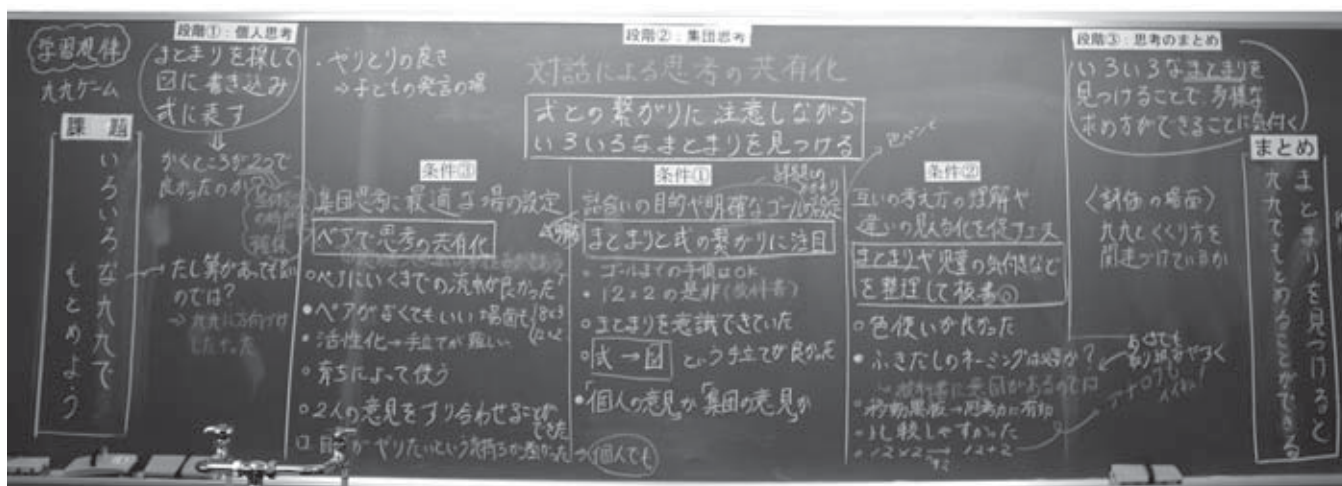
<成果>

- 低学年の算数科においては、3段階の言語活動（個人思考⇒集団思考⇒思考のまとめ）を位置付けることによって、児童も問題解決的な学習過程を意識することができた。その際、個人思考よりも集団思考の時間を十分保障し、考えの比較・検討に力を注いだ。
- 3段階の言語活動の各段階において、「児童に何を考えさせるのか」「そのための手立ては何が適切なのか」を授業者が事前に明らかにすることによって、発問や板書、学習形態を工夫することができた。その際、児童の思考の流れに寄り添うようにした。
- 低学年における集団思考では、導入において、例えば、「友達の考えを聞くときには、図と式のつながりに注目しながらポイントを見付けよう。」などと、これから学ぶことのゴールを段階的に示すことで、これから何について考えればよいのかを明確にすることができた。

<課題>

- 授業を構想する際には、単元の指導計画及び本時の指導案の作成を通して、単元全体のつながりや児童の思考の流れを予想することが難しかった。
- 学習形態を工夫する際には、ペア学習やグループ学習をどの場面に位置付けるのか、なぜその場面に位置付けたのかを明らかにすることとしていたが、実際の授業の中では、児童の様子に合わせて、実際に行うのか、行わないことにするのかを瞬時に判断することが難しかった。

研究協議板書



質の高い集団思考を行うためには、学習内容や児童生徒の実態に応じた「最適な場」を設定することが大切です。座席をコの字にして児童生徒の話し合いの活性化を図ったり、適切な場面でペア学習を行い、学習の理解を促したりする工夫などがあります。では、理科においてはどのような「最適な場」の設定が考えられるのでしょうか。

みんなの実験で結論が得られる～複線型の問題解決～

理科の学習では、「おや、どうしてだろう？」などという問題を設定した後に、予想や仮説を立てます。クラスで出された仮説が1つであれば、それぞれのグループで同じ実験を行い、結論を導きますが、複数の仮説が出された場合は、グループごとに異なる実験を行い、それぞれのグループの実験結果を全体で考察して結論を導くことができます。

予想・仮説の段階で、1つの仮説に限定していく指導もありますが、あえて、間違った予想・仮説（又は、間違った検証方法）を残しておき、その後の学習を複線型にすることにより、「自分たちのグループだけでは解決できない」という状況を設定することが、理科における「最適な場の設定」の一つと言えます。

複線型の問題解決の具体例～小学5年「振り子」

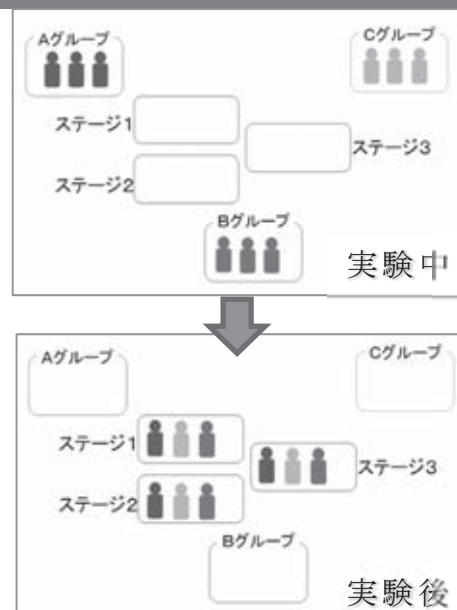
「振り子が1往復する時間に影響を与えるのは何か。」という問題を明らかにするために、「振れ幅」「振り子の長さ」「振り子のおもりの重さ」など複数の仮説とその検証方法を考えさせます。それぞれのグループで1つの仮説に対する検証実験を行い、検証結果を交流し、「振り子の1往復する時間に影響を与えるのは「振り子の長さ」である」という結論を導きます。

複線型の問題解決の交流方法について

複線型の問題解決の具体例として異なる仮説を設定した具体例を述べましたが、1つの仮説でも「異なる実験方法」を設定することで複線型の問題解決にすることが可能です。

また、複数の仮説を設定した場合には、仮説が結論と違うグループに対して、「反証という大切な実験」だったことを確認し、実験が無駄ではなかったことをしっかり伝えることが大切です。

結果が得られた後の学習としては、各グループの結果を全体で発表し合う学習が一般的ですが、A実験のグループとB実験のグループとC実験のグループの児童生徒で集まり、それぞれの結果を出し合い考察するという方法もあります。（右図参照）ジグソー法と呼ばれ、他教科でも様々な実践が行われています。



ジグソー法のイメージ

研究協力校の授業実践 中学 1 年 保健体育科

技の行い方や組み合わせ方に着目して、 運動についての思考力を高める学習

日 時 平成28年11月10日(木) 5校時 実施
 生 徒 旭川市立西神楽中学校第1学年 16名
 指導者 五十嵐 敬

〈学校の概要〉

学 校 の 様 子	本校は、「人にやさしく 自然にやさしい 西中生」という校訓（目指す生徒像）の下、小規模校の特色と地域性を生かした教育活動を推進している。特に、自然保護などの環境教育においては、地域の NPO 法人や地域団体の協力を賜りながら、動植物調査や水質調査、ホタル学習などの特徴的な教育活動を行っている。素直で穏やかな生徒が多く、行事だけではなく、普段の学校生活においても自然に異学年間での交流があり、温かな雰囲気の学校である。
研 究 の 内 容	「確かな学力」の定着を図る学習指導の工夫 ～学び合い高め合う授業づくりを通して～ 自分の考えを相手に分かるように伝えて説明する力を身に付けたり、他者と積極的に関わることを通して考えを深めていくことができるような学習指導の工夫について研究を進めている。

1 単元名 B 器械運動(ア マット運動)

2 単元について

〈教材観〉

本単元に関わる学習指導要領の目標及び内容(抜粋)は、次のとおりである。

【学習指導要領】～第1学年及び第2学年体育分野の目標と器械運動の内容～

1 目 標

- (1) 運動の合理的な実践を通して、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、知識や技能を身に付け、運動を豊かに実践することができるようにする。
- (2) 運動を適切に行うことによって、体力を高め、心身の調和的発達を図る。
- (3) 運動における競争や協同の経験を通して、公正に取り組む、互いに協力する、自己の役割を果たすなどの意欲を育てるとともに、健康・安全に留意し、自己の最善を尽くして運動をする態度を育てる。

2 内 容

- (1) 次の運動について、技ができる楽しさや喜びを味わい、その技がよりよくできるようにする。
ア マット運動では、回転系や巧技系の基本的な技を滑らかに行うこと、条件を変えた技、発展技を行うこと、それらを組み合わせること。
- (2) 器械運動に積極的に取り組むとともに、よい演技を認めようとする、分担した役割を果たそうとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。
- (3) 器械運動の特性や成り立ち、技の名称や行い方、関連して高まる体力などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにする。

第Ⅳ章

器械運動で学習する技は、逆さになって回転したり、ぶらさがって回転したり、手で支えて跳び越したりする巧技的な運動で、日常においてあまり経験しない非日常性と驚異性を特徴にしており、それゆえに「できる」「できない」が明確に現れる。しかし、できない技ができるようになったり、技の出来映えを高めたりしていく過程は、生徒にとって新しい技能が身に付く喜びと自己の成長を実感できる場面であり、器械運動の一番の魅力とも言える。中でもマット運動は、学習で身に付ける技能が、他の種目の基礎的な技能になることから、全ての生徒が意欲的に学習に取り組み、技を身に付ける喜びを味わうことができるように指導することが大切である。

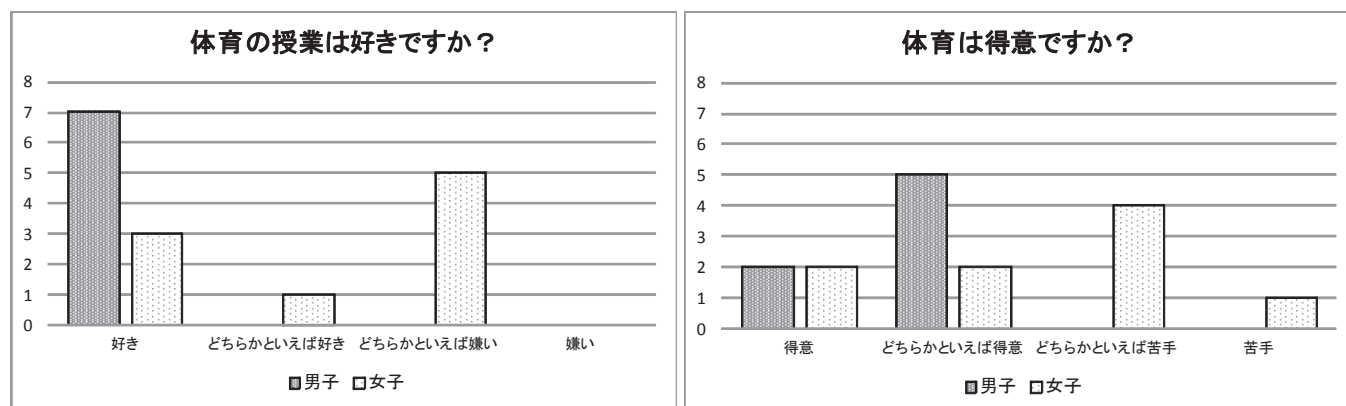
小学校では、〈表１〉の基本的な技を中心に学習することが位置付けられており、中学校第１学年及び第２学年では、これらの技を滑らかにできることが求められている。また、開始姿勢や終末姿勢を変えて行うような条件を変えた技や、自己の技能・体力の程度の高まりに応じて発展技を行うことも必要とされている。第３学年では「自己に適した技で演技すること」「技の静止や組合せの流れに着目して技を構成すること」が求められていることから、第１学年及び第２学年から、自己の能力に適した技を選択して練習したり、一連の流れで演技するための技の組み合わせ方や、よりよく演技をする上での運動の行い方についても、学んだり考えたりできるよう指導することが必要である。

〈表１〉 マット運動の主な技の例示

系	技群	グループ	基本的な技	発展技
回転系	接転	前転	前転 → 開脚前転	倒立前転 跳び前転 → 伸膝前転
		後転	後転 → 開脚後転	伸膝後転 → 後転倒立
	ほん転	倒立回転・ 倒立回転跳び	側方倒立回転 → 倒立ブリッジ →	側方倒立回転1/4ひねり(ロンダート) → 前方倒立回転 → 前方倒立回転跳び
		はねおき	首はねおき →	頭はねおき
巧技系	平均立ち	片足平均立ち	片足平均立ち →	片足正面水平立ち Y字バランス
		倒立	頭倒立 補助倒立 →	倒立

〈生徒観〉

入学時に行った体育に関するアンケートによると、本学級では、男子は運動への興味・関心が高く、得意だと考えている生徒が多い。一方、女子はどちらかという運動が嫌いな生徒が多く、好きでも得意・不得意にばらつきがある。



1学期のダンスの領域では、アップやダウンなどの基本的なリズムのとり方やステップを身に付ける学習を行った。全員が基本的な技能を身に付けるために一斉に繰り返し学習を行ったところ、技能のレベルが上がるにつれて、不得意な生徒を中心に学習意欲を維持することが難しくなり、その後の技能の定着が困難となって、後半の学習に課題を残すことになった。一方、陸上競技のハードル走では「滑らかなハードリングの行い方」や「スタートしてから1台目のハードルを跳び越えるための効率的な走り方」の学習において、自己の能力に適した高さのハードルを選択したり、iPadの映像遅延アプリで自己の運動を観察したりできるよう、個に応じた学習のための場の設定や教具の工夫をした。それにより、運動に対して苦手意識をもつ生徒も進んで授業に取り組んで、自己の課題を見付けることや考えることに意欲的になり、技能の高まりも見られた。

〈指導観〉

本単元では、同じ運動課題や運動技術の視点、さらには運動の方向や運動の経過で分類された技ごとに学習することを通して、技の行い方や系統性、練習方法を理解するとともに、できない技ができるようになったり、できる技の出来映えを高めたりすることをねらいとしている。また、自己の技能や体力の程度に適した技を一連の流れになるよう組み合わせ、よりよく演技できることにつなげていく。

前半は、1～2単位時間ごとに、類似の運動課題等を要する基本的な技を学んだ上で、自己の技能や体力の程度に応じた技を選んで学習する展開とする。あらかじめ、体の使い方や技の行い方、練習方法について指導し、段差マットやスロープマットなどの練習の場を選択するなど、運動の取り組み方を工夫しながら自己の技能や体力の程度に応じて学習できるようにする。授業の終わりには、自己の演技を振り返り、課題を考えさせることを通して、運動についての思考力を高めていく。後半は、一連の流れで演技するための技の組み合わせ方や、よりよく演技する上での運動の行い方について、始めに個人で考えさせ、その後グループ活動での交流を行い、様々な視点から自己の運動を見つめることにより、運動についての思考力を一層高め、組み合わせ技の出来映えを高めることをねらいとする。技をつなげて演技することの楽しさを味わわせ、自己の課題を解決していく過程を通して、マット運動の魅

第Ⅳ章

力に触れさせていきたい。さらに、単元を通して、iPadの映像遅延アプリを利用し、自己の運動を効率的に観察できる場をつくり、学習の意欲化を図っていきたい。

また、学びの基盤に関わり、本学級では以下の点を大切にしてきた。

①「教室環境の整備」について

- ・用具の整頓，練習場所の安全確認を必ず行うようにし，安心・安全な学習環境で授業を行うことができるようにしてきた。

②「学習規律の確立」について

- ・学習用具の置き方，集合・整列時の隊形など，ルールを守って整然と授業に取り組むことができるようにしてきた。

③「支持的風土の醸成」について

- ・互いの運動を見ながら課題を伝え合ったり教え合ったりするグループ学習を取り入れ，生徒同士で学び合うことを意識させてきた。
- ・技の行い方を意識した体の使い方ができている生徒の動きを例示するなどし，仲間を賞賛する雰囲気づくりに努めてきた。

3 単元の目標

マット運動の技ができる楽しさや喜びを味わい，その技がよりよくできる。

4 評価規準

単元の評価規準			
運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
マット運動の学習に積極的に取り組もうとしている。	自己の技の課題や，課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。	回転系や巧技系の基本的な技，条件を変えた技，発展技のいずれかができ，それらを組み合わせでよりよくできる。	器械運動の特性や成り立ち，マット運動の技の名称や行い方について，学習した具体例を挙げている。
学習活動における具体的評価規準			
①マット運動の学習に積極的に取り組もうとしている。 ②互いに教え合ったり補助し合ったりするなど，仲間の学習を援助しようとしている。 ③準備や後片付けの際に，器械・器具の出し入れなどの分担した役割を果たそうとしている。	①自己の課題を見付け，課題に応じた運動の取り組み方を考えている。 ②一連の流れで演技するための技の組み合わせ方を見付けている。 ③一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えている。	①滑らかな基本的な技，条件を変えた技，発展技のいずれかができる。 ②組み合わせ技がよりよくできる。	①器械運動の特性や成り立ちについて，言ったり書き出したりしている。 ②マット運動の技の名称や行い方について，言ったり書き出したりしている。

5 指導と評価計画

【学習テーマ】

第1時～第9時：できる技を増やしたり，技の出来映えを高めたりしよう。

第10時～第14時：技を組み合わせせて演技しよう。

1 単位時間の学習課題 まとめ 言語活動

時	指導目標	主な学習活動	評価規準及び方法
1	◎器械運動の特性や成り立ちについて言ったり書き出したりできるようにする。	○本単元の大まかな内容の説明 器械運動・マット運動について知ろう。 ○器械運動の特性や成り立ちについての説明 ・ はじまりと発展 ・ 体操競技について (1)構成種目（男子・女子） (2)日本代表選手のオリンピックでの活躍 (3)採点方法（Dスコア・Eスコア） ・ マット運動の特性 器械運動の特性や成り立ちについて理解することができた。	指導→指導に生かす評価 記録→記録に残す評価 指導 〈知①〉
2	◎マット運動の学習に積極的に取り組むことができるようにするとともに，準備や後片付けの際に，器械・器具の出し入れなどの分担した役割を果たそうとすることができるようにする。	○自己評価の記入 ○前時の振り返り ○器械・器具の配置の確認と準備運動の指導 自己の技能を確認しよう。 ○技の系統性と名称について確認し，できる技【○】，できそうな技【△】，できない技【×】の確認 自己の技能を確認することができた。	指導 〈関①〉 〈関③〉
3	◎滑らかな基本的な技，条件を変えた技，発展技のいずれかができるようにするとともに，マット運動の技の名称や行い方について，言ったり書き出したりすることができるようにする。	○自己評価の記入 ○前時の振り返り 前転グループの基本的な技が滑らかにできるようになろう。 ○体の使い方，各技の行い方の解説 ・ 前転 ・ 大きな前転 ・ 開脚前転 ○練習場所の説明 前転グループの技に必要な体の使い方や各技の行い方を学習することで，基本的な技がよりよくできた。 ○自己評価の記入	指導 〈技①〉 〈知②〉

第Ⅳ章

4	◎滑らかな基本的な技、条件を変えた技、発展技のいずれかができるようにするとともに、マット運動の技の名称や行い方について、言ったり書き出したりすることができるようにする。	○前時の振り返り 後転グループの基本的な技が滑らかにできるようになるう。 ○体の使い方、各技の行い方の解説 ・後転 ・開脚後転 ○練習場所の説明・練習 後転グループの技に必要な体の使い方や各技の行い方を学習することで、基本的な技がよりよくできた。	指導 <技①> <知②>
5 ・ 6 ・ 7	◎互いに教え合ったり補助し合ったりするなど、仲間の学習を援助しようとすることができるとともに、滑らかな基本的な技、条件を変えた技、発展技のいずれかができるようにする。	○自己評価の記入 ○前時の振り返り 倒立グループの基本的な技と倒立前転が滑らかにできるようになるう。 ○巧技系・倒立グループの基本的な技、倒立前転の学習 ○練習場所の説明・練習 倒立グループの基本的な技や倒立前転に必要な体の使い方、各技の行い方を学習することで、技がよりよくできた。	指導 <関②> <技①>
8 ・ 9	◎自己の課題を見付け、課題に応じた運動の取り組み方を考えることができるようにする。	○自己評価の記入 ○前時の振り返り 自己に適した技を選び、出来映えを高めるための課題と解決の手立てを見付けよう。 ○課題別学習の説明・練習 ※前転グループ、後転グループ、倒立グループの条件を変えた技や発展技、ほん転技群の行い方の解説 ○自己に適した技の選択・練習 【個人思考】 ・自己に適した技を選択し、課題に応じた運動の取り組み方を考える。 【集団思考】 ・技をお互いに見合い、出来映えを高めるための課題について話し合う。 【思考のまとめ】 ・自己の課題と解決の手立てをまとめる。 課題や手立てを見付けることで、課題解決に向けた見通しをもつことができた。 ○自己評価の記入	記録 <思①> 観察 学習プリント

10 ・ 11	◎一連の流れで演技するための技の組み合わせ方を見付けることができるようにする。	○前時の振り返り 技の組み合わせ方を考えよう。 ○技の接着剤の解説 ○技の連結例の提示，練習 ○技の組み合わせ方を考え，練習 【個人思考】 ・技の組み合わせ方を考える。 【集団思考】 ・組み合わせた技をお互いに見合い，一連の流れで演技するための組み合わせ方について話し合う。 【思考のまとめ】 ・よりよい組み合わせ方をまとめる。 技の開始姿勢や終末姿勢，つなぎ方を工夫して，一連の流れで演技するための技の組み合わせ方を考えるとよい。	記録 〈思②〉 観察 学習プリント
12 (本時)	◎一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えることができるようにする。	○自己評価の記入 ○前時の振り返り 一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えよう。 ○運動の行い方の交流 【個人思考】 ・一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を確認する。 【集団思考】 ・一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を交流する。 【思考のまとめ】 ・一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を整理する。 一連の流れでよりよく演技するためには，つなぎの運動の行い方を考えるとよい。	記録 〈思③〉 観察 学習プリント
13 ・ 14	◎滑らかな基本的な技，条件を変えた技，発展技のいずれかができるとともに，組み合わせ技がよりよくできるようにする。	○自己評価の記入 ○前時の振り返り 組み合わせ技の出来映えを高めよう。 ○練習場所の説明・練習 ○技能テスト 既習の技の中から，自己に適した技を選択し，出来映えを高めることができた。	記録 〈技①・②〉 観察

第Ⅳ章

6 本時の学習(14時間扱い 12/14)

(1) 目 標

- ・一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えることができる。

(2) 対話による思考の共有化に関わって

条件1：話合いの目的や明確なゴールの設定

一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えるために、交流の視点を明確にする。

条件2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

個人思考と集団思考の違いが分かるような学習プリントを活用する。

条件3：集団思考に最適な場の設定

集団思考を効果的に進めるために、1グループの人数を4人に設定し、演技映像の遅延動画を用いて交流させる。

(3) 展 開

1 単位時間の学習課題 1 まとめ 2 生徒に考えさせること

教師の活動	生徒の活動
1 ウォーミングアップ (1)ランニング・ストレッチ・補強 (2)マットを使った予備運動 【学習内容を明確にする導入】	1 ウォーミングアップをする。 ※ (2)では必要に応じて補助をするなど、安全に配慮して行う。
2 第10時～第14時の学習課題を確認させる。 「技を組み合わせで演技しよう。」	2 第10時～第14時の学習課題を確認する。
一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えよう。	
・動画でよりよい運動の行い方の視点を確認させる。 発問の工夫 【動画から技の「つなぎ」に着目させて生徒の気付きを導く発問をする。】 【段階①：個人思考】	一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を確認する。
3 一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を確認させる。 ＜視点＞ ・よりよいつなぎにする上での運動の行い方を考えること。 (とぎれずに・安定して・難易度を高めて)	3 一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を確認する。

【段階②：集団思考】	一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を交流する。
4 個人で考えた一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方について、マット上で運動しながら交流させる。 【条件1：話合いの目的や明確なゴールの設定→交流の視点を明確化】 【条件2：互いのポイントの理解→学習プリントの活用】 【条件3：集団思考に最適な場の設定→演技映像の遅延動画を用いた交流】	4 個人で考えた一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方について、マット上で運動しながら交流する。 ＜活動の流れ＞ (1)組み合わせ技の演技・グループでの観察 (2)演技映像の遅延動画での確認 (3)グループでの交流 ※ 観察者がアドバイスを付箋に記入し、説明を加えて演技者に渡すとともに、その内容について交流する。
5 練習 【段階③：思考のまとめ】	5 練習 一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を整理する。
6 グループ活動で出た意見を参考にして、一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を整理させる。	6 個の考えとグループ活動で出た意見を確認し合理的な考え方で、一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を整理する。
一連の流れでよりよく演技するためには、つなぎの運動の行い方を考えるとよい。	
【評価場面】〈思②〉観察・学習プリント A 合理的な考え方で、一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えることができる。 B 一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えることができる。	
【学びを振り返る場の設定】	
7 A評価の生徒の考えを紹介するとともに、本時で整理したことを意識して、組み合わせ技の練習を行うことを伝える。	7 よい例から自分の考えについて振り返る。 ・今後の学習の見通しをもつ。
【学ぶ意欲を高める自己評価の在り方】 8 自己評価をさせる ・一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えることができる。	8 自己評価をする。

第Ⅳ章

(4) 板書

★第10～14時の学習課題
技を組み合わせて演技しよう！

■第10～11時
一連の流れで演技するための技の組み合わせ方を見つけよう！

■第12時
一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を考えよう！

とぎれずに
「動の技」と「静の技」が
つながっている

安定して
バランスをくずすことなく
新しい運動ができる

難易度を高めて
自分ができることの中でも
レベルの高いものにチャレンジする

■第13～14時
組み合わせ技のできばえを高めて、演技をしよう！

本時のグループトーク

■目的
よりよく演技するための運動の行い方をグループ内で交流し、技能テストに向けた練習のポイントを理解できるようにする。

■A君の組み合わせ技

【はじめ】
①寝倒立前転
②足交差・反転

➡

【なか】
③後転
④伸身とび1/2ひねり

➡

【おわり】
⑤開脚前転

※安定したつなぎにするために、足交差・反転の局面でバランスをくずさないようにする。自分の考え

とぎれずに演技するために、後転、伸身とび1/2ひねりと、開脚前転のひつがつながるよう意識したらいんじゃない？



伸身とびと前後の技とのつなぎ

■活動の流れ
①グループトーク → ②練習 → ③ “①・②”を踏まえて、運動の行い方を整理
②の練習では、仲間のアドバイスを確認しながら練習しよう！

(5) 本時の自己評価

●自己評価

■一連の流れで演技するための技の組み合わせ方を見付けることができましたか？



■一連の流れで演技するための、とぎれない、安定した、難易度を高めた「つなぎ」にするための運動の行い方を考えることができましたか？



■グループトークを通して、学んだことをまとめましょう。

7 本時の分析

(1)学習内容を明確にする導入

前時の学習課題を振り返ることで本時の学習課題への意識を高め、技を組み合わせた模範演技を動画で紹介することで、よりよい演技にするための視点を確認させた。1つ1つの技を組み合わせ、よりよい演技にするために個人の考えをまとめたり、仲間の演技を見てアドバイスをしたりするための手立てとして生かされていた。

(2)発問の工夫

よりよい運動の行い方の視点を生徒から引き出すために、動画から技の「つながぎ」に着目させて生徒の気付きを導くような発問を行った。技の「つながぎ」がポイントになることを共通認識することができ、その後の運動で課題を意識した学習活動が行われた。

(3)言語活動の設定 段階①：個人思考

一連の流れでよりよく演技をするための運動の行い方を考えさせるために、学習プリントを活用して、組み合わせ技を振り返らせた。導入で確認した視点を意識し、技の「つながぎ」をスムーズにする運動の行い方について、前時までの学習内容を踏まえて考えさせることができた。

(4)言語活動の設定 段階②：集団思考

技の「つながぎ」に着目するという視点を明確に提示し、iPadの遅延動画で演技を確認させながら、相手に伝えるための手段として付箋を活用させることで、活発なグループトークになるようにした。グループによっては遅延動画を活用しきれない場面も見られたが、よりよい演技をするための情報を交流し、練習に生かすことができた。

(5)板書の工夫

生徒が常に意識できるように、よりよい運動の行い方の視点として「とぎれずに」「安定して」「難易度を高めて」と書かれたフラッシュカードをホワイトボードに掲示した。また、大型テレビを活用しながら学習内容を説明することで、授業のポイントを明確にすることができた。



(6)言語活動の設定 段階③：思考のまとめ

個人思考の場面で考えた運動の行い方と、グループトークで交流した意見を参考にして、一連の流れでよりよく演技するための運動の行い方を合理的な考え方で整理した。個の運動課題をグループで共有化することで、技の「つながぎ」の運動の行い方について考えを深めることができた。

(7)学びを振り返る場の設定

よりよい運動の行い方について、合理的な考え方で自分の考えをまとめたものを紹介することで、次時の学習課題となる出来映えのよい技に向けた練習への意欲を高めさせた。個人・集団思考の場を通して気付いたことや考えを深めた内容を確認しながら、次時への展望をもたせることができた。

(8)学ぶ意欲を高める自己評価の在り方

目標の到達度を4件法で自己評価させ、平均は3.5ポイントであった。また、グループトークで学んだことを文章記述をさせたところ、「どこができていなくて、どこがとぎれているのかが分かった」など肯定的な記述が多く、目標を意識して積極的に学習した姿勢が見られた。



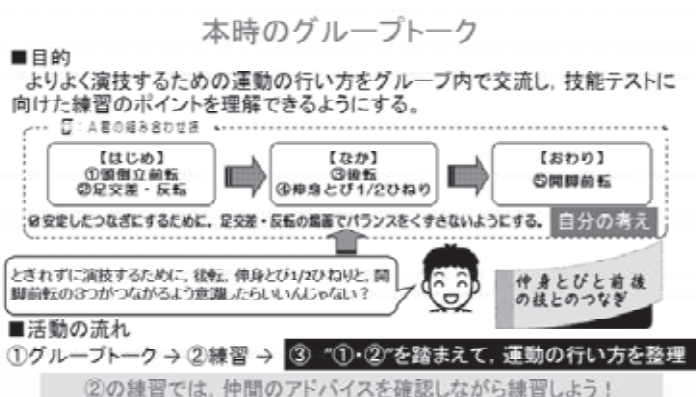
第Ⅳ章

8 「対話による思考の共有化」に関わる分析

○条件1：話し合いの目的や明確なゴールの設定

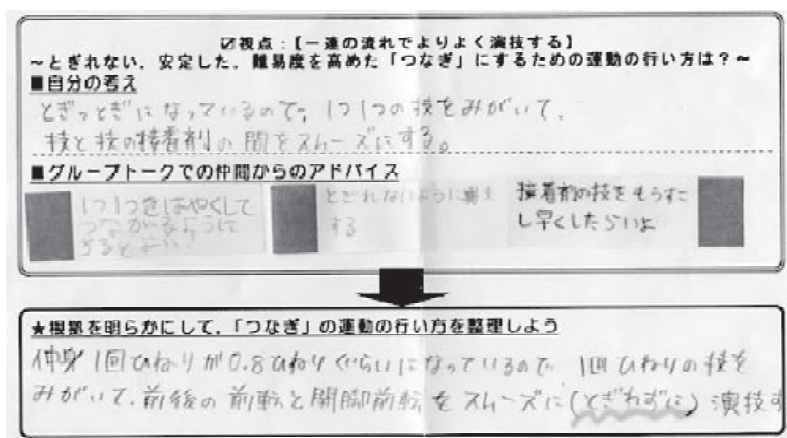
第13～14時の「組み合わせ技の出来映えを高める学習」につなげるために、グループトークを通して「よりよく演技するための運動の行い方」について交流し、自己の運動の行い方について考えることを目的とした。

まず、目的について生徒が具体的なイメージをもつことができるようにするために、「運動の行い方」を「つなぎ」として、「よりよく演技する」を「とぎれずに・安定して・難易度を高めて」という3つのキーワードとして位置付けた。さらに、キーワードに基づいて、とぎれている演技（伸身跳び1/2ひねりが前後の技とつながっていない）、安定していない演技（足交差・反転でバランスを崩している）、難易度を高められそうな演技（一連の流れで演技ができている）を動画で見せながら、運動課題の見付け方について共通理解を図った。最後に、グループトークにおける付箋の活用方法や具体的なアドバイスの伝え方、その後の学習の流れを確認した。これらを通して、自己の運動の行い方を整理するまでの見通しをもたせることができた。



○条件2：互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

学習プリントは、「自分の考え」を記述形式、「グループトークでの仲間からのアドバイス」を同じグループの仲間が付箋に記入し、演技者に渡して学習プリントに貼り付けることができる形式にした。これにより、互いの考え方の違いを比較できるようにするとともに、運動の行い方を整理する場面で、自分と仲間の考えを振り返りながら次時以降における練習のポイントを整理することができた。



○条件3：集団思考に最適な場の設定

体育科では、話し合い活動を取り入れる上で、運動量の確保が大きな課題となる。そのため、1グループの人数を3～4人とし、運動をしながら交流させることにした。また、グループ内の交流を円滑にするために、組み合わせ技に取り入れている技のレベルに応じた習熟度別のグループとした。さらに、交流活動と運動分析を効果的に進めるために、iPadの遅延動画アプリ

を用いた。これにより、演技者が自己の運動を客観的に見ることができ、グループの仲間はリアルタイムでの運動と遅延動画で2度運動を確認できるようにした。

グループトークは大変活発に行われ、iPadを前にした交流場面だけではなく、マット上で練習をしている際にも、互いに演技を見ながらアドバイスをし合う姿が見られた。一方で、積極的に遅延動画を活用していないグループも見られた。前時までには、運動を客観的に見取ることのよさについて気付かせるための手立てが必要だと考える。



単元を通じた成果と課題

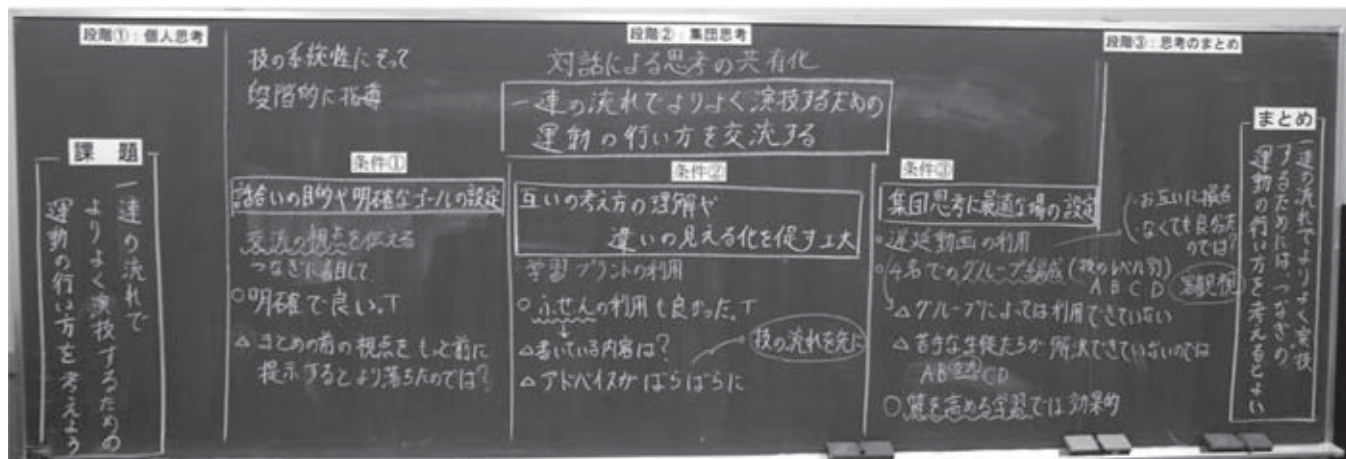
<成果>

- 3段階の言語活動を取り入れる場面を、「個の技」「技の組み合わせ方」「組み合わせ技のつなぎ」と段階的に位置付け、話し合いに必須となる知識と技能を事前に習得させておくことにより、生徒達は積極的にグループトークを行うことができ、運動についての思考力を十分に高めることができた。
- 事後のアンケートにおける、「自分では分からない課題を見付けることができてよかった。」「グループトークをすることで、自分が気付かなかったことを言ってくれて、その後の練習に生かすことができた。」という生徒の言葉にあるように、個人思考の後に集団思考を位置付けることは、課題把握や課題解決の上で大変効果的であった。

<課題>

- 第12時で、「運動の行い方」を「つなぎ」として位置付け、特に技の接着剤について交流をすることを想定していたが、グループトークでは個の技についての運動課題を記載している生徒が複数いた。個の技も「つなぎ」と関わる部分があるため、指導者側の「つなぎ」の押さえをもっとしっかりするべきだった。
- 生徒に達成感を味わわせるために、技能を高める学習と思考力を高める学習のバランスを十分に考える必要がある。

研究協議板書



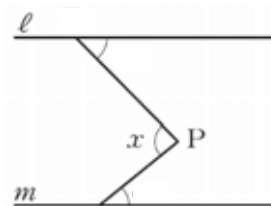
「対話による思考の共有化」

ー 中学校数学科を例にー

ここでは、数学科において対話による思考の共有化を行うために、どのような条件設定の仕方が考えられるかを第2学年「平行と合同」での実践を例に紹介します。この単元では、三角形や四角形などの多角形の大きさについての性質を、論理的に筋道を立てた推論を行って調べることができるようにするとともに、観察、操作、実験などを通してその推論の過程を自分の言葉で、他者に伝わるように分かりやすく表現することができるようにすることが必要です。

集団思考の前段として

平行線の性質や三角形の内角の和を学習した後に、平行線の同側内角の角度を求める場面で、本時の目標を「角度を求め、その求め方を説明することができるようにする」とし、課題を「いろいろな方法で求め、説明しよう」としました。個人思考の段階では、時間を短く設定し、求め方を考えさせました。集団思考に入る前に、補助線だけを黒板に取り上げました。集団思考においては、以下のように3つの条件を設定しました。



3つの条件

①話合いの目的や明確なゴールの設定

→黒板に紹介された補助線の中から、自分で理解することができた方法を次の3つの視点に沿って他者に伝えることを目的としました。①どんな補助線を引いたのか。②補助線を引くことでなにが(どんな図形の性質が)利用できるようになったのか。③結果はどうなったのか。

②互いの考え方の理解や違いの見える化を促す工夫

→複数の図がかかれたワークシートを用意し、他者の考えも図に書き込めるようにしました。また、黒板に4つ程度の図をかき、複数の考えを全体で確認できるようにしました。

③集団思考に最適な場の設定

→まずはペアでお互いの方法を交流させました。その後、全体で黒板に紹介された図を利用して、代表生徒に発表させる場面を設定しました。

思考のまとめ

集団思考が終わったところで、類似問題を提示し、それぞれが共有したことを基に問題を解かせました。この段階でも、ペア学習で互いの解き方を説明させることで、思考の共有化を図ることができます。意図をもって、このように条件を設定することで、「対話による思考の共有化」を図ることができ、生徒の学びがより深まると考えます。

第 V 章 研究の成果と課題

1 成 果

2 課 題

研究の成果と今後の課題

上川教育研修センターでは、第16次研究の研究主題を「学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方」と設定し、学びの基盤を整備し、児童生徒の思考の流れに沿った問題解決的な学習過程の中に、意図的・計画的に言語活動を位置付け、目標・指導・評価の一体化を図る授業の在り方について研究を推進してきた。さらに3年次は、より質の高い集団思考をさせるために3つの条件を設定した「対話による思考の共有化」を行った。

その結果、第16次研究3年次の成果と課題を次のように明らかにすることができた。

第16次研究のまとめ

《 成 果 》

- ① 各年度で「3段階の言語活動」「思考の明確化」「対話による思考の共有化」というキャッチフレーズを設定したことにより、センターの主張を明確にして発信することができた。
- ② 思考力・判断力・表現力を高めるために教師のねらいと手立てを明確に示すことにより、確かな学力を育成する授業を構築することができた。
- ③ 協力校への日常的なサポートや公開研究会、センター発表会における討議の仕方を工夫し、新たな仮説検証のスタイルを示すことができた。

第17次研究に向けて

《 課 題 》

- ① 次期学習指導要領への移行期を踏まえ、授業構築の手順を丁寧に見直し、その手法を発信する必要がある。
- ② 新しい時代に生きる児童・生徒を育成するためには、自立した個の学びと協働的な集団の学びの両面から研究を進める必要がある。

あとがき

当センターでは、「学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方」を研究主題に掲げ、3か年計画で第16次研究に取り組んでまいりました。

3年次となる本年度は、児童生徒の思考力・判断力・表現力を育成するため、学習過程に言語活動を位置付ける中で、質の高い集団思考の在り方に重点を置き、「上川の先生方にとって授業づくりに役立つ研究」を目指してまいりました。

また、授業実践を通して研究理論を具体的に検証するため、研究員（鷹栖町立鷹栖中学校、旭川市立大有小学校）と研究協力校（当麻町立当麻小学校、旭川市立北鎮小学校、旭川市立西神楽中学校）による授業公開を行い、参加された多くの先生方から貴重な御意見をいただきました。

この度、それらの成果を研究紀要第42号にまとめることができました。これもひとえに、北海道教育庁上川教育局並びに旭川市教育委員会の皆様の御指導・御助言、研究協力校の先生方の優れた実践、そして研究員所属校や参観いただいた先生方の御支援と御協力の賜物と、心より感謝申し上げる次第です。

本紀要の内容につきましては、改善点等があると存じますが、各学校における校内研修はもとより個人研究や日常実践などに広く活用していただくとともに、多くの皆様の御批正、御指導をいただければ幸いです。

次年度は、第17次研究の1年目となります。上川管内の各学校そして先生方の期待に応え、これまで以上に理論と実践を充実させた研究成果をお示しできるよう全力を尽くしてまいります。今後とも、御支援と御協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

研究事業部長 石ヶ森 孝順

主 要 参 考 文 献

- ◇ 学習指導要領、学習指導要領解説(文部科学省)
- ◇ 初等教育資料、中等教育資料(文部科学省)
- ◇ 中央教育審議会答申(文部科学省)
- ◇ 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 報告(文部科学省)
- ◇ 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(国立教育政策研究所)
- ◇ 上川教育研修センター研究紀要 第39号・40号・41号(上川教育研修センター)
- ◇ 平成24年度旭川市立中学校指導と評価の手引(旭川市教育委員会)
- ◇ 平成26年度小・中学校教育課程改善の手引(北海道教育庁学校教育局義務教育課)
- ◇ 平成27年度小・中学校教育課程改善の手引(北海道教育庁学校教育局義務教育課)
- ◇ 平成28年度小・中学校教育課程改善の手引(北海道教育庁学校教育局義務教育課)

研 究 協 力 校

当麻町立当麻小学校	校長	五十嵐 欣 也
旭川市立北鎮小学校	校長	石 黒 雄 治
旭川市立西神楽中学校	校長	赤 坂 文 彦



上 川 教 育 研 修 セ ン タ ー

所 長
副 所 長
事 務 部 長
研究事業部長
研 究 員

指 導 員

担当指導主事

事 務 係

小 谷 要 次
奥 山 ゆみ子
佐 藤 美恵子
石ヶ森 孝 順
小田島 充 彦
竹 中 一 三
川 村 貴 弘
齊 藤 悦 代
馬 場 大 輔
遠 藤 聡 志
村 田 靖 彦
佐々木 玲 一
増 子 淳 一
三 上 大 輔
木 下 浩 太
常 盤 慎 一
小 林 晴 美
笹 谷 青 子

旭 川 市 立 日 章 小 学 校
東 神 楽 町 立 東 神 楽 小 学 校
旭 川 市 立 旭 川 第 三 小 学 校
旭 川 市 立 神 居 東 小 学 校
鷹 栖 町 立 鷹 栖 中 学 校
旭 川 市 立 大 有 小 学 校
旭 川 市 立 永 山 中 学 校
旭 川 市 立 愛 宕 中 学 校
旭 川 市 立 北 光 小 学 校
旭 川 市 立 東 町 小 学 校
旭 川 市 立 神 楽 小 学 校
上 川 教 育 局 義 務 教 育 指 導 班
旭 川 市 教 育 委 員 会 教 育 指 導 課

研究紀要 第 42 号

学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方
～思考力・判断力・表現力を育む指導と評価～

発 行	平成 29 年 3 月 31 日
発行者	上川教育研修センター 旭川市 6 条通 4 丁目 電 話 (0166) 24-2501 F A X (0166) 24-2512 E-mail:kami-cen@educet.plala.or.jp
印刷所	植 平 印 刷 株 式 会 社 旭川市 9 条通 7 丁目左 2 号 電 話 (0166) 26-0161

上川教育研修センター

試そう上川の力で 創ろう上川の力で 生かそう上川の力を

第16次研究
3年次

学び合いで確かな学力を育てる学習指導の在り方
～思考力・判断力・表現力を育む指導と評価～